

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター発掘調査報告書第20集

小籠遺跡 I

— あけぼの道路建設工事に伴う発掘調査報告書 —

1995. 3

(財)高知県文化財団
埋蔵文化財センター

小籠遺跡 I

1995. 3

(財)高知県文化財団
埋蔵文化財センター

巻頭カラー 1



I区西半分完掘状況全景（東から）



I区東半分完掘状況全景（西から）

巻頭カラー 2



ST 3 遺物出土状況



SD 2 完掘状況

序

土佐は、海と山の国であります。南は黒潮の洗う太平洋に臨み、北は峻険な四国山地が迫り、その特徴的な風土は一種独特の歴史と文化を育んでまいりました。その姿は、遺跡や遺物のありかたにもそのまま投影されております。

小籠遺跡のある南国市は、田村遺跡や土佐国衙跡など著名な遺跡が数多く存在しており土佐の歴史の主要舞台となって来たところであります。今回の調査においても、弥生時代前期に遡る大溝や後期の竪穴住居が発見されるなど新たな事実が明らかとなりました。これら大地に刻み込まれた文化財の一つ一つは、先人達の偽らざる営みの足跡そのものであり、掛替えのない文化遺産として後世に伝え、また歴史研究の貴重な資料として活かしていかなければなりません。

「あけぼの道路」敷設に伴う発掘調査は、いま緒についたばかりであります。計画地の沿線にはいくつかの遺跡が存在しております。文化財保護部局としては、今後とも文化財の保護と調和の取れた開発を極力お願いして行く所存であります。関係方面の一層のご理解とご協力を頂きますように、よろしくお願い申し上げます。

平成7年3月

(財) 高知県文化財団 埋蔵文化財センター

所長 原 雅彦

例 言

- 1 本書は、高知県文化財団埋蔵文化財センターが平成6年度に実施した国道195号道路 改良（あけほの道路）に伴う小籠遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 小籠遺跡は、高知県南国市岡豊町小籠469他に存在する。
- 3 発掘調査は、平成6年7月27日から開始し、12月24日まで実施した。出土遺物の整理作業及び報告書作成の業務は平成7年3月31日まで行った。
- 4 調査面積
 - (1) 調査対象面積 46.000m²
 - (2) 調査面積 8.506m²（Ⅰ区：3353m² Ⅱ区：1161m²
Ⅲ区：1974m² Ⅳ区：2018m²）
- 5 調査体制
 - (1) 調査員
出原恵三（高知県文化財団埋蔵文化財センター 調査第3係長）
泉 幸代（ 同 主任調査員）
藤方正治（ 同 調査員）
この他、遺構の平面実測などについては、同第3係の前田光雄、佐竹寛の助力を得た。
 - (2) 総務担当
三浦康寛（高知県文化財団埋蔵文化財センター 主幹）
- 6 本書の編集は、出原が行い執筆については以下のように分担した。
 - 第Ⅰ章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境（藤方）
 - 第Ⅱ章 調査に至る経過と調査の方法（出原）
 - 第Ⅲ章 調査の成果（泉）
 - 第Ⅳ章 考 察（出原，泉）
- 7 発掘現場作業員は下記の方々である。今世紀最大の猛暑を厭わず黙々と発掘作業に従事して下さったことに対して心より厚くお礼申しあげる。
石川康人 小松栄一 小松 好 石川 功 森本幸栄 田代 勝 楠瀬正人 上野 淳
池川武夫 坂本憲彦 浜田孝康 寺田拓史 川村一弘 小松雪子 石川健史 松崎邦久
徳弘 純 浜田貴則 永田美津子 浜口 興 小倉 功 岡村佐由紀
- 8 遺物整理、報告書作成作業は下記の方々の協力を得た。記して感謝の意を表したい。
大原嘉子 山中美代子 岩本須美子 岡村真由紀 東村知子 浜田雅代 井沢久未
- 9 発掘調査の実施にあっては、高知県南国土木事務所の全面的な協力を得ることができた。特に道路第2班班長 山崎喜一郎、同技監 楠瀬清明、用地管理課 主幹 棚野真一、同主事 唐橋浩志 諸氏には種々便宜を図って頂いた。記して感謝の意を表したい。

本文目次

第Ⅰ章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境	1
第Ⅱ章 調査に至る経過	8
第Ⅲ章 調査の成果	12
1 基本層準	12
2 検出遺構と遺物	12
(1) 弥生，古墳時代の遺構と遺物	12
(2) 中世以降の遺構と遺物	25
(3) その他の遺構	45
第Ⅳ章 考 察	47

挿 図 目 次

- Fig. 1 : 高知県中央部の地質図及び地形図
- Fig. 2 : 長岡台地及び周辺の主な遺跡
- Fig. 3 : 主な遺跡の分布
- Fig. 4 : 調査区位置図
- Fig. 5 : 小籠 I 区 Grid 設定図
- Fig. 6 : 小籠 I 区全体区
- Fig. 7 : 小籠 I 区基本層準
- Fig. 8 : ST 1 平面実測図及び遺物出土状況
- Fig. 9 : ST 1 出土遺物実測図
- Fig. 10 : ST 2・3 平面実測図及び遺物出土状況
- Fig. 11 : ST 3 出土遺物実測図
- Fig. 12 : ST 4 平面実測図
- Fig. 13 : ST 3・4 出土遺物実測図
- Fig. 14 : SK 41 実測図
- Fig. 15 : SD 1 平面及びセクション図
- Fig. 16 : SD 1 出土遺物実測図
- Fig. 17 : SD 11 遺物出土状況及び SD 9・10・18・42 断面図
- Fig. 18 : SD 9・11 出土遺物実測図
- Fig. 19 : P 3 遺物出土状況及び P 5・12 平面実測図
- Fig. 20 : ピット出土遺物及び包含層出土遺物実測図
- Fig. 21 : SK 1～SK 5 実測図
- Fig. 22 : SK 5 出土遺物実測図
- Fig. 23 : SK 6～SK 11 実測図
- Fig. 24 : SK 11～SK 15 出土遺物実測図
- Fig. 25 : SK 12～SK 16 実測図
- Fig. 26 : SK 17 平面及び遺物出土状況実測図
- Fig. 27 : SK 17 出土の古銭
- Fig. 28 : SK 18～SK 21 実測図
- Fig. 29 : SK 22・23 実測図
- Fig. 30 : SK 24 実測図
- Fig. 31 : SK 25～30・32・36 実測図
- Fig. 32 : SK 31・33・35・37・38 実測図
- Fig. 33 : SK 34 平面及び遺物出土状況実測図
- Fig. 34 : SK 34 出土の古銭
- Fig. 35 : SK 39・40・SE 1 実測図
- Fig. 36 : SK 21～23・26・27・33・34・39・SE 1 出土遺物実測図
- Fig. 37 : SD 3・12～17・21・28・44 セクション及びエレベーション図
- Fig. 38 : SD 3・13・28 出土遺物実測図
- Fig. 39 : SD 12・17・28・38 出土遺物実測図
- Fig. 40 : P 14・17・19・20 出土遺物実測図
- Fig. 41 : SX 1・3 実測図

写真図版目次

- PL 1 : I 区調査前全景 (東から), 同上 (西から)
- PL 2 : I 区南北セクション西壁, 同上
- PL 3 : I 区調査区北壁セクション, ST 1 検出状況
- PL 4 : ST 1 遺物出土状況, 同上
- PL 5 : ST 1 遺物出土状況 (10), ST 3 完掘状況
- PL 6 : ST 3 遺物出土状況, 同上 (12・14)
- PL 7 : ST 3 遺物出土状況 (壁際の土器), 同上セクション
- PL 8 : 壁溝セクション, ST 4 完掘状況
- PL 9 : SK 4 完掘状況, SK 6 半截状況
- PL10 : SK 7 半截状況, SK 8
- PL11 : SK 9 完掘状況, SK 10半截状況
- PL12 : SK 10完掘状況, SK 13半截状況
- PL13 : SK 13完掘状況, SK 14遺物出土状況
- PL14 : SK 15半截状況, SK 16完掘状況
- PL15 : SK 17遺物出土状況, 同上 (古銭・白歯出土状況)
- PL16 : SK 18集石出土状況, SK 24集石出土状況
- PL17 : SK 24粘土張床断面, SK 24完掘状況
- PL18 : SK 35完掘状況, SK 37完掘状況
- PL19 : SE 1 底の礫出土状況, SE 1 完掘状況
- PL20 : P 3 遺物出土状況 (49・50), 同上拡大
- PL21 : SD 1 南半分完掘状況, SD 1 中央バンク北壁
- PL22 : SD 1 北壁セクション, SD 1 稜線部分
- PL23 : SD 1 西壁立ち上がり, SD 3 セクション
- PL24 : SD 3 セクション, SD 3・5 完掘状況
- PL25 : SD 11遺物出土状況, SD 13セクション
- PL26 : SD 13遺物出土状況 (84), SD 16セクション
- PL27 : SD 17セクション, SD 28セクション
- PL28 : I 区西半分完掘状況 (西南から), 同上 (東から)
- PL29 : I 区東半分完掘状況 (西から), 同上 (南から)
- PL30 : SX 1 半截状況, SX 2 半截状況
- PL31 : ST 1・3, P 3 出土の土器
- PL32 : SD 1・9・11・13, P 3 包含層出土の土器
- PL33 : ST 1・3・4, SD 1, P 12出土の土器
- PL34 : SK 5・11~15・21~23・26, SE 1, SD 3, P 14・17・19・20出土の近世陶磁器
SK 13・14・21・34, SE 1 出土の近世陶器
- PL35 : SK 17・34出土の古銭

第 I 章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

四国地方は地質的に中央構造線以南、三波川帯・秩父帯・四万十帯の各付加帯によって構成されている。三波川帯は熱変成を受けた岩類が主に存在しており、南端には御荷鉾緑色岩類の分布が見られる。秩父帯は主に石炭紀・ペルム紀・三畳紀・ジュラ紀に形成された岩相によって構成されており、ジュラ紀において付加帯と成ったものである。又、この南に存在する四万十帯は主に白亜紀に成立したものであり、秩父帯とは仏像構造線によって隔されている。

更新世は寒冷期である氷期と温暖期である間氷期を幾度か繰り返した時期である。これら付加帯を構成する岩類によって形成された山間部は、氷期に於いては周氷河環境の下に破碎作用を受け、間氷期においては河川による下刻・運搬作用を受けたものと考えられる。

物部川は上・中流域においてその流路を秩父帯と四万十帯北帯に置いている。更新世後期の初めは比較的温暖な時期である。この最終間氷期から最終氷期に掛けて山間部よりもたらされた砂礫は遷移点を越えた部分に堆積を始め円弧状の扇状地を発達させた。やがて、最終氷期における気候の冷涼化は、氷河の発達を促し、海水面の低下をもたらした。海水面の低下に伴いこの扇状地は河川の浸食を受けることとなる。後氷期に至って海水面は再び上昇を始め、下刻された谷部を河成及び海成の堆積物が埋めて行くが、この扇状地の一部は台地状に当時の姿を留め今日に至る。

現在、長岡台地の北部には国分川水系による扇状地や自然堤防帯などが形成されており、西部には地籍図等の地割り形態からも明確な流路跡の存在する沖積地が広がる。南部には物部川による扇状地や自然堤防帯、海岸線に発達した浜堤などが見られる。

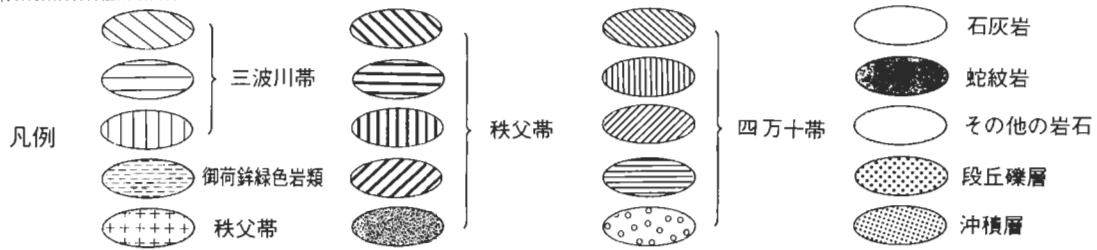
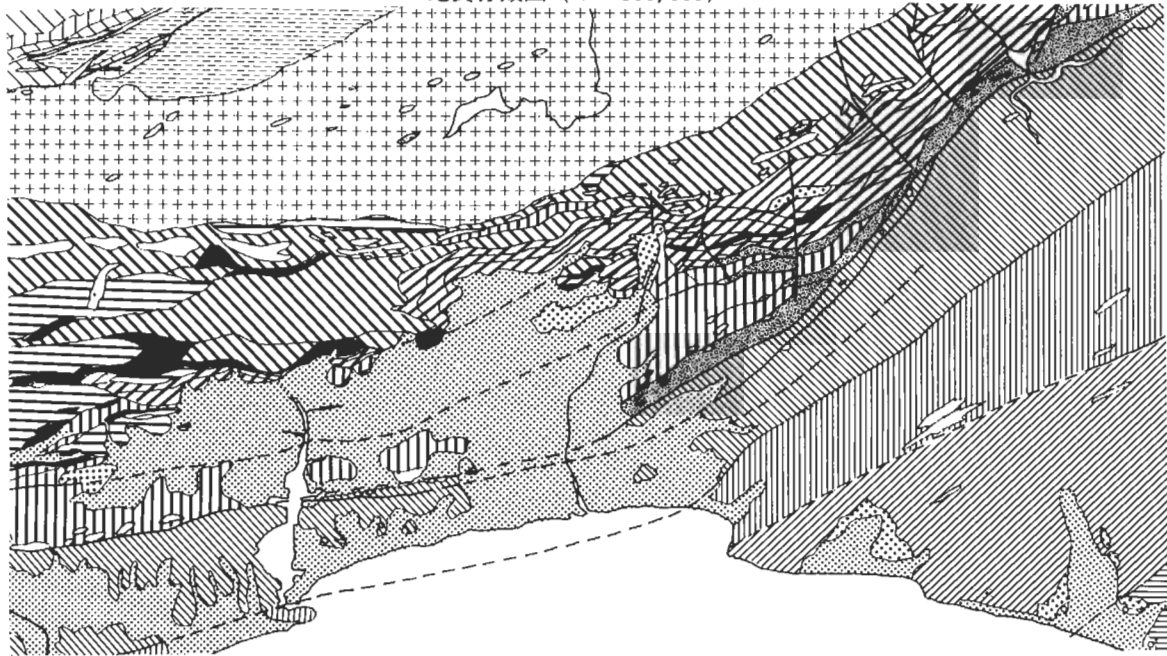
小籠遺跡は標高 6 m～7 m に存在しており、発掘調査に際しても耕作土下からは砂礫層やかたつて網状に発達していたと考えられる流路跡が確認されている。この砂礫層に含まれる砂岩は表面がやや風化を受けており、流路跡からは最終充填土であるシルト層が検出されている。これらの事から小籠遺跡域は更新世形成の扇状地が沖積層下に没するやや上位、長岡台地の先端部に位置するものと考えられる。

2. 歴史的環境

旧石器時代の所産であるチャート製の細石刃石核 1 点が高間原 1 号墳の玄室床面から出土しているが、これは長岡台地及びその周辺では最も古い遺物である。

縄文時代の遺跡としては、早期押型文土器や多量の石鏃を出土した飼古屋岩陰遺跡が北部山間部穴内川流域に存在する。ここでは、中期船元Ⅱ式土器や後期彦崎Ⅱ式土器なども見られた。台地の西部には奥谷南遺跡や栄工田遺跡が存在するが、これらは枝状に張り出す尾根に沿う谷間に発達した遺跡である。前者からは堅果類を貯蔵した土坑が検出されており、前期から中期末の遺物が出土している。又、後者からは後期から晩期に至る土器が多量の磨製石斧と共に出土している。東部物部川左岸の段丘上には林田シタノヂ遺跡が存在するが、ここではピット状遺構から後期初頭の中津式土器が出土している。南部沖積地に立地する田村遺跡群では後期中葉彦崎Ⅱ式土器と石鏃と

地質分類図 (1 : 300,000)



地形分類図 (1 : 300,000)

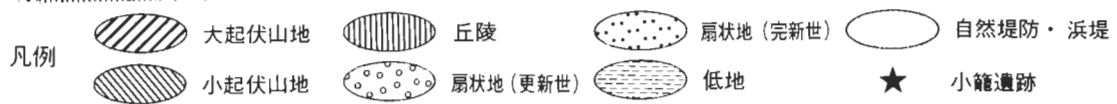
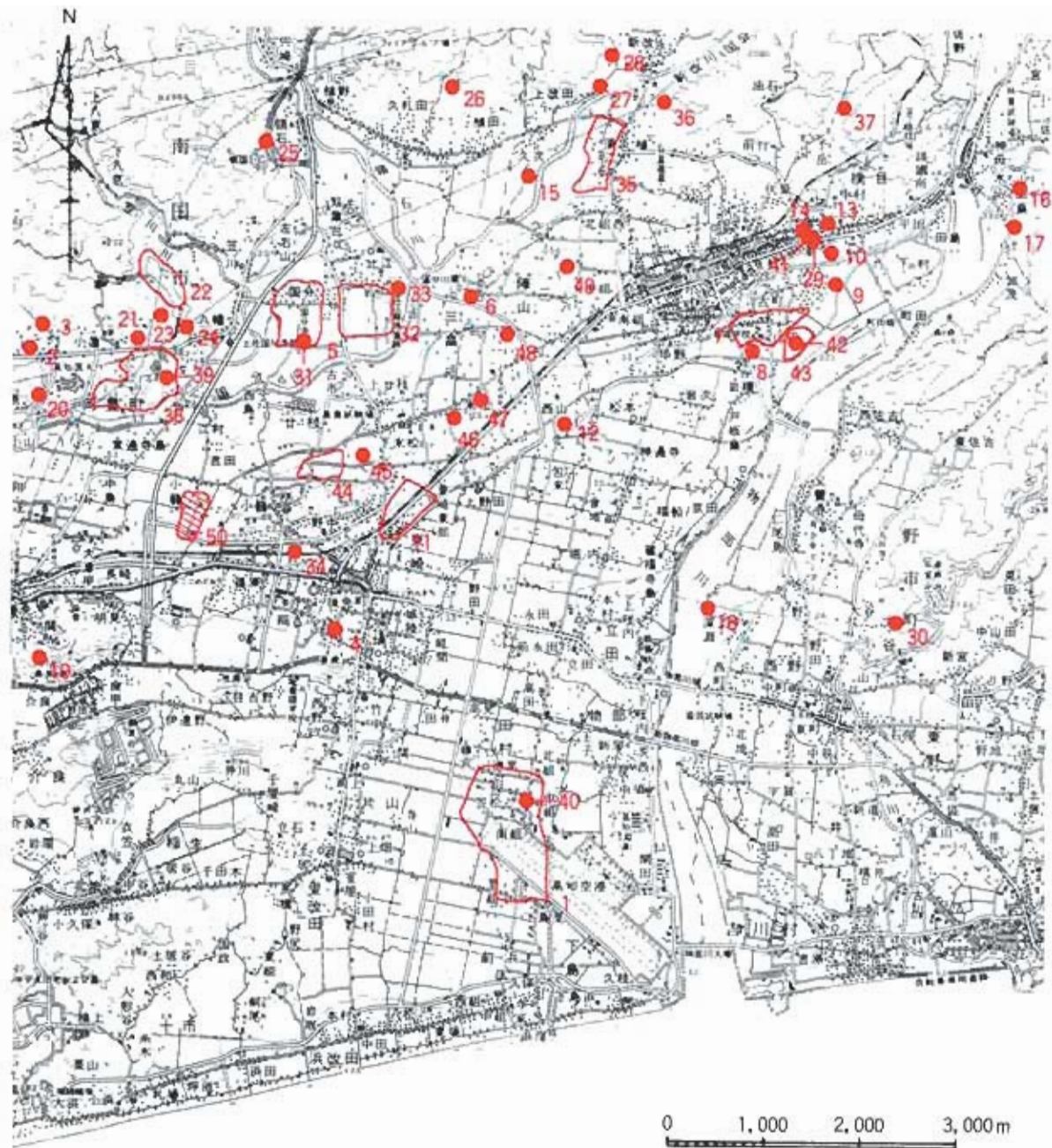


Fig. 1 高知県中央部の地質及び地形分類図



No	遺跡名	No	遺跡名	No	遺跡名	No	遺跡名	No	遺跡名
1	田村遺跡群	11	東崎遺跡	21	小蓮古墳	31	土佐国分寺跡	41	大塚遺跡
2	栄エ田遺跡	12	金地遺跡	22	船岩古墳群	32	土佐国衙跡	42	高柳土居城跡
3	奥谷南遺跡	13	ひびのき遺跡	23	狭間古墳	33	比江庵寺跡	43	高柳遺跡
4	大篠遺跡	14	ひびのきサウジ遺跡	24	蔵本2号墳	34	野中庵寺跡	44	土島田遺跡
5	国分寺遺跡群	15	久次遺跡	25	ロミノラ谷古墳	35	須江上段遺跡	45	久保遺跡
6	三島遺跡	16	シタノヂ遺跡	26	高松古墳	36	タンガン窯跡	46	末松遺跡
7	原遺跡	17	林田遺跡	27	新改古墳	37	長谷山窯跡群	47	五反地遺跡
8	原南遺跡	18	深淵遺跡	28	西ノ内2号墳	38	岡豊城跡	48	明神遺跡
9	稲荷前遺跡	19	高間原1号墳	29	伏原大塚古墳	39	西谷遺跡	49	浜道の西遺跡
10	楠目遺跡	20	藤原山東1号墳	30	大谷古墳	40	田村城跡	50	小籠遺跡

Fig. 2 長岡台地及び周辺の遺跡分布図

して使用された打製石斧が多量に出土している。これらの事から山麓を中心とした場所に縄文時代の遺跡が残されている可能性が強い。

田村遺跡群は弥生期を通しての拠点的母村集落と考えられている。前期においては竪穴住居群と掘立柱建物群の存在や水田跡などが確認されている。中期に至っては集落の西方への移動が窺われ、土器以外にも、勾玉、管玉、ガラス小玉などが出土している。

田村遺跡群以外に中期末から後期初めにかけて展開を見せ始める遺跡が在る。西部の奥谷南遺跡では尾根斜面の標高40m～60mに高地性集落が存在する。台地中央部やその北側に存在する三島遺跡や国分寺遺跡、比江廃寺跡から第Ⅳ様式併行期の遺物が見られている。東部では“神の壺”で有名な龍河洞遺跡が存在するが、物部川右岸の稲荷前遺跡などでも竪穴住居跡が検出されている。又、原遺跡や原南遺跡からは竪穴住居跡と共に環濠と考えられる溝や掘立柱建物跡等集落を構成する遺構も発見されている。その北部台地上にも中期土器の出土を見たひびのき遺跡群が存在している事から、当該期における平野部及び山麓部への遺跡の拡がりが見られる。

後期後半は田村遺跡群の衰退期と考えられているが、それに伴う様に台地上またはその周辺地域に展開を見せ始める遺跡が多く成る。西部には奥谷南遺跡において石室墓と石を投げ込んだ土壙墓が検出されている。中央部には東崎遺跡が存在している。ここからは、竪穴住居跡13棟、掘立柱建物跡、壺棺墓、方形周溝墓、溝跡、柱穴などが検出されており、後期後半から古墳時代初頭にかけての拠点集落と考えられる。この周辺には三島遺跡や比江廃寺跡、金地遺跡、久次遺跡などの遺跡が同時期に存在するが住居跡の密度など集落内の形態に違いが認められる。

東部ではヒビノキ式土器の標式遺跡であるひびのき遺跡が存在しており、竪穴住居跡7棟、土坑等が検出されており、集落の存在する可能性がある。又、この周辺にも楠目遺跡、鏡野中学校校庭遺跡などにおいて、その拡がり確認されている。ひびのきサウジ遺跡では、弥生後期後半の竪穴住居跡5棟を検出しており、この内1棟は祭祀的意味をもつものと考えられている。又、物部川左

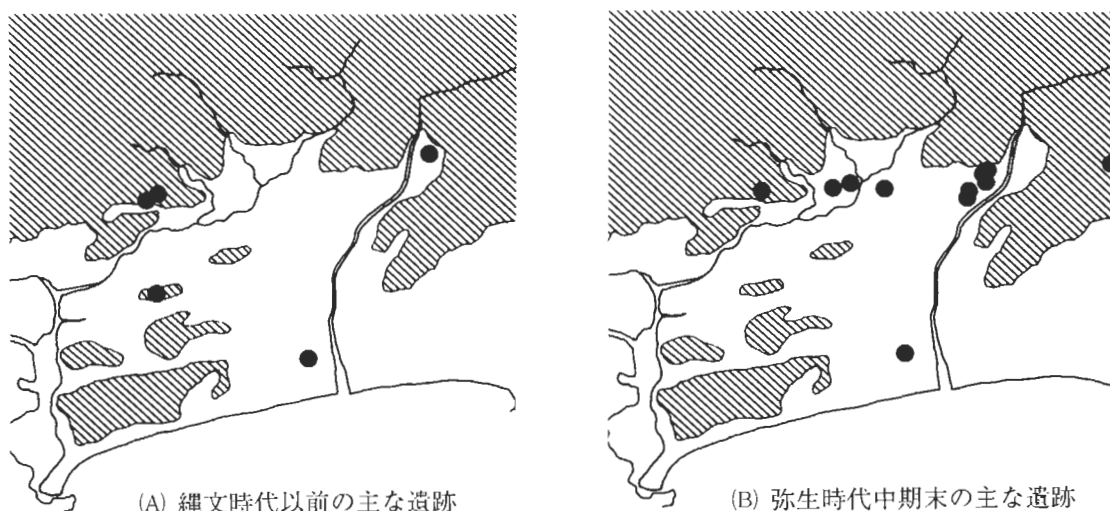


Fig. 3-1 主な遺跡の分布

岸には林田遺跡、深淵遺跡が存在する。前者からは、竪穴住居跡5棟が検出され、土器と共に鉄鏃が出土する。又、後者からは弥生後期中葉と末の竪穴住居跡等が検出され、壺棺なども出土している。

古墳は平野部に面する山麓尾根部や独立丘陵上にその分布が見られるが、多くは後期に位置づけられる群集墳である。西部に位置する長畝3号墳は4世紀後半において弥生時代後期末の墳丘墓に手を加えて整形された古墳と考えられ、主体部として2基の土壙墓が存在する。5世紀中葉と6世紀前半に墳丘の改変と埋葬施設の構築が認められるものである。狭間古墳は5世紀代の古墳であり、組み合わせ式木棺が3基検出されている。東部には5世紀末から6世紀初頭に築造されたと考えられる伏原大塚古墳が存在するが、この古墳は一辺34mを測る大型方墳であり、6世紀後半から7世紀前半と7世紀後半には追葬が行われたと考えられている。又、この古墳の周溝からは須恵器の円筒埴輪が出土している。

古墳築造と同時期に機能していたと考えられる住居跡等は、土佐国衙跡、ひびのきサウジ遺跡、深淵遺跡で検出されているが、後期のものが主でありその数も僅かである。

古代の遺跡としては、土佐国衙跡において官衙を構成すると考えられる掘立柱建物群を検出しているが、政庁に係わる遺構は確認されていない。又、周辺には土佐国分寺跡や比江廃寺跡が存在し白鳳期から奈良時代の遺構、遺物を検出している。この他の官衙、寺院に関係する遺構等を確認し得た遺跡としては、平安時代の掘立柱建物跡2棟と溝跡を検出した稲荷前遺跡、野中廃寺や灰釉陶器や布目瓦を出土した林田遺跡、墨書土器や硯等出土した深淵遺跡が存在する。又、寺院などに瓦を供給したタンガン窯跡や長谷山窯跡群が東北部山麓に存在する。

古代における庶民の生活を窺い知るものは少ない。ひびのきサウジ遺跡では10世紀後半から11世紀前半のものと考えられる井戸と厨房的存在の掘立柱建物跡が検出されており、多量の黑色土器が

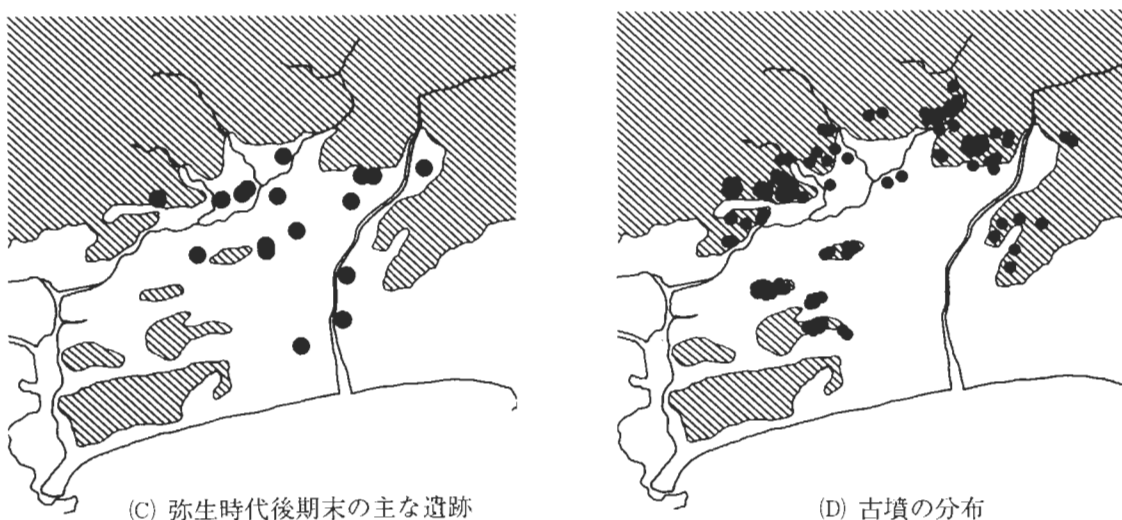


Fig. 3-2 主な遺跡の分布

この井戸から出土している。田村遺跡群では10世紀から11世紀にかけての掘立柱建物群や柱穴群が存在しており、田村庄に関わるものと考えられている。

中世における遺跡の分布は平野部の城館跡や周辺山麓部の山城跡などに代表されるようにほぼ全域に渡る。これらに伴い生活域も拡散し、ほぼ現在我々が目にする様な景観の基礎が形作られた。田村遺跡群では、溝に囲まれた屋敷跡群が存在しており、3時期に分けられる。南北朝期に機能したもの、守護代細川氏入城後に機能したもの、長宗我部氏台頭に伴って機能したものと考えられており、石組みの井戸や屋敷墓を持つものである。南部の田村城跡は14世紀から15世紀における細川氏の居館であるが、城郭は3重の濠で囲まれた複合複郭である。郭内には区画溝や掘立柱建物跡が存在しており、外濠の幅は4m～5m、深さ3.5mを測り、この中からは土師質土器や護符が出土している。東部のひびのき遺跡群では山田氏の居城であったとされる楠目城跡に関わる15世紀から16世紀初頭の掘立柱建物跡や溝跡、中世墓が確認されており、初期戦国城下町を構成していた屋敷や区画溝等の跡と考えられている。西部に位置する岡豊城跡は長宗我部氏の居城であるが、礎石建物跡、石敷遺構、土塼、溝、土塁石垣、階段状遺構を検出しており、出土遺物からこの城の機能した時期を15世紀後半からのおよそ100年間としている。

近世において長岡台地上の景観を決定付けたのは野中兼山による用水路の建設と新田の開発である。寛文4年(1664年)の山田堰完成や上井川、中井川、舟入川の貫通は、それまでの畑作が中心であり、荒地の多かった台地上に水田耕作を可能にした。また、兼山は郷士の登用によって新たに灌漑可能と成ったこの地に、西野地や稲吉などの新田を開発する。後に設けられた御免町は舟入川の水運を利用して台地を含む平野部の中心として発達する。

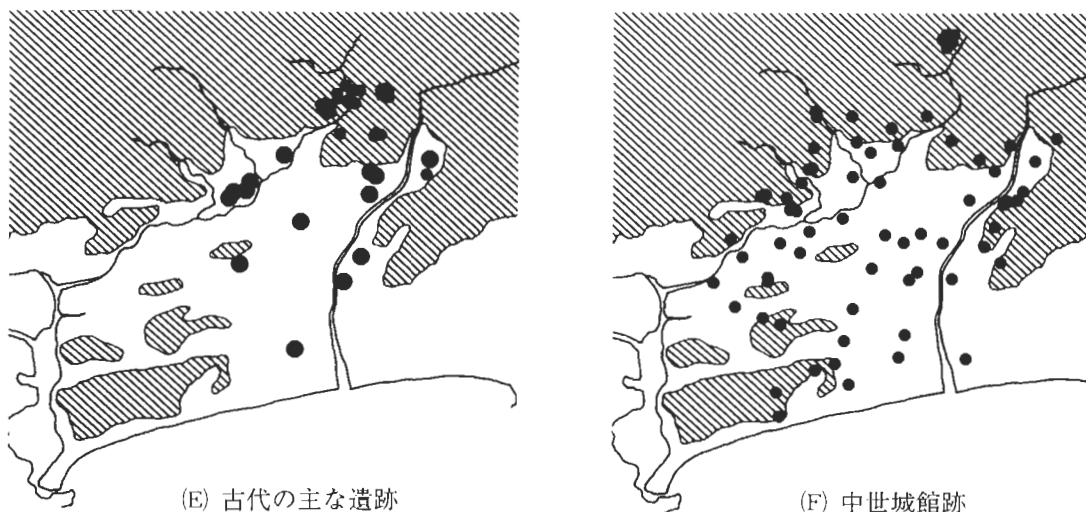


Fig. 3-3 主な遺跡の分布

参考文献

- 平 朝彦 『日本列島の誕生』1991年 岩波新書
- 森田尚宏, 詫間一之 『銅古屋岩陰遺跡』1983年 高知県教育委員会
- 松村信博, 小嶋博満 『奥谷南遺跡 記者発表資料』1995年 (財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 松村信博, 江戸秀輝 『栄エ田遺跡 発掘調査概要報告書』1994年 (財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 山崎正明 『林田シタノヂ遺跡 II』土佐山田町教育委員会
『田村遺跡群 第5分冊』他 高知県教育委員会
- 吉原達生, 森田尚宏 『稲荷前遺跡』1990年 土佐山田町教育委員会
- 廣田典夫 『原遺跡 II』1984年 高知県教育委員会
- 出原恵三 『原南遺跡』1991年 (財) 高知県文化財団
- 岡本健児, 廣田典夫 『ひびのき遺跡』1977年 土佐山田町教育委員会
- 山本哲也 『楠目遺跡』1988年 土佐山田町教育委員会
- 出原恵三 『鏡野中学校校庭遺跡』1984年 土佐山田町教育委員会
- 高橋啓明 『ひびのきサウジ遺跡』1990年 土佐山田町教育委員会
- 森田尚宏 『林田遺跡』1985年 土佐山田町教育委員会
- 高橋啓明, 出原恵三, 吉原達生 『深淵遺跡』1989年 野市町教育委員会
- 廣田佳久 『長畝3号墳 現地説明会資料』1994年 (財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 廣田佳久 『伏原大塚古墳』1993年 土佐山田町教育委員会
- 廣田佳久 『土佐国衙跡 第11集』1991年他 高知県教育委員会
- 出原恵三 『比江廃寺跡発掘調査概報』1991年 高知県教育委員会
- 岡本健児, 廣田典夫, 西 和彦 『比江廃寺塔跡』1970年 高知県教育委員会
- 岡本健児, 廣田典夫 『野中廃寺跡』1963年 高知県教育委員会
- 曾我貴行 『ひびのきサウジ遺跡 II』1992年 (財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 森田尚宏, 松田直則, 岡本健児 『岡豊城跡』1990年 (財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 森田尚宏 『岡豊城跡 II』1992年 (財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター
『南国市史 下巻』1982年 南国市史編纂委員会
- 森田尚宏 『南国市の遺跡』1990年 南国市教育委員会
- ※ 尚, Fig. 1掲載の地図作成には, 「高知県地質鉱産図」(高知県商工課)及び「土地分類図(高知県)」(経済企画庁)を参考にした。

第Ⅱ章 調査にいたる経過と調査の方法

1. 調査にいたる経過

国道195号線は、高知と徳島を東西に結ぶ最短の幹線道路であり総延長217kmを測る。昭和40年の国道昇格以来、幾たびの改修整備がなされ今日に至っている。その間、物資の輸送は勿論のこと、東西の産業、経済、文化の発展に重要な役割を果たして来た。高知県東部、別けても物部川沿線においては地域の動脈として人々の生活を支え、地域社会や文化の形成に果たして来た役割の大きさには計り知れないものがある。更に近年、高知市に見られる一点集中型の都市構造の進行と共に、近郊の南国市や土佐山田町などにおいては高知市のベッドタウン化が急速に促進されつつある。このような劇的とも言うべき地域構造の変化は、交通網にも多大な影響を及ぼしている。すなわち交通渋滞は慢性化の一途をたどり、情報、物資輸送の遅滞は人々の生活の潤いを疎外し、円滑な産業の充実発展にとっても深刻な問題となってきた。国道195号線に置いても例外ではない。東部地域の発展、利便性の向上のためには交通網の整備は欠かせない状況となっている。

国道195号線改良、あけぼの道路敷設計画は、このような背景のもとに県政の重要施策として登場してきたのである。南国市中島から土佐山田町中組との間を結ぶ6.7kmのあけぼの道路は東部地域における生活環境の整備、諸産業の発展に資するだけでなく、現在進行中の本四連絡道路（明石～鳴門ルート）が開通すると関西圏と高知とを結ぶ交通輸送体系の幹線として、県全体の発展を促進することになる。これまでの流通構造の大きな変化を意味し、この東西ルートがこれまでになく重要な意味を有するようになる。本県への交通路は、巨視的に見れば原始古代以来、瀬戸内と結ぶ南北ルートと近畿との東西ルートとが交互にその命脈を果たしてきた。そこからもたらされたさまざまな情報や文化は、本県固有の文化と融合し、その特徴的な変遷はさながら本県の歴史を形成して来たと言っても過言ではない。この東西交通路の完成も本県にとって歴史的な意味を持つことになるであろう。あけぼの道路はその端緒として位置付けることができる。

あけぼの道路は、高知平野の東北部に広がる長岡台地を貫いて走る。当地域は前章でも述べたように高知県史の主要舞台の一つであり、県内でも有数の遺跡の周密地帯である。これらの遺跡の一つ一つは、言うまでもなく私たちの祖先がその営みを大地に刻み込んだ歴史そのものであり、地域の歴史を包蔵する掛替えのない文化遺産である。文化財保護の立場から高知県教育委員会は、高知県南国土木事務所と協議を重ね道路敷設計画においては極力遺跡を避けることを要請すると共に、遺跡内及びその付近が計画地内に入る場合は記録保存のための緊急調査を実施することが必要であり、埋蔵文化財に対する理解と協力を求めた。

平成6年4月27日付けで、高知県南国土木事務所長安岡亮一より高知県教育委員会を經由して、高知県文化財団埋蔵文化財センター所長原 雅彦に対して、国道195号道路改良（あけぼの道路）に伴う小籠遺跡、土島田遺跡発掘調査業務の委託について依頼があった。これを受けて平成6年6月27日、高知県と高知県文化財団埋蔵文化財センターとの間で委託契約を締結し、同埋蔵文化財センターが発掘調査を実施することになった。

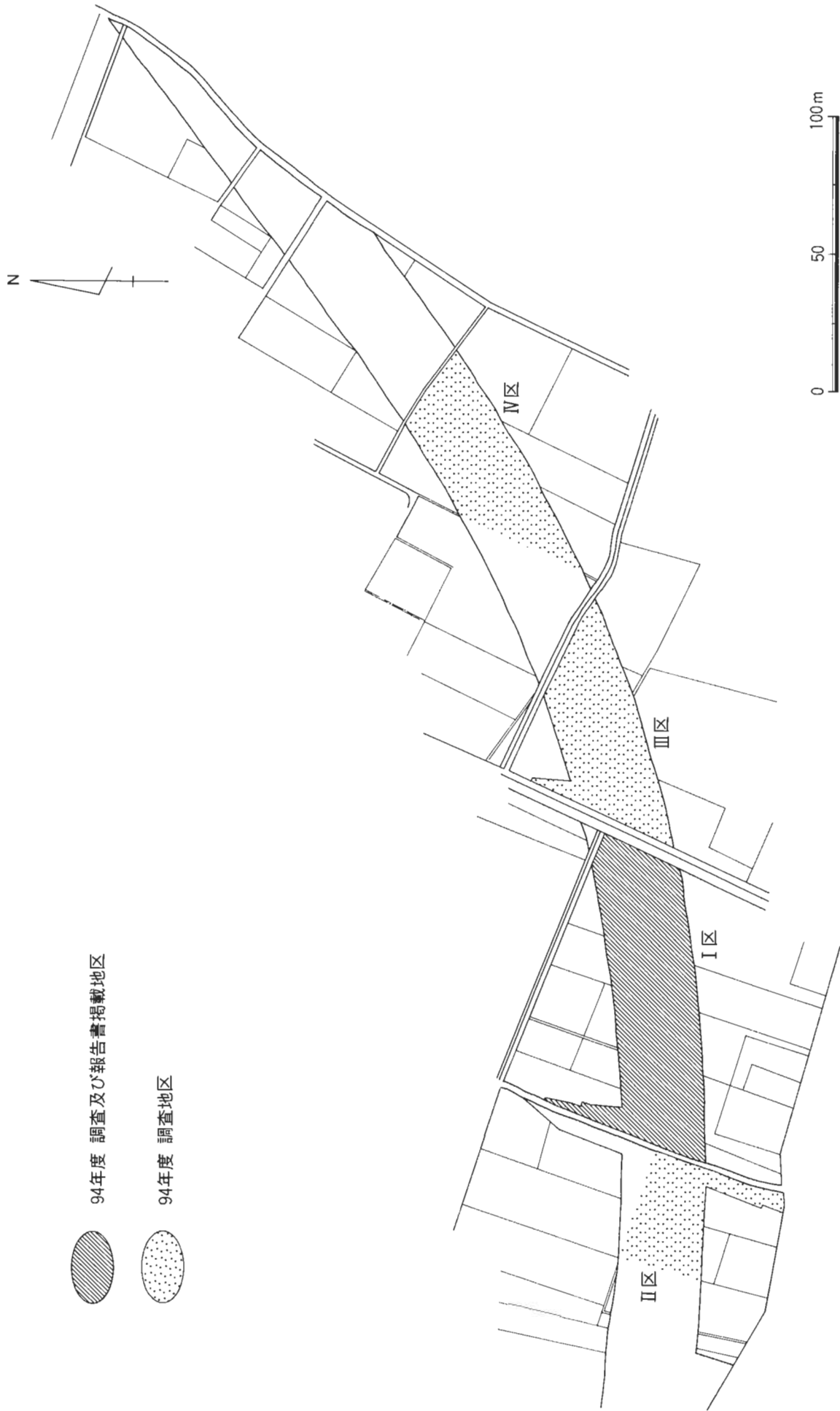


Fig. 4 調査区位置図

主点Point	X坐标	Y坐标	桩高
T-21	64048.012	12054.339	6m75cm 6mm
T-22	64032.003	12110.404	6m78cm 8mm
T-23	64081.409	12147.710	6m88cm
T-24	64086.236	12190.351	7m45cm 1mm

12060.000 | 12100.000 | 12140.000

X 64100.000

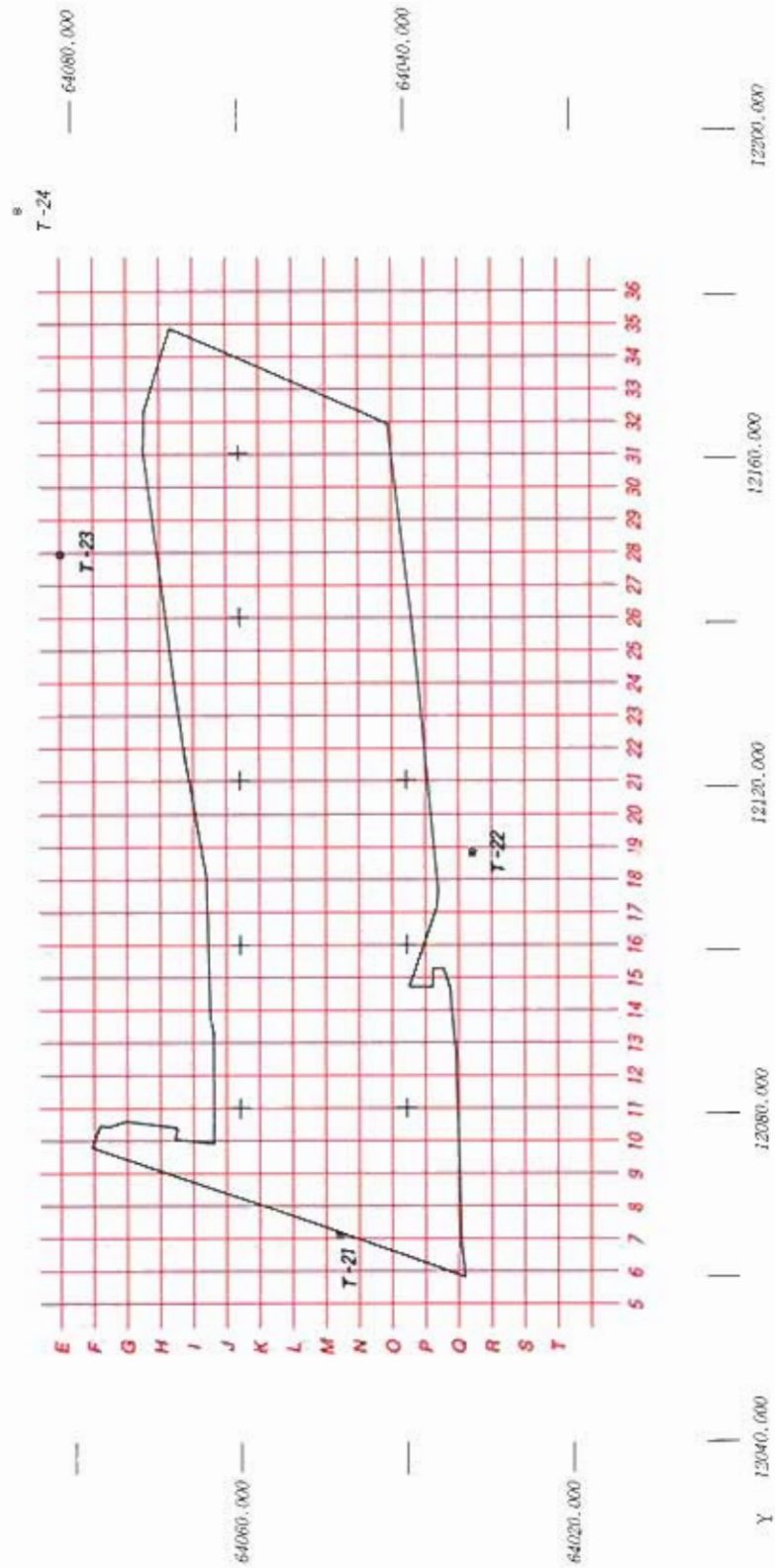


Fig. 5 小籠I区Grid設定図 (1 : 900)

2. 調査の方法

小籠遺跡の道路計画地内では、弥生時代や中世の遺物が地表散布しており、当該期の遺構が比較的浅いところに存在していることは容易に判断することができた。したがって当遺跡については試掘調査は行わず平成6年7月28日から本格的な調査に入った。土島田遺跡については、用地買収などの関係もあり平成6年度事業としては着手することが困難となった。

小籠遺跡は現在の土地区画をもとに、Fig. 4で示したようにⅠ区からⅣ区まで調査区を設定し、Ⅰ区から調査を開始した。Ⅱ区は当初調査の対象地外であったが、Ⅰ区の西端より竪穴住居が検出されたことから急遽調査区内に入れ調査を実施することになった。しかしⅡ区については作物などの関係もあり、平成6年度としては部分的な調査にとどめⅢ・Ⅳ区に移動した。

各調査区ともに遺構検出面の深度は浅く耕作土直下である。調査の手順としては、耕作土を重機を用いて除去した後、手作業で進めた。包含層遺物の取り上げ、遺構の実測については公共座標に基いて調査区全体に4m方眼をかけ、東西方向に1. 2. 3. . . . 南北方向にA. B. C. . . . のNo.を付して、地点の記録および実測を行った。平面実測および地層断面図については、20分の1を基本に適宜任意の縮尺を用いた。遺構のナンバーリングについては、便宜上各調査区毎に付したが、最終的には遺跡毎に通しナンバーを付ける予定である。

Ⅰ区の調査面積は3353m²、Ⅲ区の調査面積は1974m²である。Ⅱ区は対象面積3116m²のうち1161m²を、Ⅳ区は対象面積5822m²のうち2018m²について発掘調査を実施した。

第Ⅲ章 調査の成果

1. 基本層準

基本層準は、調査区西半分の北壁の東西セクションと中央部の南北セクションで観察した。基本的な層準は以下の通りである。

V層：茶黄色粘質土中に1～10cm大の砂岩礫を多く含む。長岡台地を形成する基盤層上層である。

IV層にはほぼ整合で覆われているが、調査区東部では中～近世の遺構検出面となっている。

IV層：暗茶色粘質土で砂礫をほとんど含まない。層厚は30～35cm前後を測るが、調査区東部では認められない。削平されている。無遺物層である。弥生時代～中世の遺構検出面となっている。

Ⅲ層：黄茶色シルト層でブロック状に認められる。テフラの2次堆積層である。

Ⅱ層：黒色～黒褐色粘質土である。調査区のはほぼ全面に認められるが、東部においては削平によりほとんど認められない。層厚は0～25cmを測る。弥生時代～近世の遺物包含層となっている。

I層：耕作土である。層厚25cm前後を測る。

2. 検出遺構と遺物

(1) 弥生・古墳時代の遺構と遺物

① 竪穴住居

ST 1 (Fig. 8・9)

調査区の西北端に位置する。半分以上調査区外のため、全体の形が明らかではないが、隅丸方形の平面形を有していると思われる。残存状況はあまりよくなく、検出面から床面までの深さは10cm～14cmであり、埋土は黒褐色粘質土単一層で炭化物も含まれている。また一部に幅14～16cm、深さ13cmの壁溝が認められた。長さは1.5mで、住居の南側に位置しており、溝内より数点の土器が出土している。その壁溝の近くには、直径32cm、深さ約11cmのほぼ円形の柱穴と考えられるピットが見られる。また図示したように床面及びその直上から比較的まとまった遺物が出土している。これらは出土状況から見てST 1に伴うものとしてよい。遺物の内訳はほぼ完形の鉢が3点(8～10)、砥石1点(11)、この他壺・甕の胴部・底部片が出土しているが、後者が圧倒的に多い。ST 1は、弥生後期末、ヒビノキⅡ式の段階に比定することができる。

ST 2 (Fig. 10)

ST 2は調査区の西端に位置する。住居のほとんどが道路になっており、北東部は攪乱のため検出不可能であったが、南北3.04m、東西50cmまで確認できた。残存状況もあまりよくなく、検出面から床面までの深さは8～26cmであり、平面形は円形か隅丸方形か、明らかではないが円形の可能性が高い。壁溝や柱穴などは検出できなかった。埋土は黒褐色粘質土単一層である。埋土中より弥生後期後半～末の土器片が出土しているが図示できるものはない。

ST 3 (Fig. 10・11・13)

ST 3は、ST 1の南5.2mの位置にある。西側半分が調査区外に出ているが、直径4.5m前後の円形ないしは隅丸方形の竪穴住居と考えられる。外縁に2条の壁溝が巡っている。壁溝の規模は内・

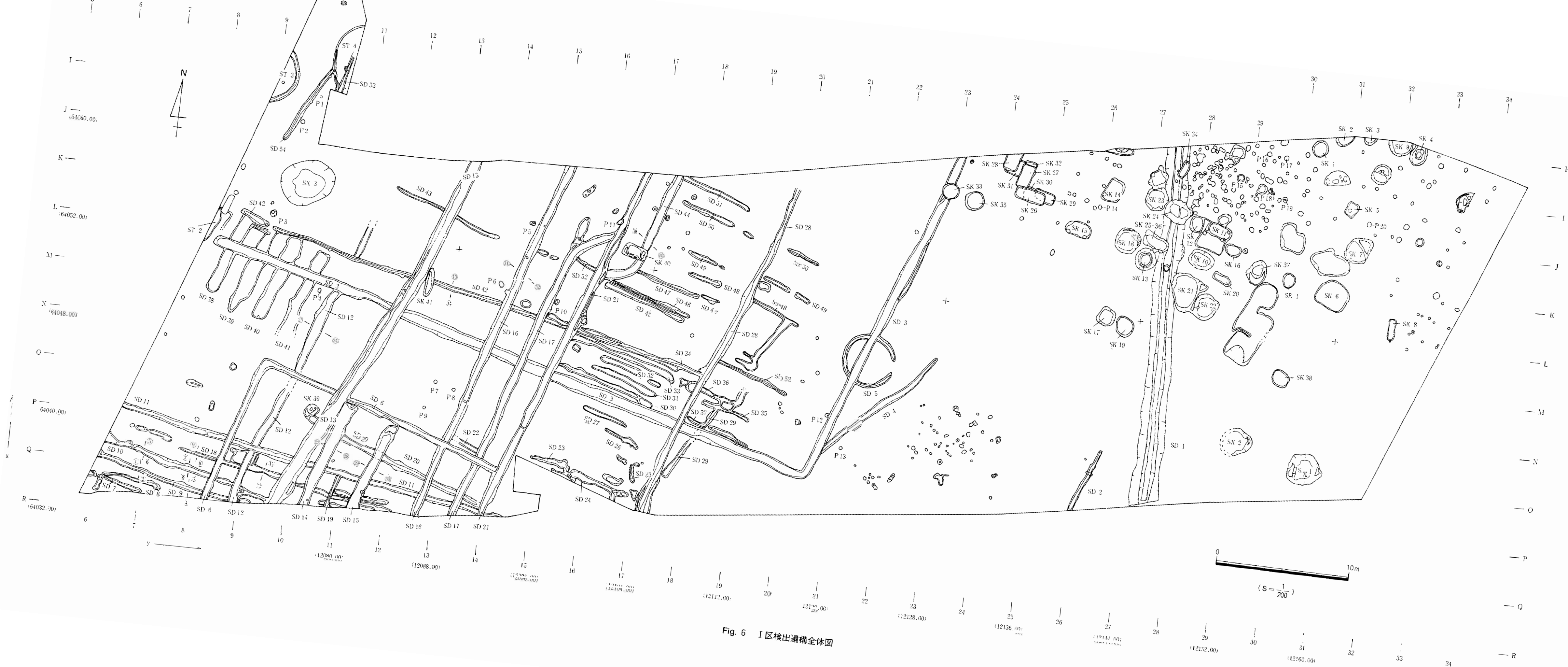
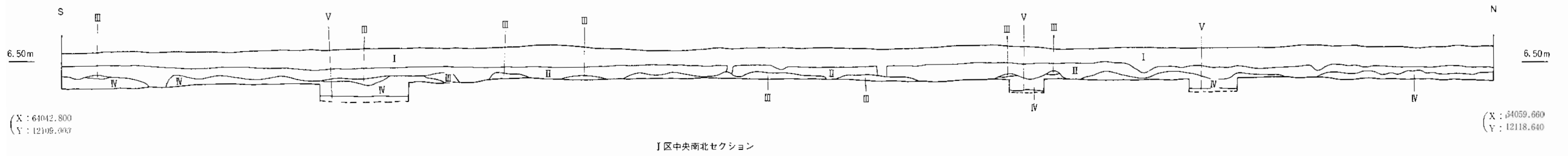
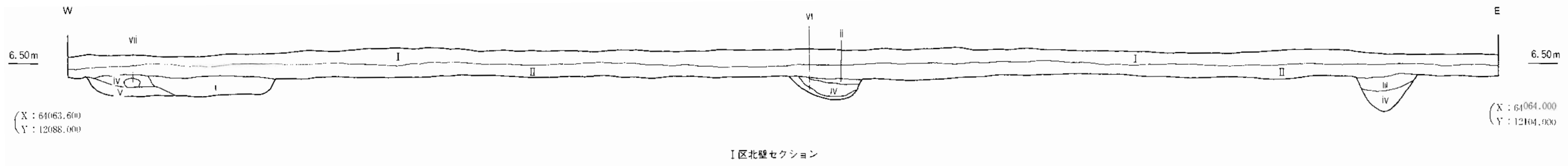


Fig. 6 I区検出遺構全体図



- 層準
- I層：耕作土
 - II層：黒色粘質土
 - III層：黄茶色粘質土（シルト質）
 - IV層：暗茶色粘質土
 - V層：茶黄色粘質土（1～10cm大の礫を含む）

- 遺構埋土
- i：略灰色土（小円礫・黄褐色土を含む）
 - ii：黒色土（遺物を含む）
 - iii：黒色土（茶褐色土を含む）
 - iv：黒色土（茶褐色土を多く含む）
 - v：黒色土（茶褐色土を少量含む）
 - vi：黒褐色土（地山崩壊土を含む）
 - vii：生物攪乱が認められる。



Fig. 7 I区基本層準

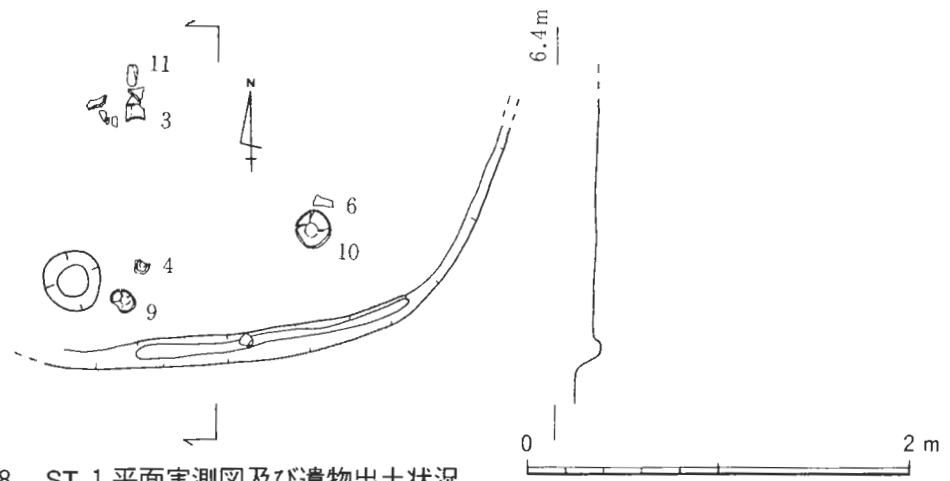


Fig. 8 ST 1 平面実測図及び遺物出土状況

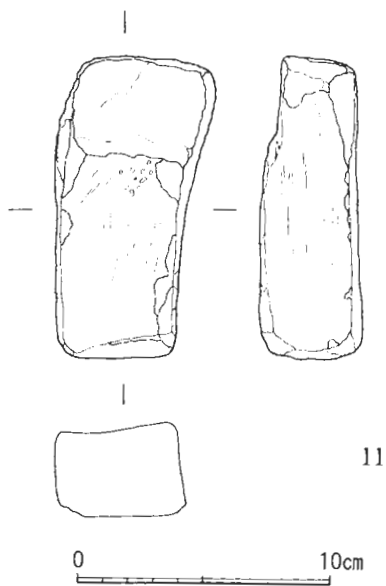
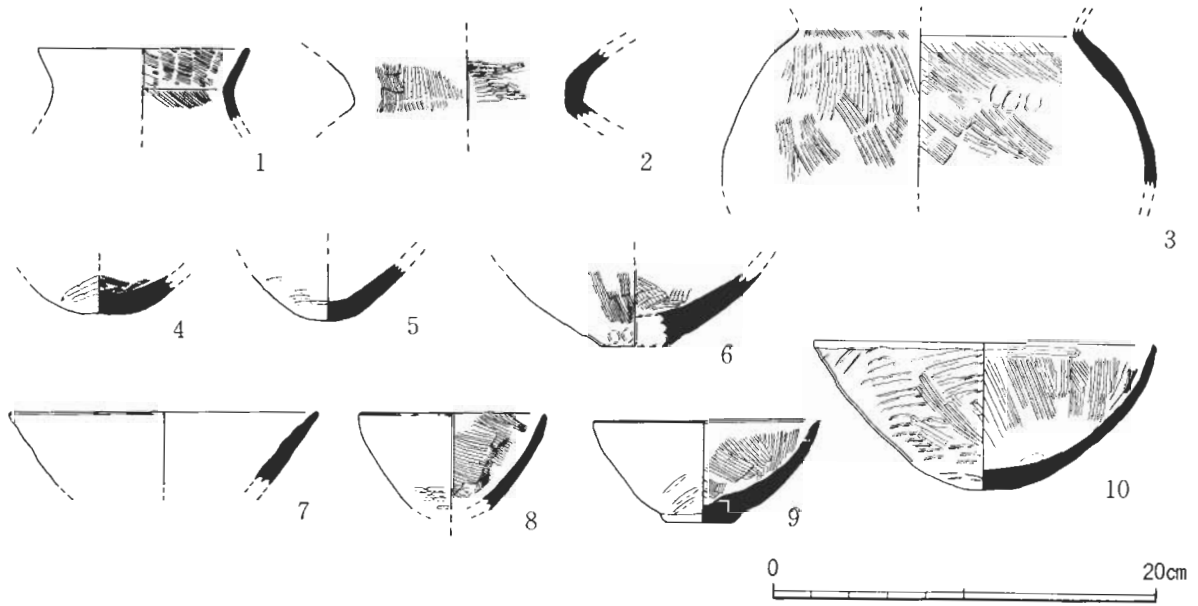


Fig. 9 ST 1 出土遺物実測図

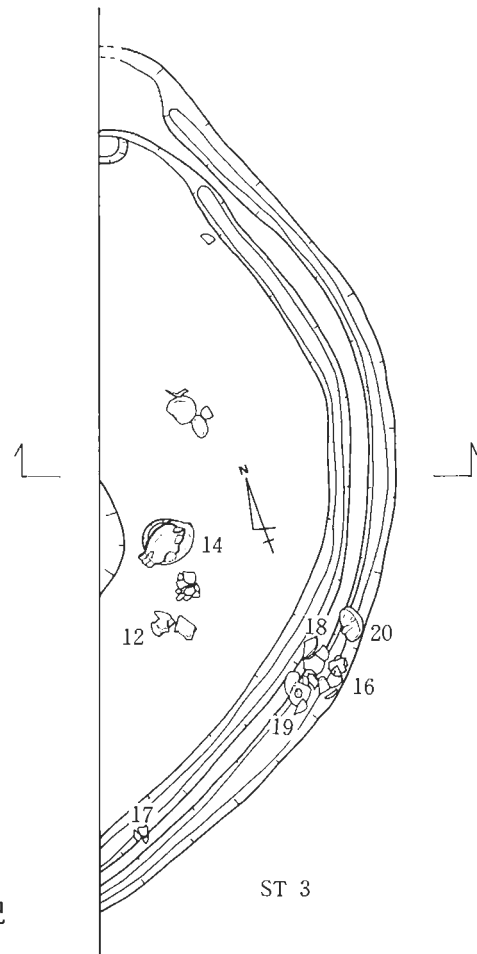
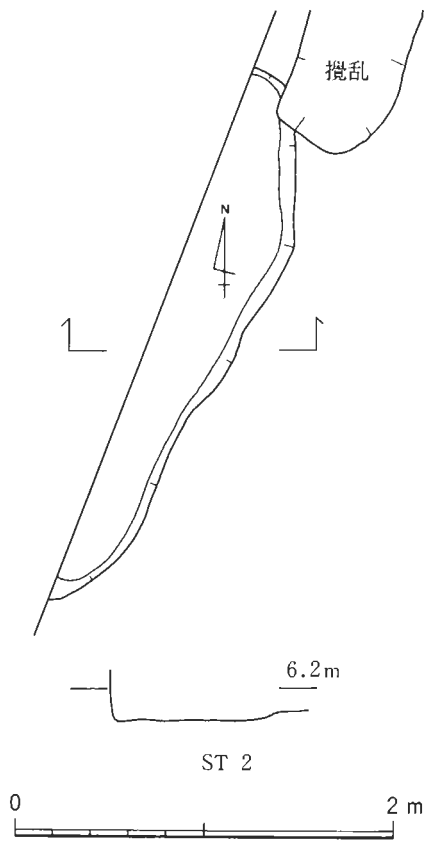


Fig. 10 ST 2・3 平面実測図及び遺物出土状況

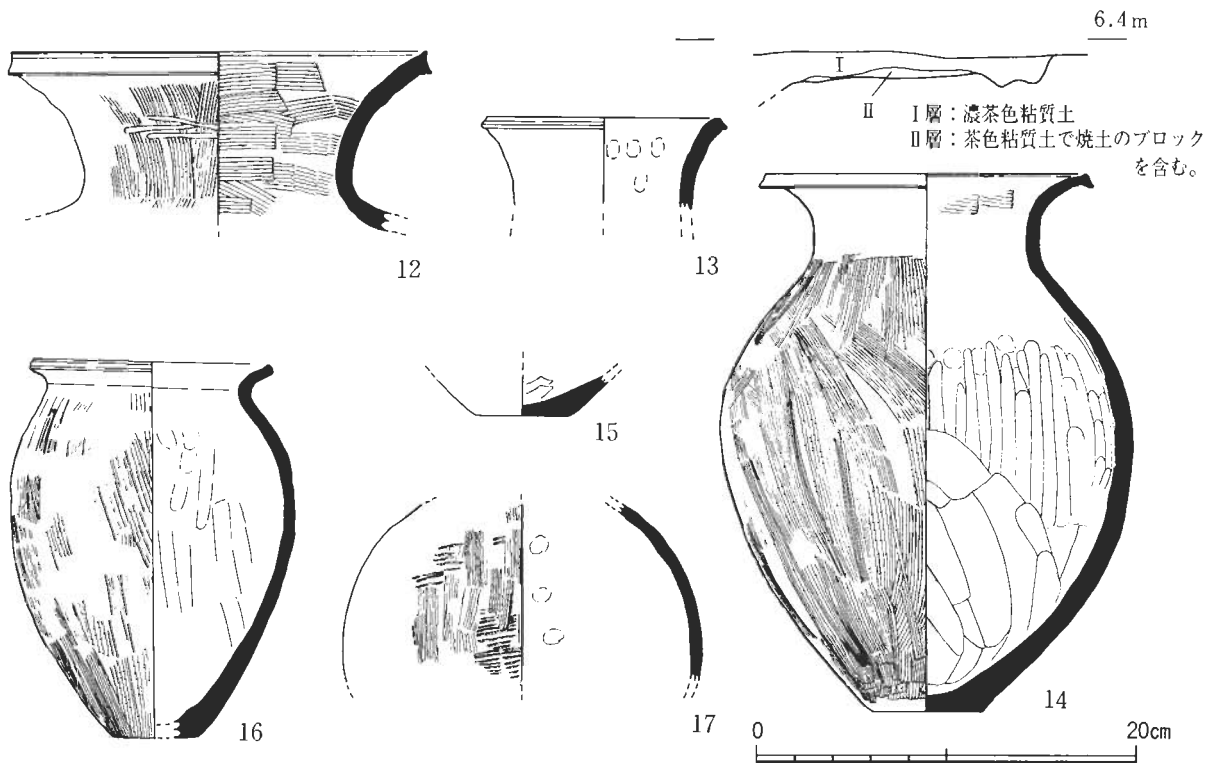


Fig. 11 ST 3 出土遺物実測図

外共に幅12～18cm、深さ15cm程を測るが、若干外側の溝が大きい。両者共に北部で切れており全周はしない。断面観察及び遺物の出土状況から判断して、初めに内側の溝が掘られ、その後住居址の拡張に際して外側の溝が設けられたと考えられる。この他床面中央部で径25cm、深さ27cmのピット、及びその西に弱い凹みが認められた。埋土は、Ⅰ層：濃茶色粘質土、Ⅱ層：茶色粘質土で、Ⅱ層中には焼土の小塊が含まれている。遺物は図示したように床面及び壁際からまとまって出土している。壺（12・14）は中央部よりの床面より、甕（16・17）・鉢（19・20）は壁際から出土している。12・14・17は床面へばり付き、16・19・20は住居址床面より5cm程浮いており壁溝が完全に埋まり、住居址も少し埋没し始めた頃、外から投げ込まれたような状況を示している。両者の間にはそれほど多くの時間差はないが、廃棄の時間には明らかに先後関係がある。しかしながら各々の土器群での一括性は高いと考えられる。ST 3の廃棄の時期は、壺12や14の廃棄された時、すなわち弥生後期中葉に求めなければならない。

ST 4（Fig. 12・13）

ST 1の南2mに位置する。本例も東側半分以上が調査区外に出ているが、直径6m程の円形住居と考えられる。中～近世の溝SD 53に切られている。SD 54との先後関係は不明である。床面からの立ち上がりは15cm前後を測る。西壁際に壁溝が認められる。幅18cm、延長3.3m、深さは2～3cmと極めて浅い。壁溝近くに径10cm程の小ピットが2個、床面中央寄りに32×20cm、深さ25cmのピットP 1が設けられている。埋土は、Ⅰ層：濃茶色粘質土 Ⅱ層：茶色粘質土 Ⅲ層：暗茶色粘質土であり、Ⅱ層中には焼土や炭化物が含まれている。遺物はⅡ層中より弥生後期の土器が出土しているが、図示可能なものは高坏（21）と鉢（22）のみである。ST 4は後期中葉～後半に比定することができる。

② 土坑

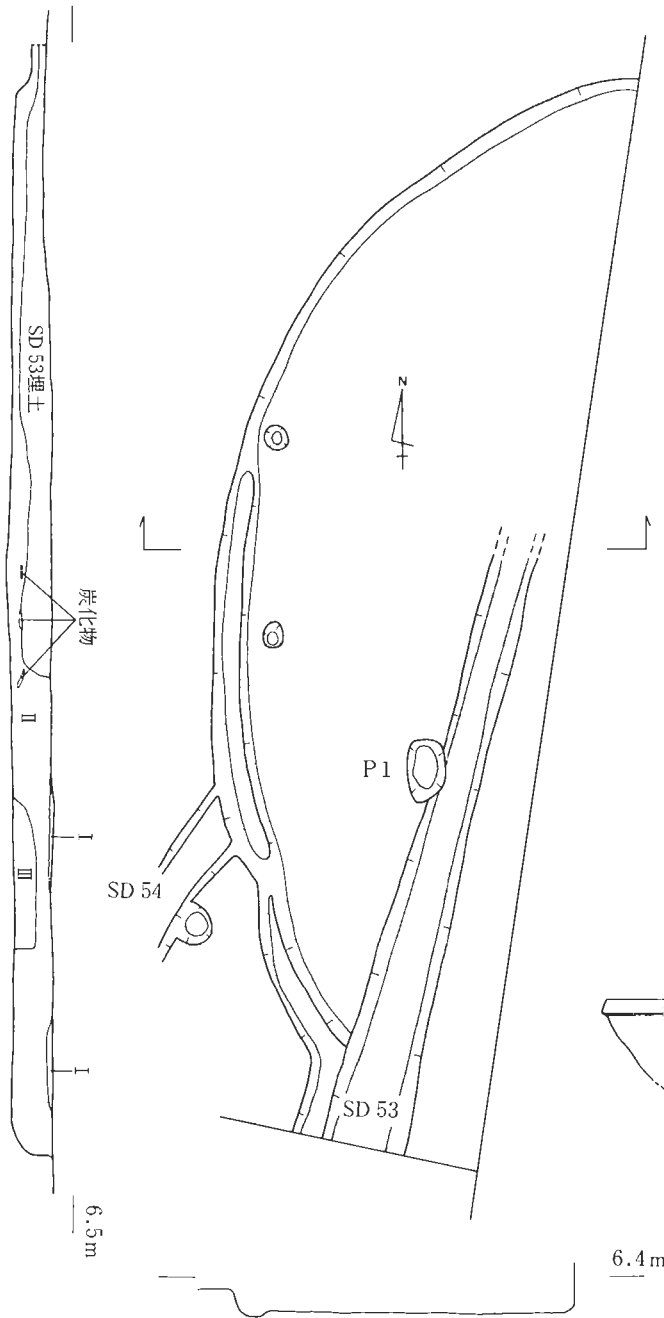
SK 41（Fig. 14）

調査区の西部に位置する。長軸2.44m、短軸0.6mの長楕円形のプランを有する。深さは15cm前後を測り断面形は舟底状を呈する。弥生後期の溝SD 42と切り合っているが、先後関係は不明である。埋土は黒褐色粘質土単層、埋土中より後期土器細片が出土しているが図示できるものはない。

③ 溝

SD 1（Fig. 15・16）

調査区の東部を南北に走る大溝である。確認延長30m、検出面での幅は調査区北端で1.8m、南端で2.4m、深さは1.2mを測り基盤礫層を掘っている。底は平坦面をなし水平勾配を保っている。壁は斜めに立ち上がるが、検出面から3分の2ほどの深度で明瞭な稜線が走り、稜線を境に上と下では立ち上がりの勾配が異なる。稜線からは急傾斜をなし、上はかなり弛く立ち上がっている。検出面から3分の2程の深度が、SD 1掘削時の深さでありそれより下部は繰り返行われた底浚えによって生じたものであろう。埋土は、大きくⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ層に分層でき、一部に壁の崩落土が認められる。遺物はⅠ層より弥生前期末と後期末の土器が出土し、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ層からは前期末の土器のみが出土している。遺物の平面的な分布は、L 27・M 27付近から最も多く出土し、他の地点



I層：濃茶色粘質土
 II層：茶色粘質土（焼土混入，炭化物を含む）
 III層：暗茶色粘質土

Fig. 12 ST 4 平面実測図

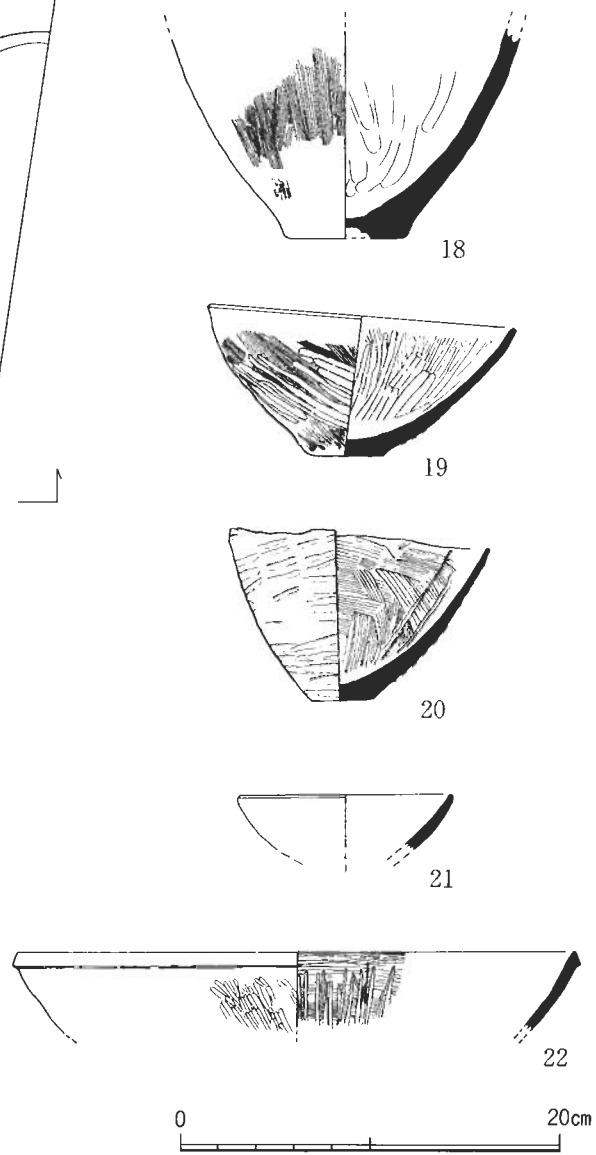


Fig. 13 ST 3 (18~20), ST 4 (21・22)
 出土遺物実測図

からは散発的な出土であった。SD 1 の掘削時期を明確にすることは難しいが、前期末以前に掘削され底浚えを繰り返しながら利用し、前期末頃から埋没ははじめ前期末のうちにほとんど埋没してしまったものと考えられる。水路としての性格が考えられる。なお SD 1 の現検出面は、近世以降少なくとも50cm以上の削平を想定しなければならない。したがって本来は深さ2 m以上の規模があったと考えられる。

SD 9 (Fig. 17・18)

調査区西南隅を東西方向に走る溝である。確認延長11.4m、幅30~56cm、深さ6~13cm、断面形は逆台形をなす。溝西端より8~12mの間に多量の弥生時代後期の細片が出土しているが図示できたものは、甑の底部1点(43)と器台か高坏の脚部1点(45)である。

SD 10 (Fig. 17)

SD 9 より北へ約1 mの地点で東西に平行して走る。両端はSD 9と同じように調査区外になるため、確認延長は14.4mまでである。幅は30~100cm、深さは2~6 cmの浅い溝で、断面形は逆台形である。この溝から数十点の弥生時代後期の土器細片が出土しているが図示できるものはない。後期末の溝である。

SD 11 (Fig. 17・18)

SD 10 より北へ1.8m~2.8mの地点にあり、SD 10と平行に走る。両端が調査区外になっているが32.4mを確認でき、中央部分はSD 13に切られ、東側はSD 16とSD 17とSD 21に切られている。幅60~70cmで、深さ10.6~21.7cm、断面は逆台形をなす。埋土は黒褐色粘質土単純一層で、弥生後期後半~末の遺物が出土しているが、図示し得たのは甑底部(44)、壺底部(46・47)、支脚(48)のみである。後期末の溝である。

SD 42 (Fig. 17)

調査区の西部を東西に走る。延長40m、幅40~45cm、深さ4~16cmを測る。SD 13・16・21・34に切られ、SK 41とも切り合っている。断面形は舟底形を呈し、埋土は黒褐色粘質土単純一層である。埋土中より弥生後期の土器が多く出土しているが図示可能なものはない。後期末に属する。

④ ピット

P 3 (Fig. 19・20)

調査区の西中央よりやや北寄りに位置する。64×50cmの楕円形プランを呈し、深さは20~25cmである。このP 3は先述のSD 42の北側にあり、ピットの中からはほぼ完形の甕(49)や鉢(50)が出土している。甕の底部に鉢の口縁が重なるような形で検出された。弥生時代後期のものである。

P 5 (Fig. 19・20)

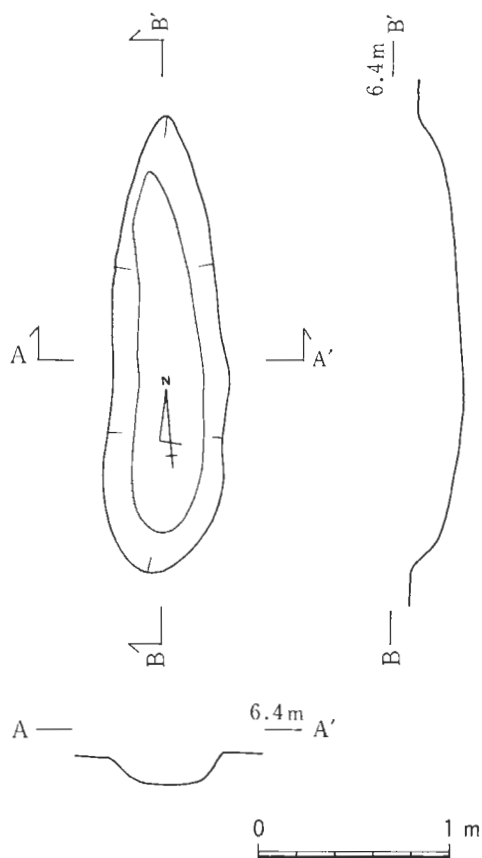


Fig. 14 SK 41実測図

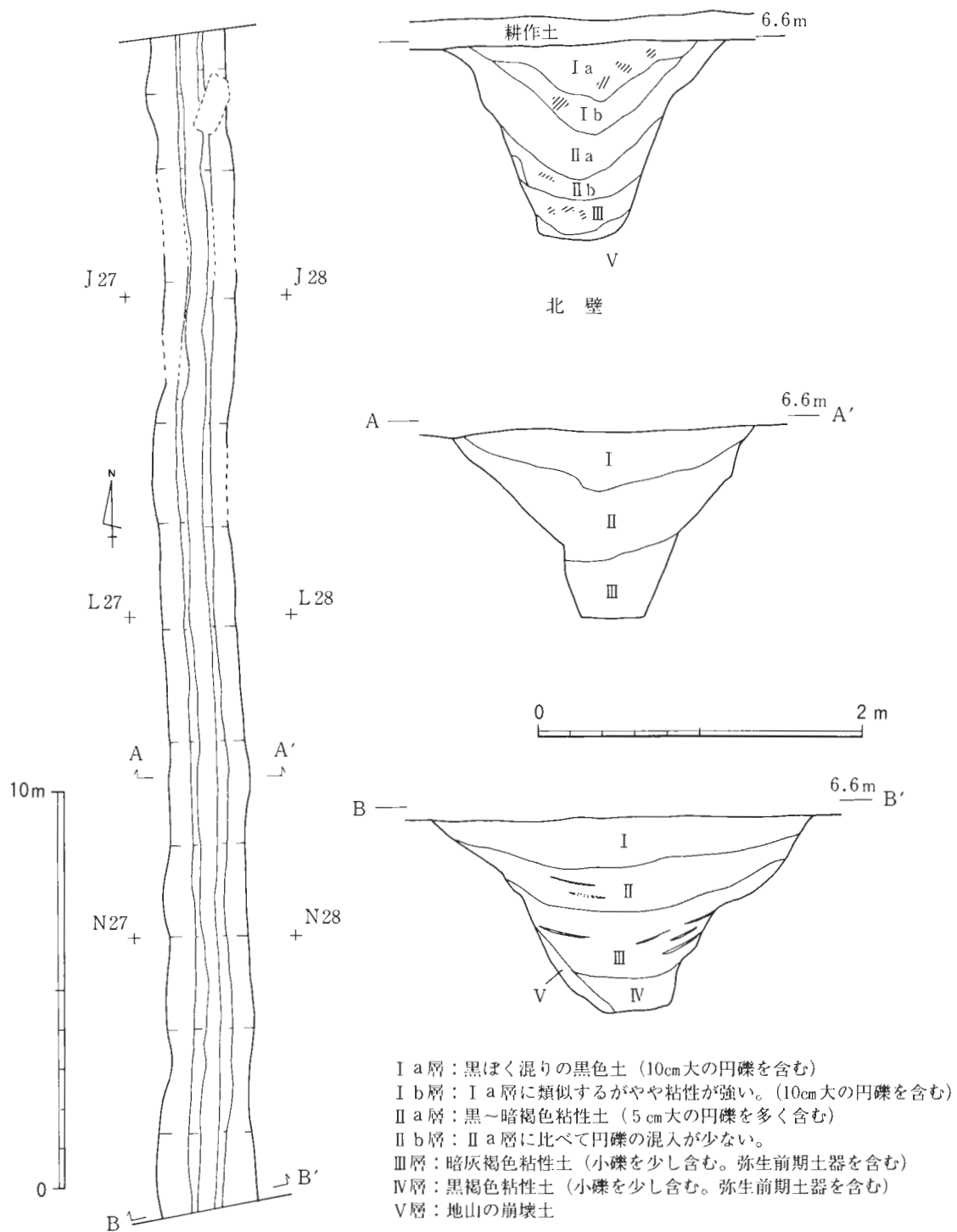


Fig. 15 SD 1 平面及びセクション図

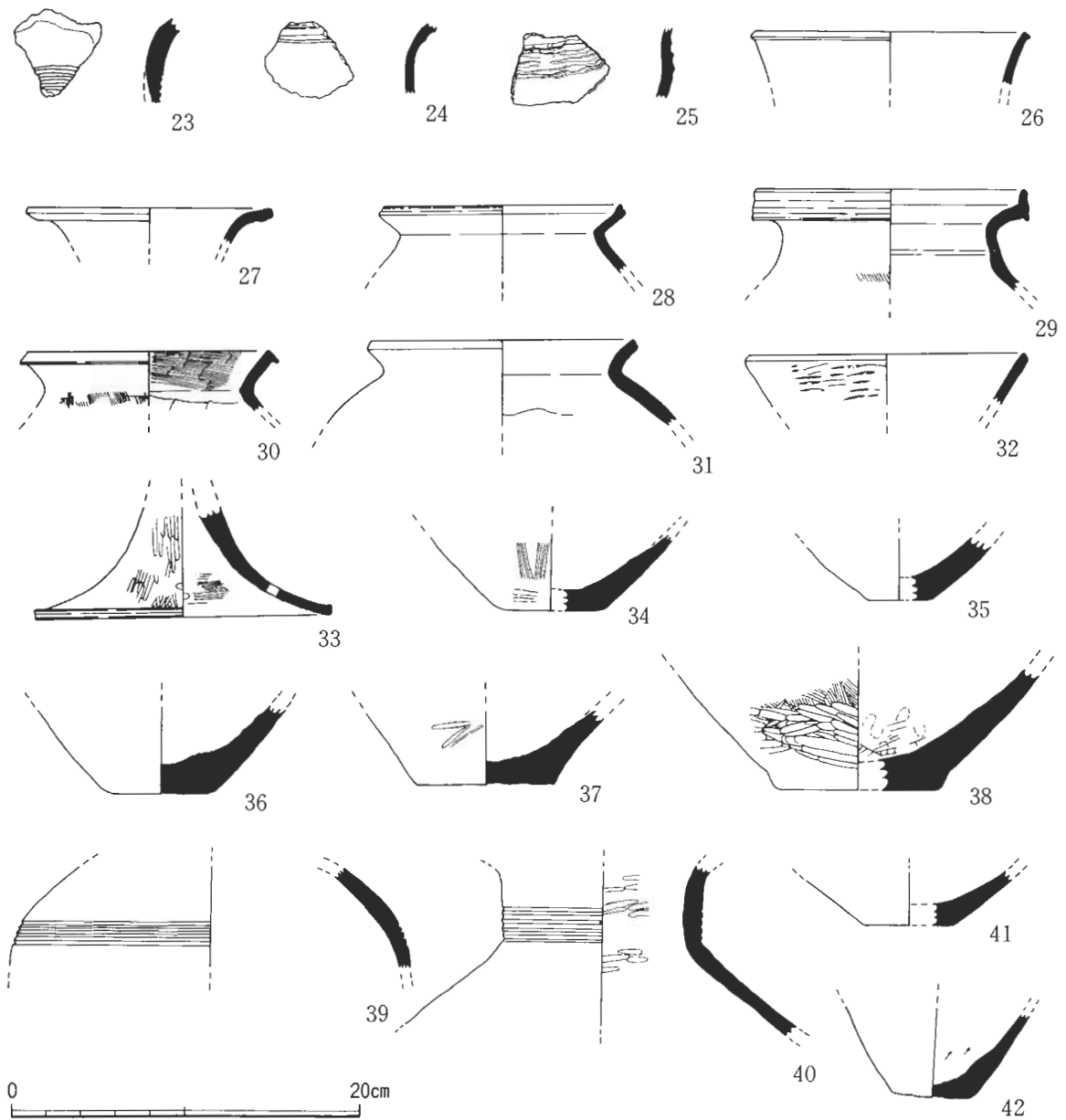


Fig. 16 SD 1 出土遺物実測図（Ⅱ層：40，Ⅲ層：23・36・39，Ⅳ層：38，
他はすべてⅠ層出土）

P 5 は西半分の中央北の位置にあり，36×26cmの不整円形のプランを呈し，深さ8.2cm前後の楕円形である。黒褐色の埋土から，叩き成形でハケ調整の甕や壺の細片，底部や口縁部，支脚片など40点ぐらい出土している。図示し得たのは高坏の脚（53）のみである。これらの土器は弥生時代後期末のものである。

P 12（Fig. 19・20）

P 12は中央部にあり，東端はSD 3に切られている。長軸40cm，短軸33cm，深さ17～26.7cmの楕円形で西側は浅く東側が深くなっている。黒褐色の埋土中より甕の上胴部（51）と底部（52）が出

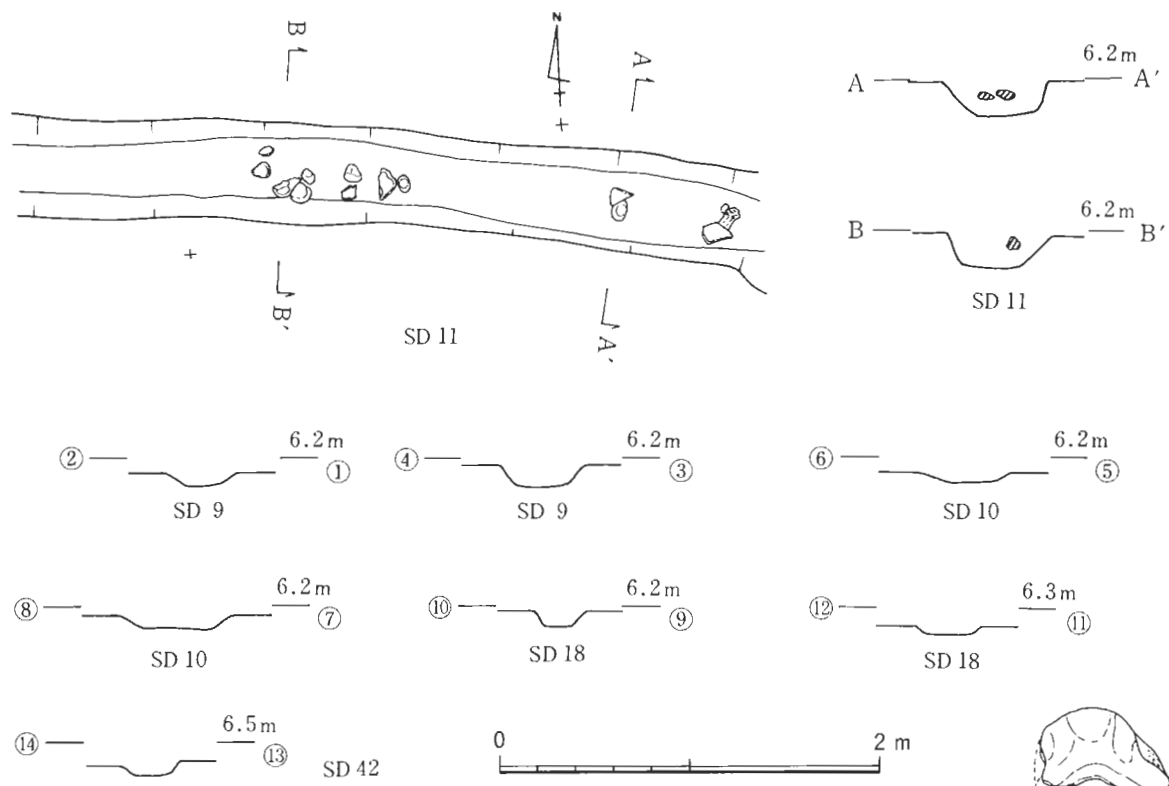


Fig. 17 SD 11遺物出土状況及びSD 9・10・18・42断面図

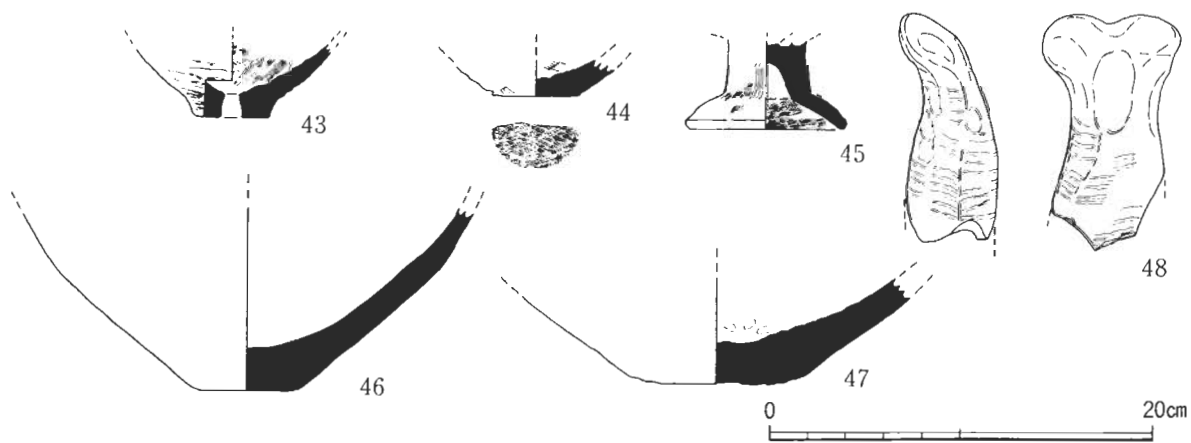


Fig. 18 SD 9 (43・45), SD 11 (44・46~48) 出土遺物実測図

土している。

この他に弥生時代のピットはP 1, P 2, P 4, P 6, P 7, P 8, P 9, P 10, P 11, P 13などであるが、土器片の出土が少なく図示すべきものはない。また包含層中より弥生後期の土器片が出土しているが図示できるものは甕底部1点 (Fig. 20-54) のみである。

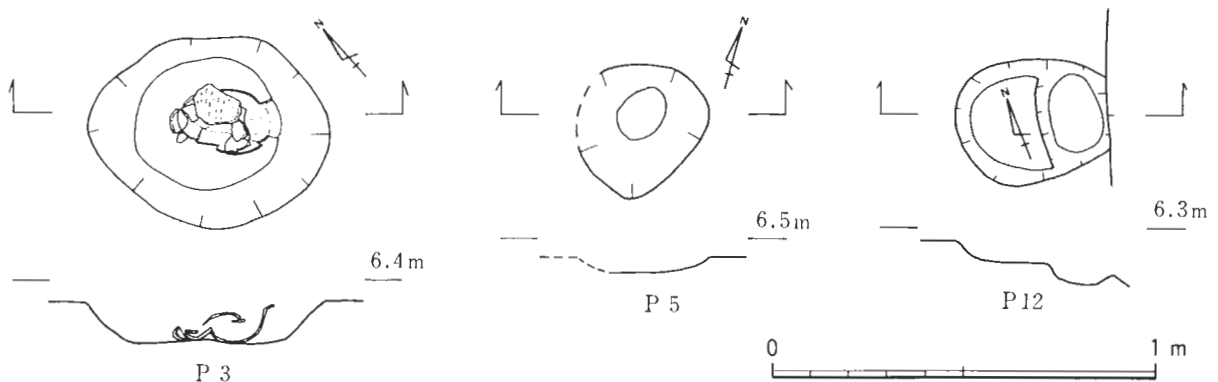


Fig. 19 P 3 遺物出土状況及びP 5・P 12平面実測図

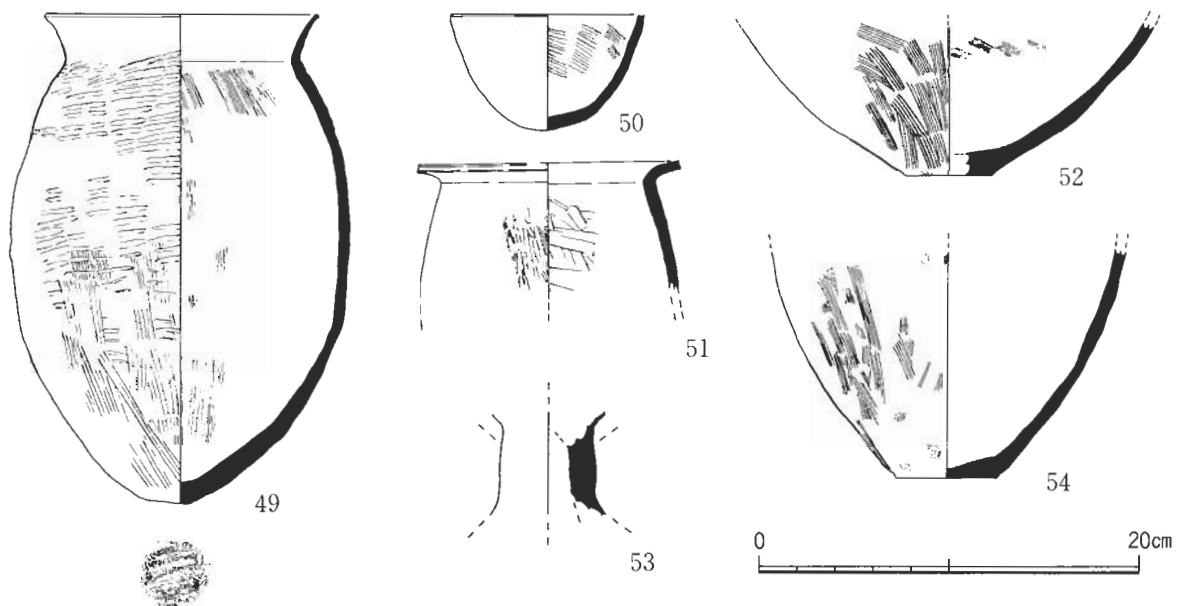


Fig. 20 ピット出土遺物及び包含層出土遺物実測図（P 3：49・50，
P 12：51・52，P 5：53，包含層：54）

(2) 中世以降の遺構と遺物

① 土坑

SK 1 (Fig. 21)

調査区東寄りの北端にある。直径1.4m前後の円形で深さは40cmである。北西端に小さなピットがあるが、遺物はなかった。床は平坦面をなし断面は逆台形である。形態から見て近世墓の可能性はある。

SK 2 (Fig. 21)

SK 1の東隣りにある。北半分が調査区外に出る。長軸1.0m，短軸0.7m，深さ20cmの楕円形と考えられる。床は平坦面をなし断面は逆台形である。遺物は確認できなかった。

SK 3 (Fig. 21)

SK 2の東側にあり，北側半分以上が調査区外に出る。深さは20cmを測るが，プランは不明である。断面は逆台形であり，遺物は確認されていない。

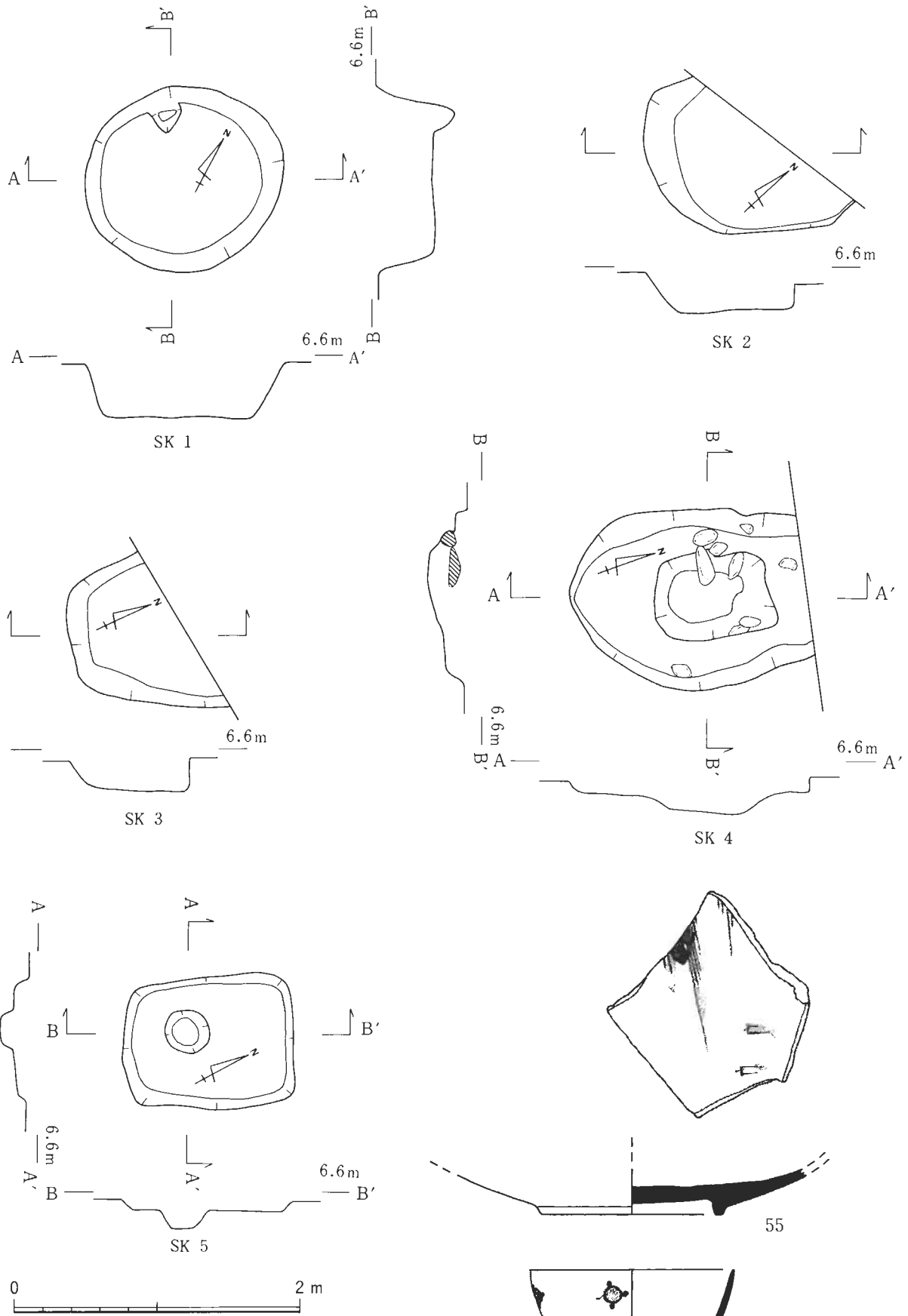


Fig. 21 SK 1 ~ 5 実測図

Fig. 22 SK 5 出土遺物実測図

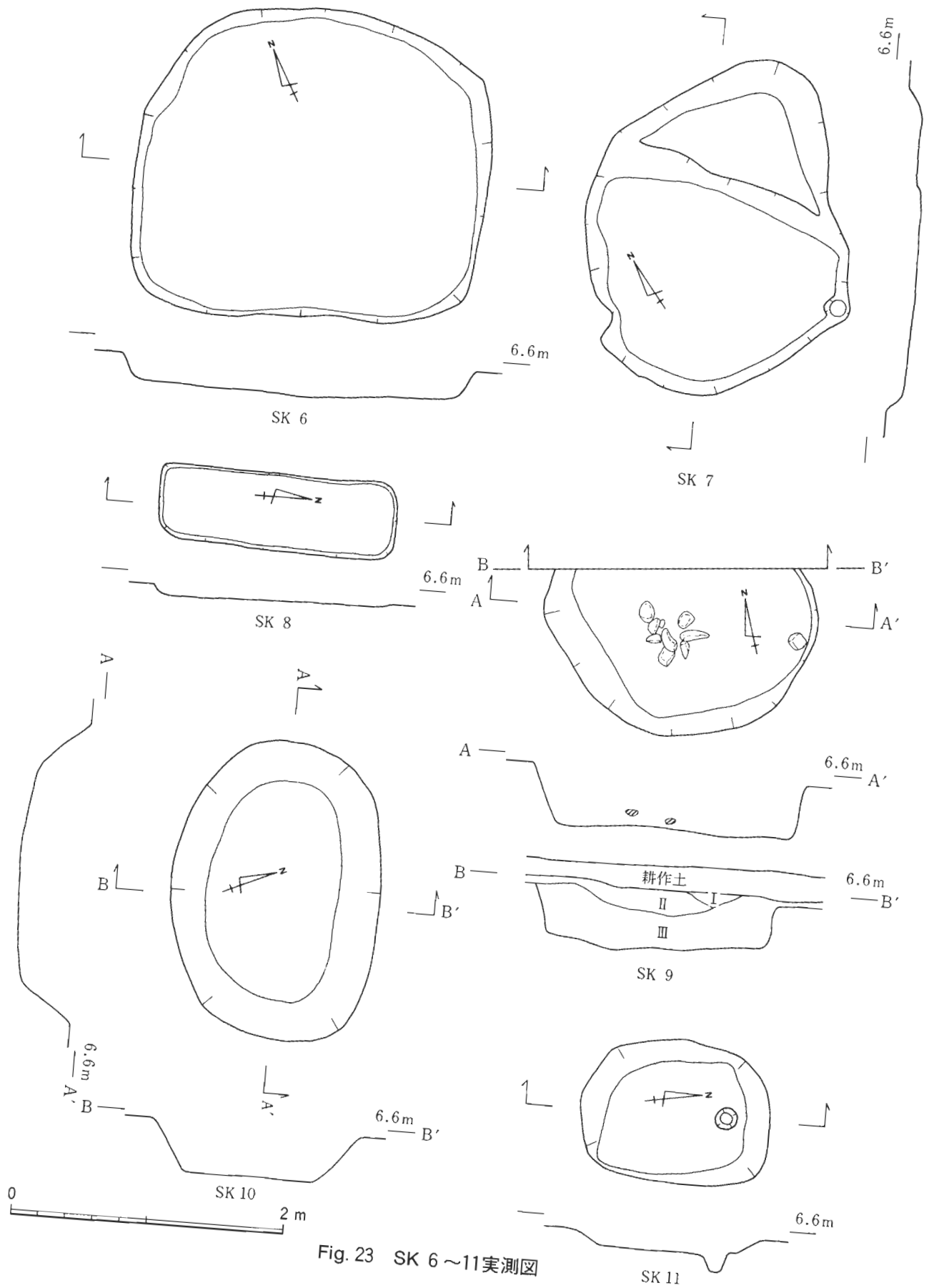


Fig. 23 SK 6 ~ 11実測図

SK 4 (Fig. 21)

SK 3より約4m東の位置にある。全体の3分の1程が調査区外に出ている。確認したのは長軸1.63m, 短軸1.3m, 深さ12~20cmである。平面形は楕円形で、床は2段になっている。埋土中に拳大~人頭大の円礫(砂岩)を多く含む。土器類は確認されていない。

SK 5 (Fig. 21・22)

SK 2の南にある。長軸1.2m, 短軸0.9mの方形プランを呈し、深さは10cm前後を測る。床に直径30cm, 深さ約10cmのピットがあるが、SK 5に伴うものかどうか不明である。埋土中より伊万里染付皿(55), 同碗(56)が出土している。

SK 6 (Fig. 23)

SK 5の南にある。長軸2.6m, 短軸2.3mの隅丸方形を呈し、深さ20cm前後を測る。床面は平坦面をなし壁は斜めに立ち上がる。遺物は確認されていない。

SK 7 (Fig. 23)

SK 6の北にある。長軸2.4m, 短軸1.98mの隅丸平行四辺形状を呈し、床は北が高く南が低い。検出面からの深さは12cmと20cmである。

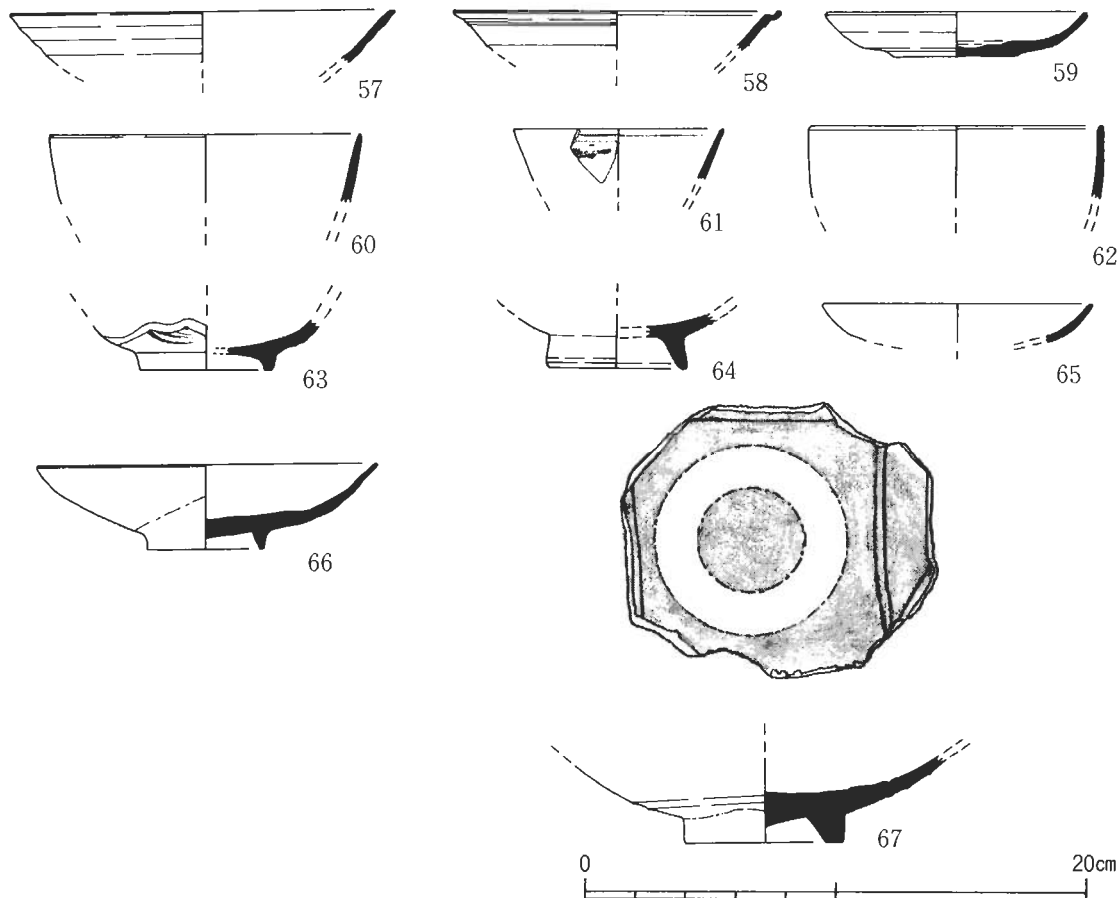


Fig. 24 SK 11~15出土遺物実測図 SK 11 (57・63・64), SK 12 (60), SK 13 (58・66), SK 14 (59・61・65・67), SK 15 (62)

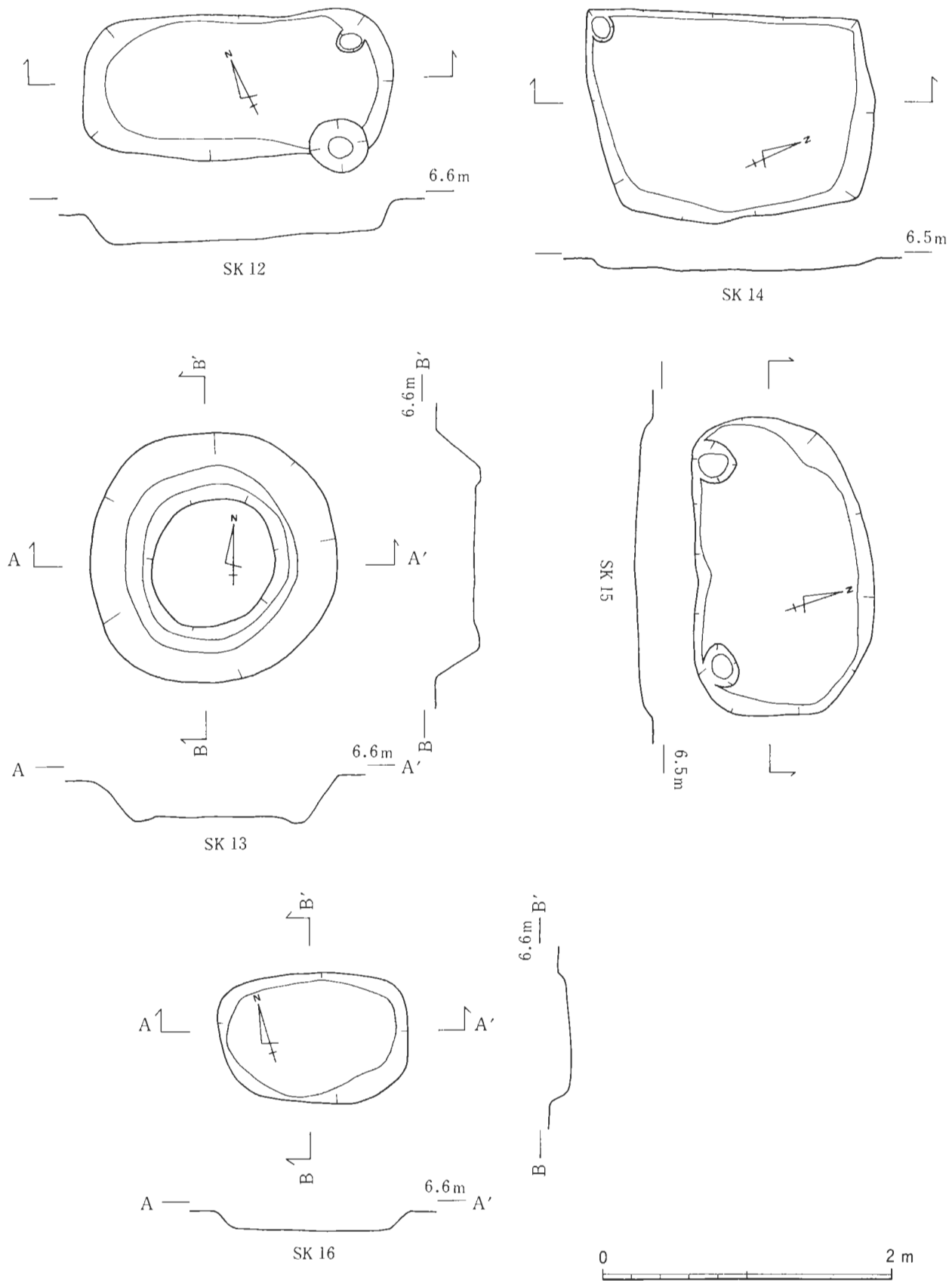


Fig. 25 SK 12~16実測図

SK 8 (Fig. 23)

調査区の北端にある。長軸1.74m、短軸0.6mの長方形プランを呈し、深さ2～3cmと浅い。埋土は濃茶色砂混じり粘質土である。激しく削平を受けた近世の木棺墓墳である。

SK 9 (Fig. 23)

SK 3の東隣にある。半分以上が調査区に出ている。短軸がおおよそ1.3m、深さ40cmの不整楕円形である。埋土はⅠ～Ⅲ層からなり、床面から数cm浮いた状態で図示したように河原石が集中して出土している。近世陶器の細片が1点出土している。

SK 10 (Fig. 23)

SD 1の東にある。長軸2.2m、短軸1.56mの楕円形プランを呈し、深さ35～45cmを測る。埋土は濃茶色粘質土で、埋土中より近世磁器片1点、染付片1点、弥生土器細片3点出土しているが図示できるものはない。

SK 11 (Fig. 23・24)

SK 10の北にある。長軸1.4m、短軸1.08mの隅丸長方形のプランを呈し、深さは14cmを測る。床面はほぼ平坦で、北壁際に径20cm、深さ20cmの小ピットがある。埋土は濃茶色粘質土で、埋土中より近世陶磁器類が10点近く出土している。57は唐津皿、63は伊万里碗、64は陶器椀である。

SK 12 (Fig. 24・25)

SK 11の東隣にある。長軸2.16m、短軸1.04mの隅丸長方形プランを呈し、深さ12cmを測る。南東隅をピットに切られている。床面は平坦で断面形は逆台形をなし、東壁際に小ピットがある。埋土は濃茶色粘質土単層、埋土中より近世陶器椀が出土している。近世墓であろう。

SK 13 (Fig. 24・25)

SK 10の西にある。径1.7m前後の円形に近いプランを呈し、深さ25cmを測る。床面外縁には幅10～20cm、深さ3～5cmの溝がめぐる。埋土は濃茶色粘質土単層で埋土中より、近世磁器8点、染付1点、近世陶器5点出土している。58は溝縁皿で、66は内面の釉を蛇ノ目状に掻き取った肥前系の皿である。近世墓である。

SK 14 (Fig. 24・25)

SK 13の北西5mにある。長軸1.94m、短軸1.46mの方形プランを呈し、深さ8cmを測る。南西隅に小ピットがあるがSK 14に伴うものかどうかは不明である。埋土は濃茶色粘質土単層で床面北隅より土師器小皿(59)が、西の中央付近より内底の釉を蛇ノ目状に掻き取った陶器(内野山窯(佐賀県)で焼かれた17世紀後半、第Ⅲ期に属する)皿(67)、その他埋土中より伊万里碗(61)、土師器小皿(65)が出土している。

SK 15 (Fig. 24・25)

SK 14の南にある。長軸2.1m、短軸1.22mの長楕円形のプランを呈し、深さ8cmを測る。南隅に径20cmの小ピットがある。埋土は濃茶色粘質土単層で、埋土中より土師器1点、染付1点、近世陶器椀2点が出土している。陶器椀1点(62)のみ図示し得た。

SK 16 (Fig. 25)

SK 15から東へ12mにある。長軸1.32m、短軸9m、深さ14cmの楕円形プランを呈し、断面形は

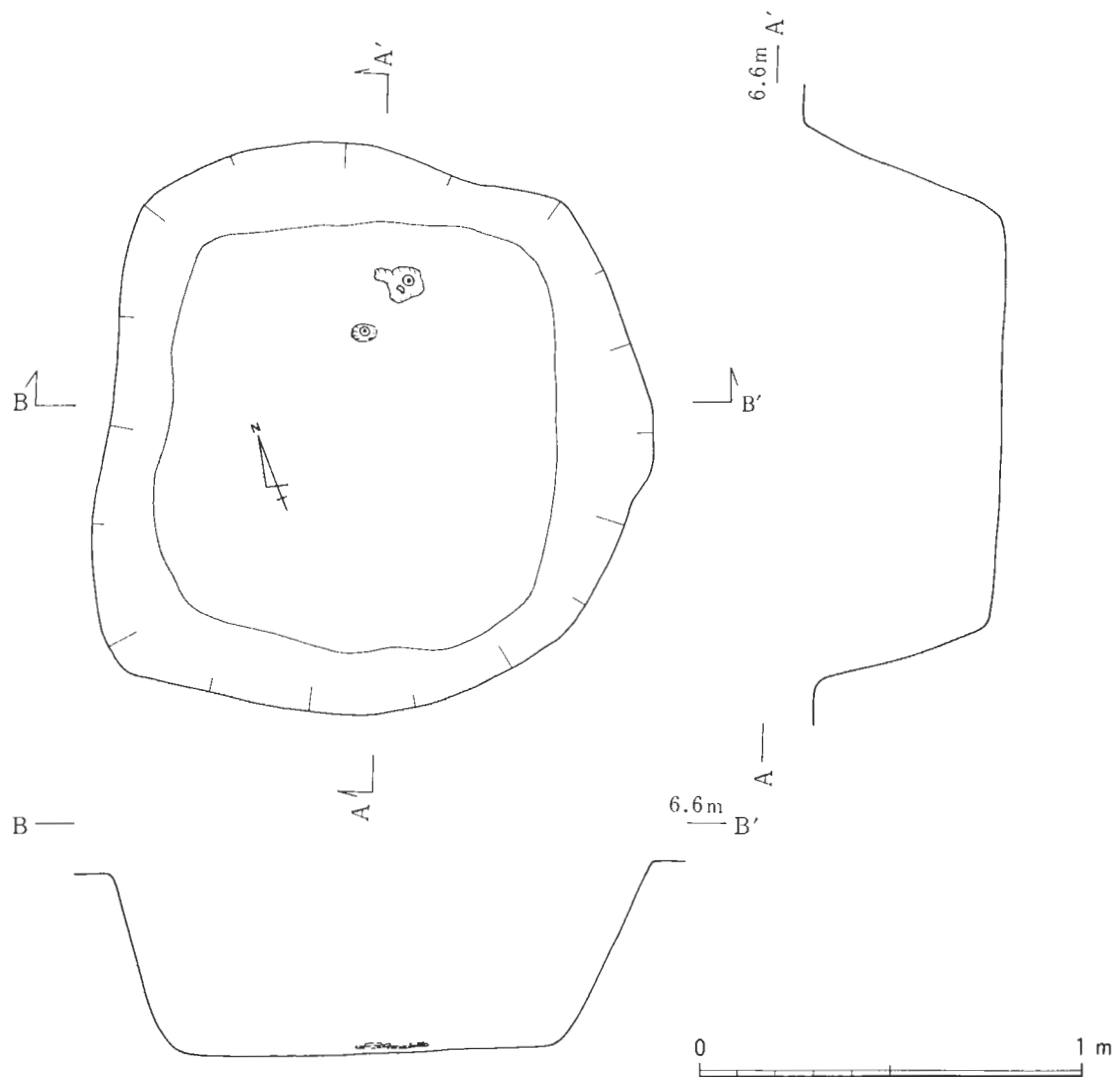


Fig. 26 SK 17平面及び遺物出土状況実測図

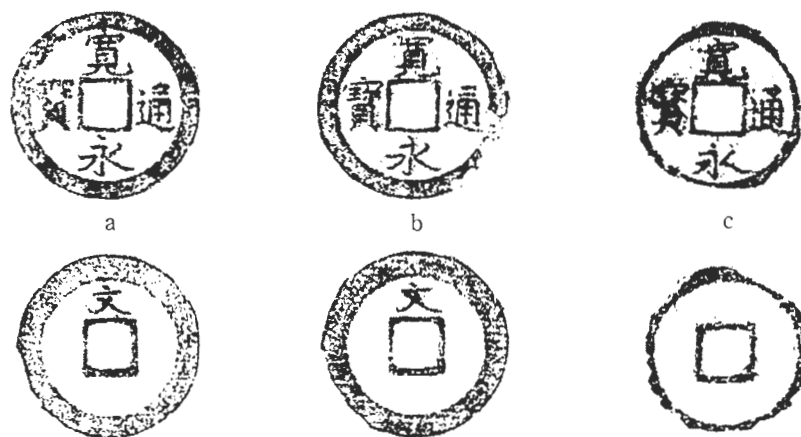


Fig. 27 SK 17出土の古銭（実大）

逆台形である。埋土中より近世陶器片1点が出土している。

SK 17 (Fig. 26・27)

SK 14の南にある。長軸1.5m、短軸1.4mの隅丸方形のプランを呈し、深さ50cmである。断面形は逆台形であり、床面から木片の上に寛永通宝3枚と銅銭2枚、白歯1本と他2本が出土している。棺板片が出土したこの土壌は近世墓である。

SK 18 (Fig. 28)

SK 17より5m北にある。長軸2.08m、短軸1.94m、深さ44cmの隅丸方形のプランを呈する。断面形は逆台形で、東と北側にテラス状の段がある。また東と北東部に直径20cm前後、深さ10cm前後の小ピットが2個あるが土壌とは関係がないと思われる。床面直上に握り拳し大の礫を敷詰め一種の張り床を作っている。埋土I層より近世陶器が出土している。張床上に棺を置いた近世墓である。

SK 19 (Fig. 28)

SK 17の東南隣にある。長軸1.54m、短軸1.46mの隅丸方形プランをなし、深さ5cmを測る。断面形は逆台形である。近世墓であろう。

SK 20 (Fig. 28)

SK 16の南にある。長軸1.6m、短軸0.66mの長方形プランを呈し、深さは10cmを測る。断面形は逆台形である。埋土中より唐津系陶器片1点と弥生土器片1点が出土している。近世の木棺墓と考えられる。

SK 21 (Fig. 28・36)

SK 20の南西にある。長軸3.1m、短軸2.4mの不整形プランを呈し、深さ25～30cmを測る。断面形は逆台形である。埋土中より染付皿(82)、三島手唐津鉢(83)の他染付・唐津系陶器片や弥生土器片が少量出土している。

SK 22 (Fig. 29・36)

SK 21の東隣にある。長軸2.08m、短軸1.9mの隅丸長方形を呈し、深さ14～22cmを測る。床面には凹凸が見られる。埋土中から陶器皿(72)、京焼風陶器碗(73)、その他近世陶器、染付などの細片が出土している。

SK 23 (Fig. 29・36)

SK 24とほぼ接する位置にある。長軸1.1m、短軸1.7mの隅丸方形プランを呈し、深さ35cmを測る。床面縁部が僅かに凹んでいる。埋土中より唐津系溝縁皿(70)、京焼風陶器(74)の他陶器片、須恵器などが出土している。近世墓である。

SK 24 (Fig. 30)

プランの大半がSD 1埋土を切り、調査区東北部に集中する柱穴群の幾つかを切って掘られている。長軸2.1m、短軸1.65mの隅丸方形を呈し、深さ60cmを測る。壁は概ね急傾斜で立ち上がるが南壁でやや緩く立ち上がる。東端の壁面及び床は地山の砂礫層が露呈するが、床面の大半は黄灰色の粘土を丁寧に敷詰めている。粘土の厚さは10cm余りで、粘土を除くと図示したように拳大～人頭大の円礫が敷かれている。これはSK 18で見たように、先ず円礫を敷詰めその上に粘土で床を張って仕上げたものと考えられる。円礫敷の部分が軟弱なSD 1埋土と重なるところから単なる床面の

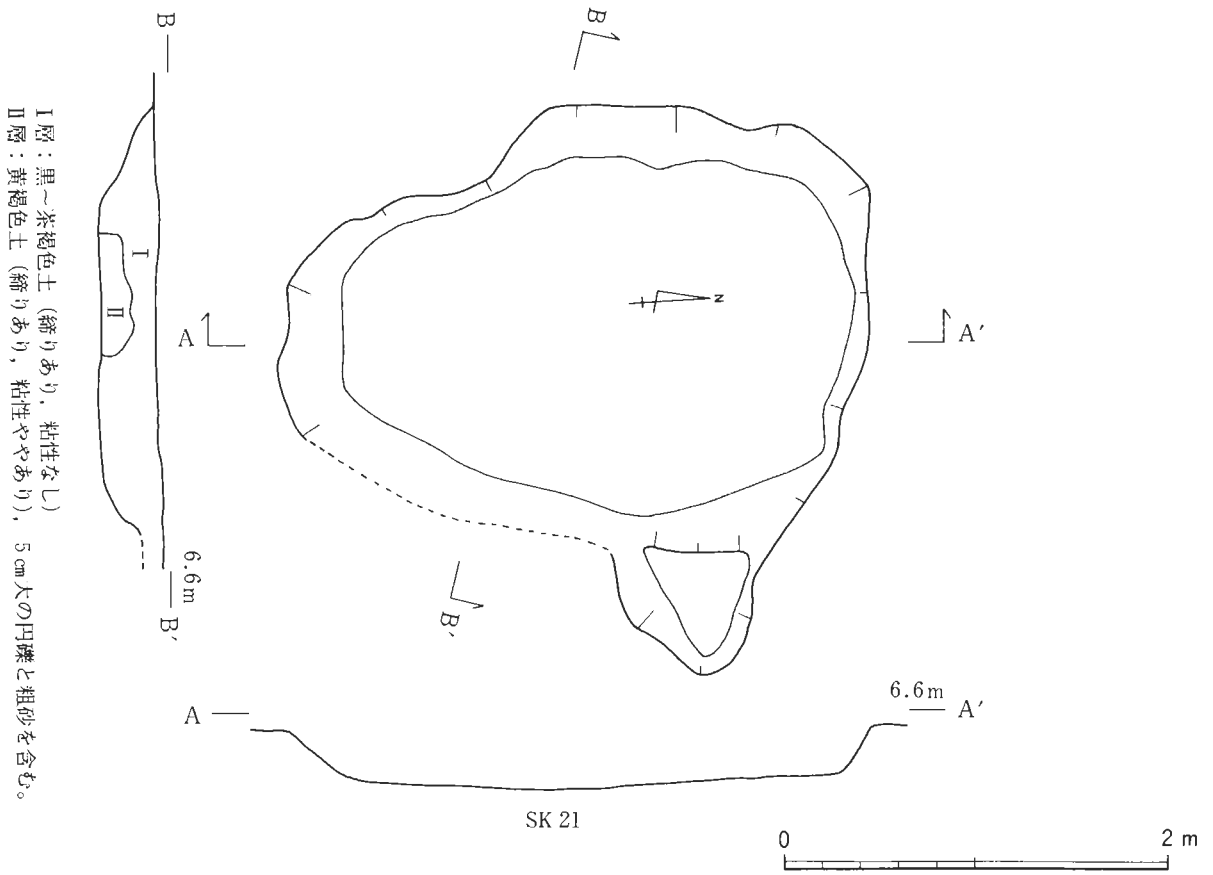
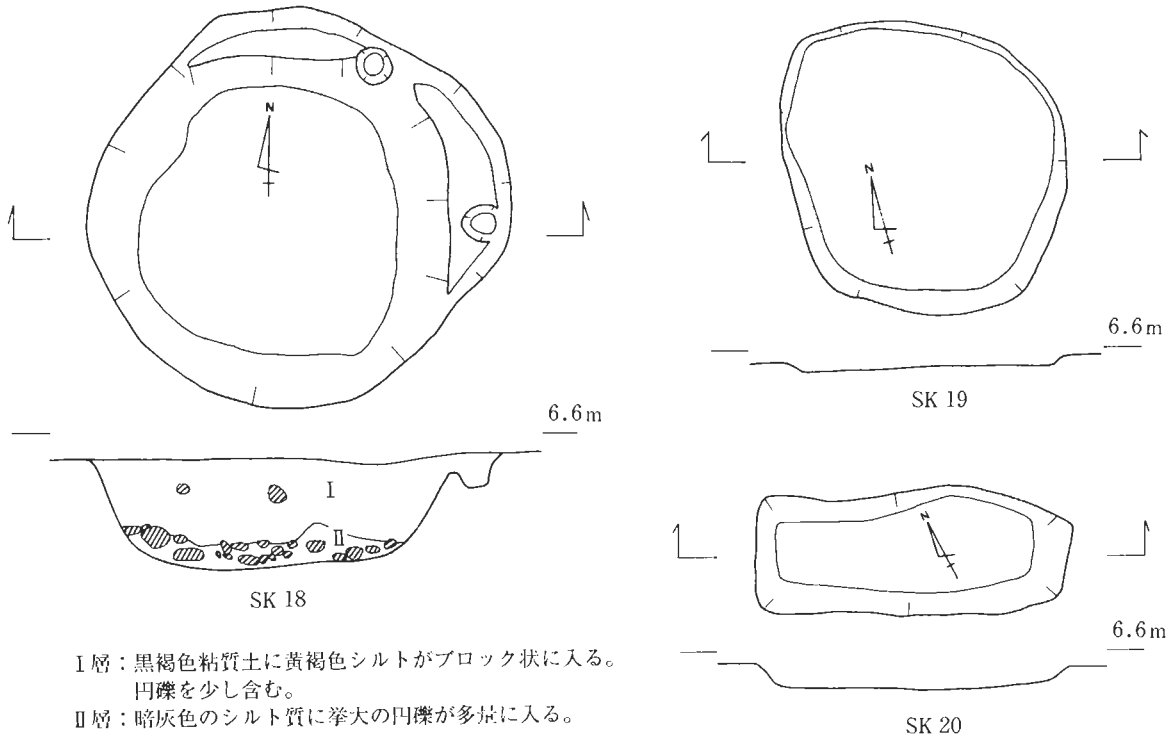


Fig. 28 SK 18~21実測図

補強策と考えられなくもないが、粘土床が床面東部の地山面の上にも及んでいることから、ここでは工法の一環として理解したい。遺物は埋土中より近世陶器片、土師器細片などが出土している。近世墓である。

SK 25 (Fig. 31)

SK 24の南にあり、SK 36を切っている。長軸2.2m、短軸0.9mの隅丸長方形を呈し、深さ15~27cmを測る。埋土は粘性のない茶褐色粘質土で5cm大の円礫を多く含んでいる。遺物は出土していない。

SK 26 (Fig. 31・36)

SK 14の西にある。長軸2.48m、短軸1.02m、深さ10cmの長方形プランを呈し、隣りにあるSK 27・29・30を切っている。断面形は逆台形であり、埋土中から染付碗(75)1点のみ出土している。近世墓であろう。

SK 27 (Fig. 31・36)

SK 26の北隣にある。長軸1.94m、短軸1.06m、深さ10cmの長方形プランを呈する。西側のSK 31と北側のSK 32を切っている。断面形は逆台形で、埋土中より図示し得たのは、土師皿(69)や

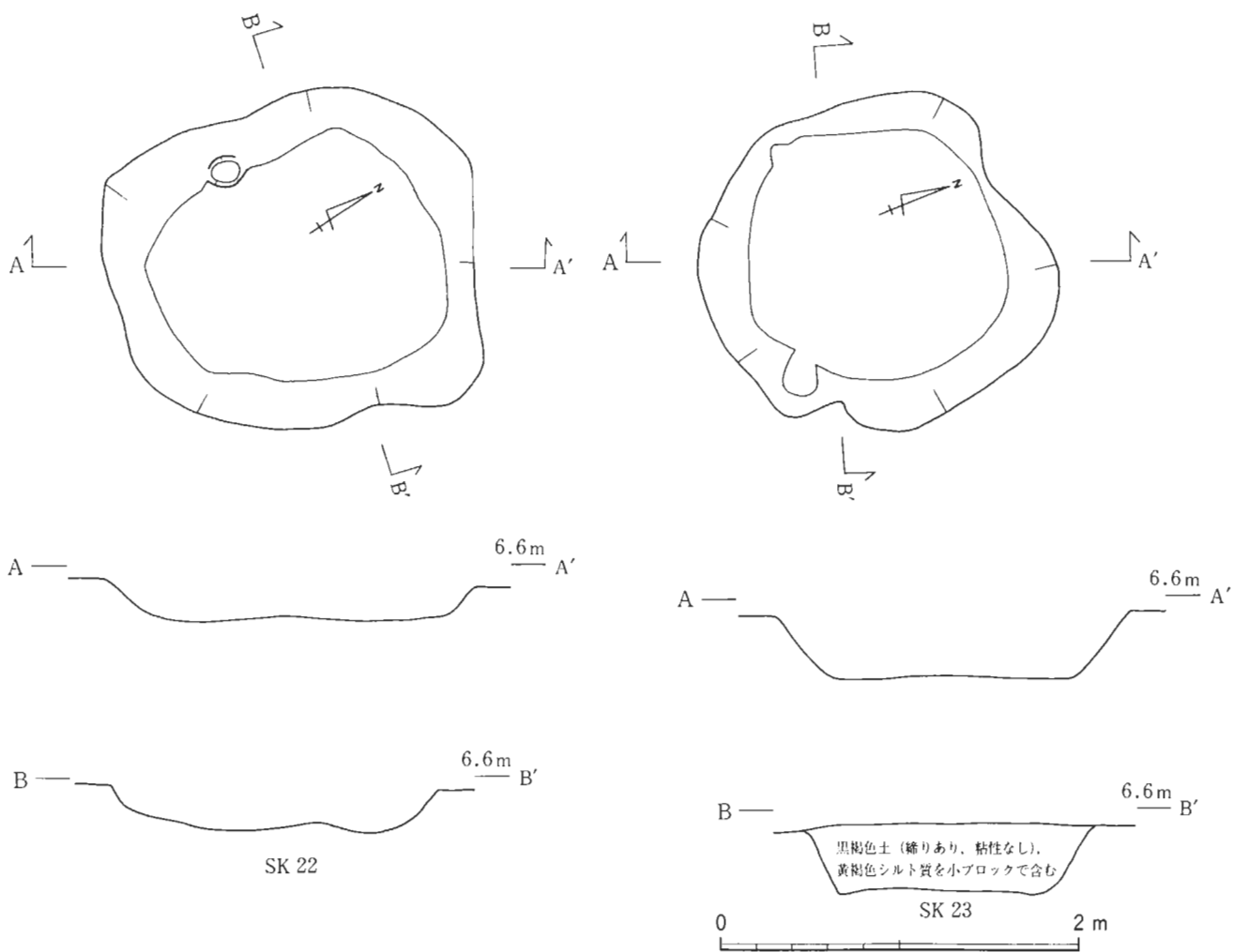
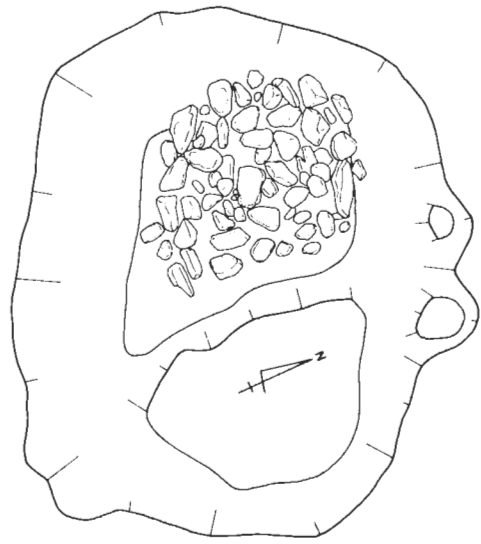


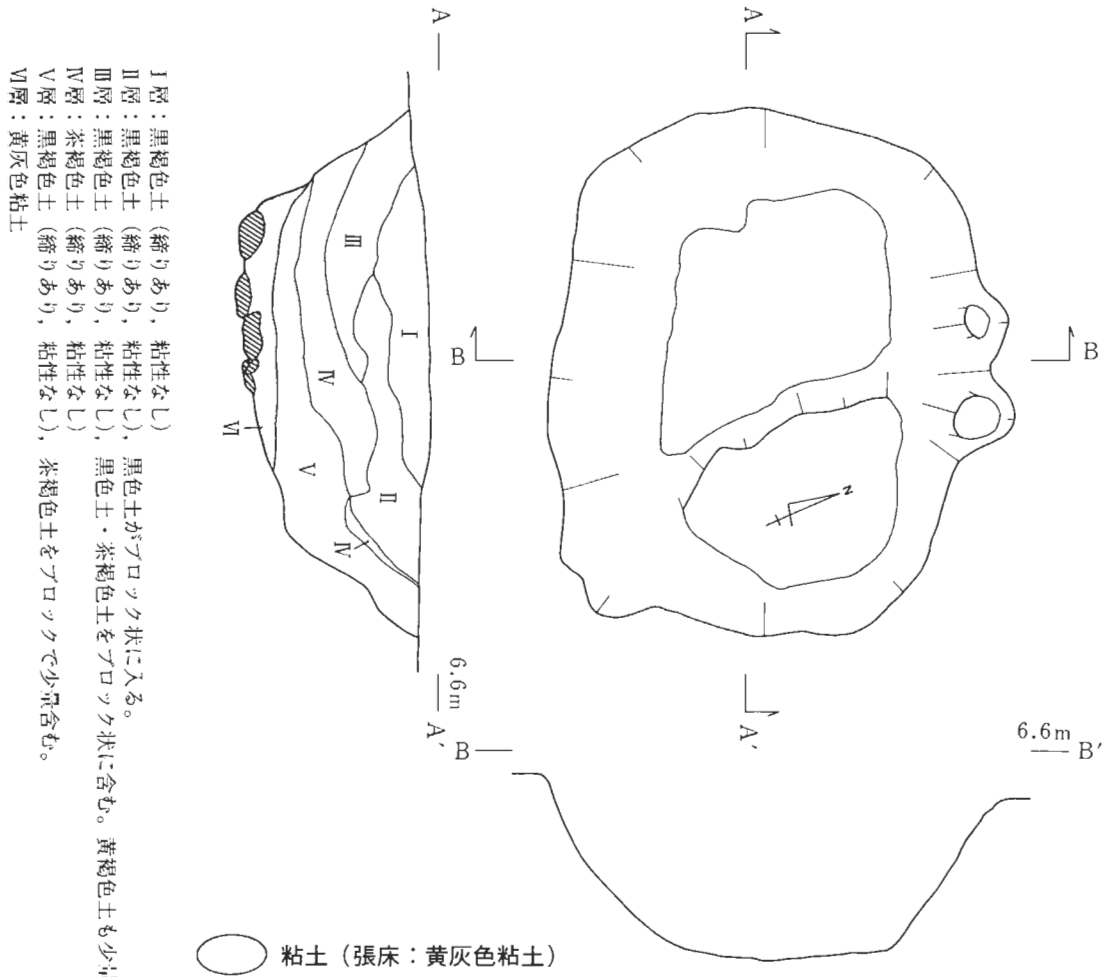
Fig. 29 SK 22・23実測図



粘土張り床検出状況



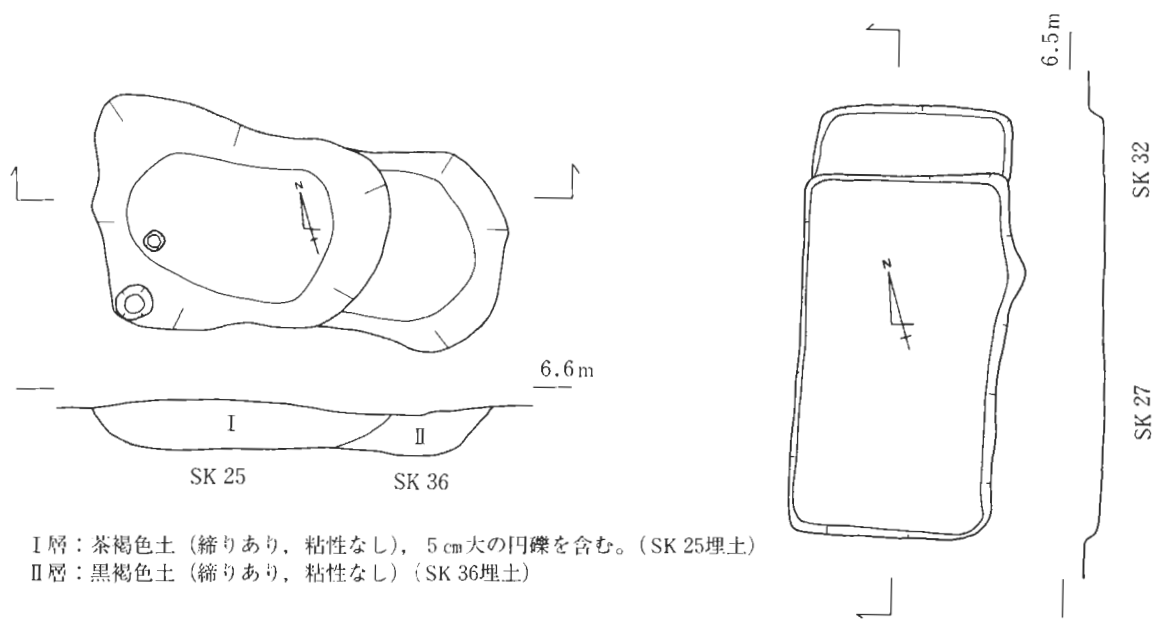
敷石検出状況



- I層: 黒褐色土 (締りあり, 粘性なし)
- II層: 黒褐色土 (締りあり, 粘性なし), 黒色土がフロック状に入る。
- III層: 黒褐色土 (締りあり, 粘性なし), 黒色土・茶褐色土をフロック状に含む。黄褐色土も少量混入。
- IV層: 茶褐色土 (締りあり, 粘性なし)
- V層: 黒褐色土 (締りあり, 粘性なし), 茶褐色土をフロックで少量含む。
- VI層: 黄灰色粘土

Fig. 30 SK 24実測図

0 1 m



I層：茶褐色土（締りあり，粘性なし），5 cm大の円礫を含む。（SK 25埋土）
 II層：黒褐色土（締りあり，粘性なし）（SK 36埋土）

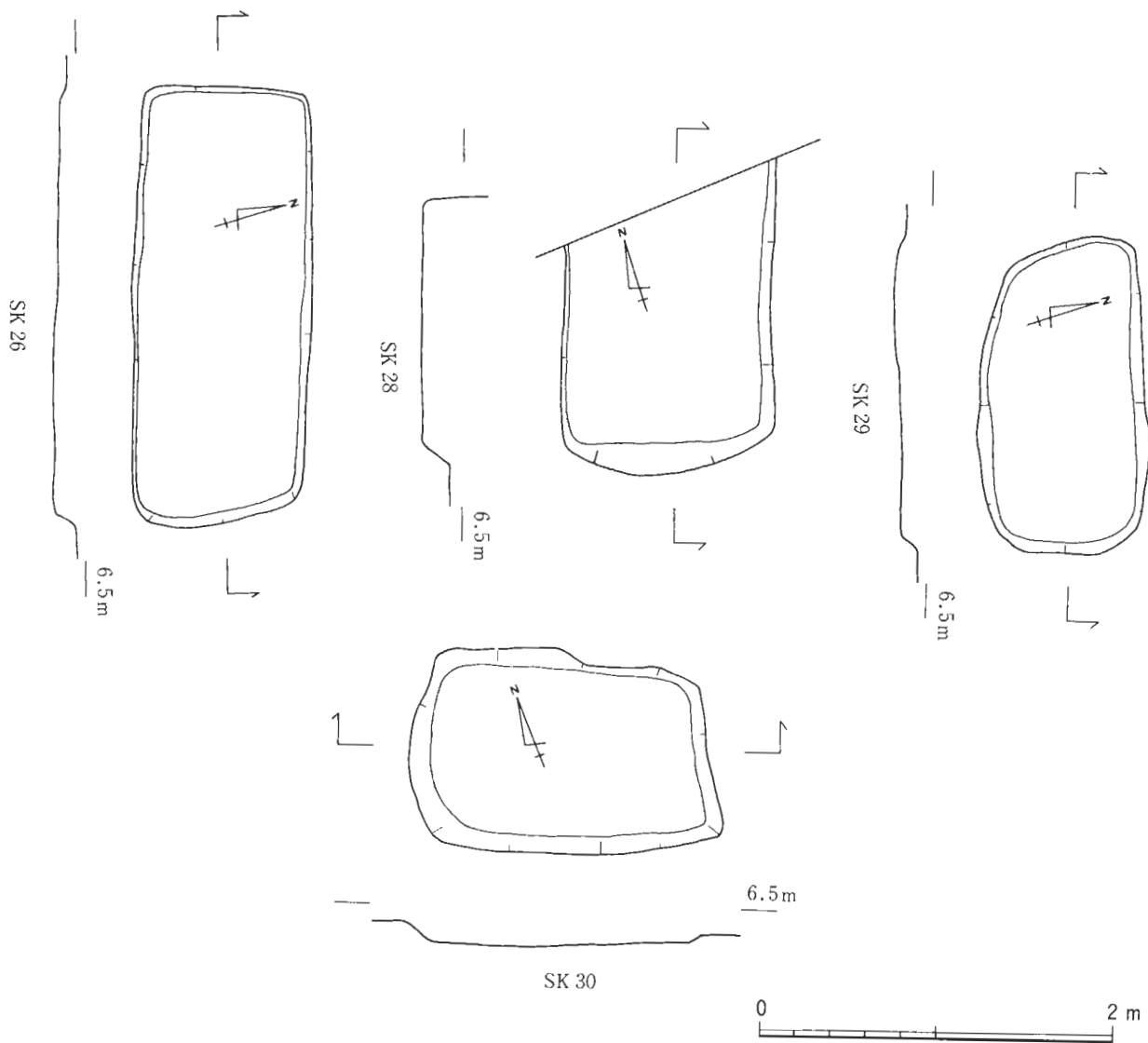


Fig. 31 SK 25~30, 32・36実測図

土師器片合わせて4点と弥生土器片14点が出土している。切り合い関係も考慮すると近世墓と考えられる。

SK 28 (Fig. 31)

やや中央寄りの北端にある。北3分の1程度調査区外に出る。確認長軸1.54m、短軸1.18m、深さ12cmの長方形プランを呈する。断面形は逆台形である。埋土中からは遺物は確認されていない。近世墓であろう。

SK 29 (Fig. 31)

SK 26の東隣にある。半分程度SK 26に切られている。長軸1.78m、短軸0.9m、深さ10cmの長方形プランを呈する。断面形は逆台形で、埋土中からの遺物は出土していないが近世墓であろう。

SK 30 (Fig. 31)

SK 26の北側にある。長軸1.68m、短軸1.12mの長方形プランを呈する。上部はSK 26に切られているが立ち上がりは残っており、深さは10cmで、断面形は逆台形である。埋土中からの遺物は出土していないが近世墓であろう。

SK 31 (Fig. 32)

北西はSK 28、東はSK 27に切られている。長軸は測定不可能だが短軸は1.38mである。上部は切られているため、深さは7cmと浅い。断面形は逆台形であり、埋土中からの遺物は出土していないが近世墓であろう。

SK 32 (Fig. 31)

SK 27にほとんど切られており、北端の一部のみである。長軸は測定不可能だが、短軸は1.06m、深さは10cmである。断面形は逆台形と考えられる。埋土中からの遺物は出土していないが近世墓であろう。

SK 33 (Fig. 32・36)

SK 26の西にあり、SD 3に切られている。長軸1.36m、短軸1.3mの円形プランを呈し、深さ51～55cmを測る。床面の外縁に深さ2～4cmの周溝があり、中央部は少し盛り上がっている。埋土はI層：黄褐色がブロック状に含む黒褐色シルト質土、II層：暗灰色砂層で5cm大の円礫を含む。埋土中から弥生土器片5点、近世陶器片2点、青磁皿(71)、他1点、染付片1点、骨細片数点、拓本不可能な銅銭1枚などが出土している。座棺の近世墓であろう。

SK 34 (Fig. 33・34・36)

SD 1の上部を切っており、北から1.5mの位置にある。長軸1.4m、短軸0.6m、深さ50cmの長方形プランを呈する。断面は箱形であり、床面より木棺片と寛永通宝3枚、永楽通宝1枚、釘数点、埋土中より骨片、図示の陶器2点と他1点、弥生土器片13点が出土している。この土壌は木棺の近世墓である。

SK 35 (Fig. 32)

中央部分に近いSK 33の東隣にある。長軸1.6m、短軸1.45mの円形プランを呈し、深さ25～38cmを測る。断面は舟底形に掘削した後、厚さ5～7cmの三和土^{ハンゾ}で堅めている。埋土中より近世磁器碗細片が1点出土している。近世の産業用土坑と考えられる。

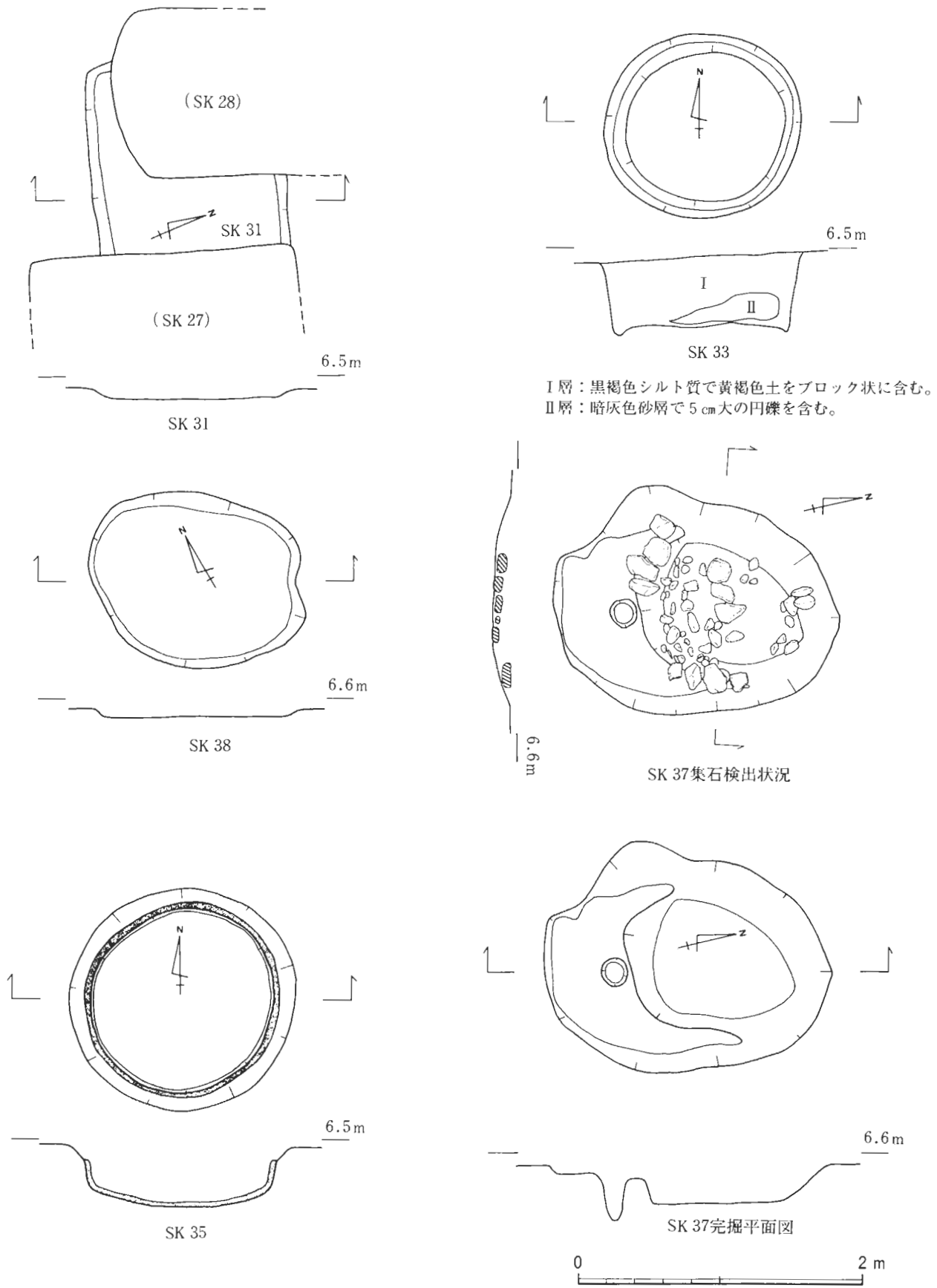


Fig. 32 SK 31・33・35・37・38実測図

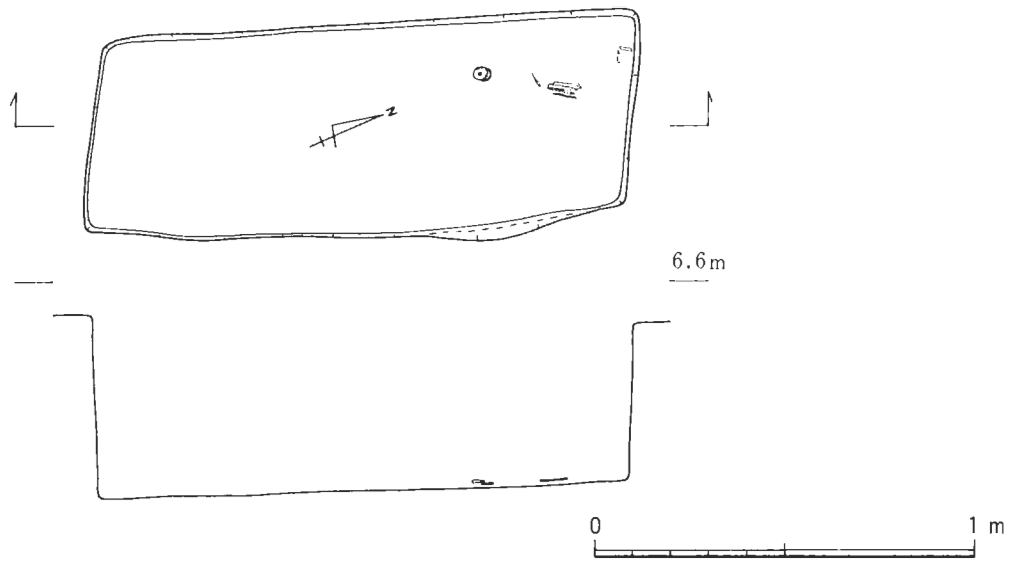


Fig. 33 SK 34平面及び遺物出土状況実測図

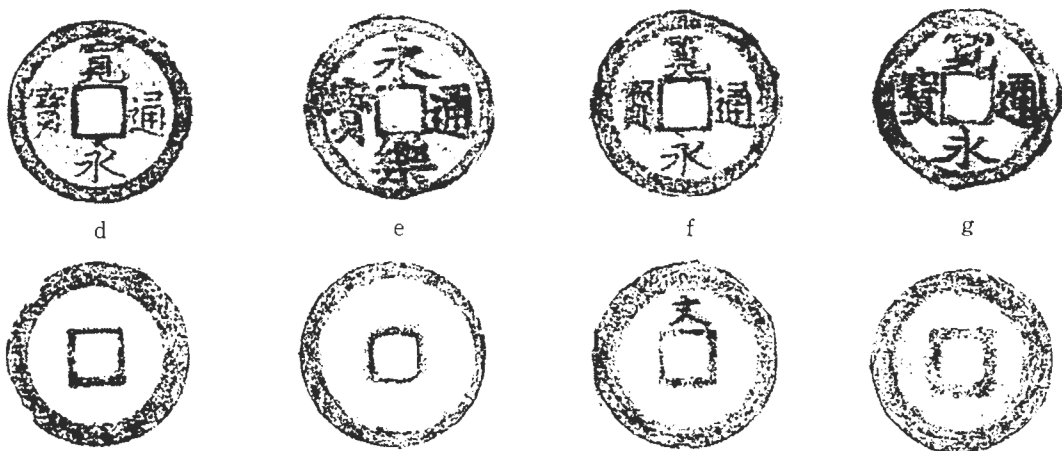


Fig. 34 SK 34出土の古銭（実大）

SK 37 (Fig. 32)

SK 20の東にある。長軸2 m、短軸1.52mの不整楕円形プランを呈し、深さ10~26cmを測る。断面は逆台形であり、上部からは拳大から人頭大の河原石が出土し、床面にはりつくように多量の石が敷かれていた。埋土中からは近世陶器片1点のみ出土している。この土坑の2 m東に井戸（SE 1）があるので、それに伴った洗い場と考えられる。床は2段になっており、上部に小さなピットがあるがこの洗い場に伴ったものかは明らかではない。

SK 38 (Fig. 32)

SK 37の南にある。長軸1.44 m、短軸1.3mの不整形プランを呈し、深さ5 cmを測る。断面形は逆台形で浅い。埋土中から土師器の口縁部や底部片が4点出土しているが図示できるものはない。

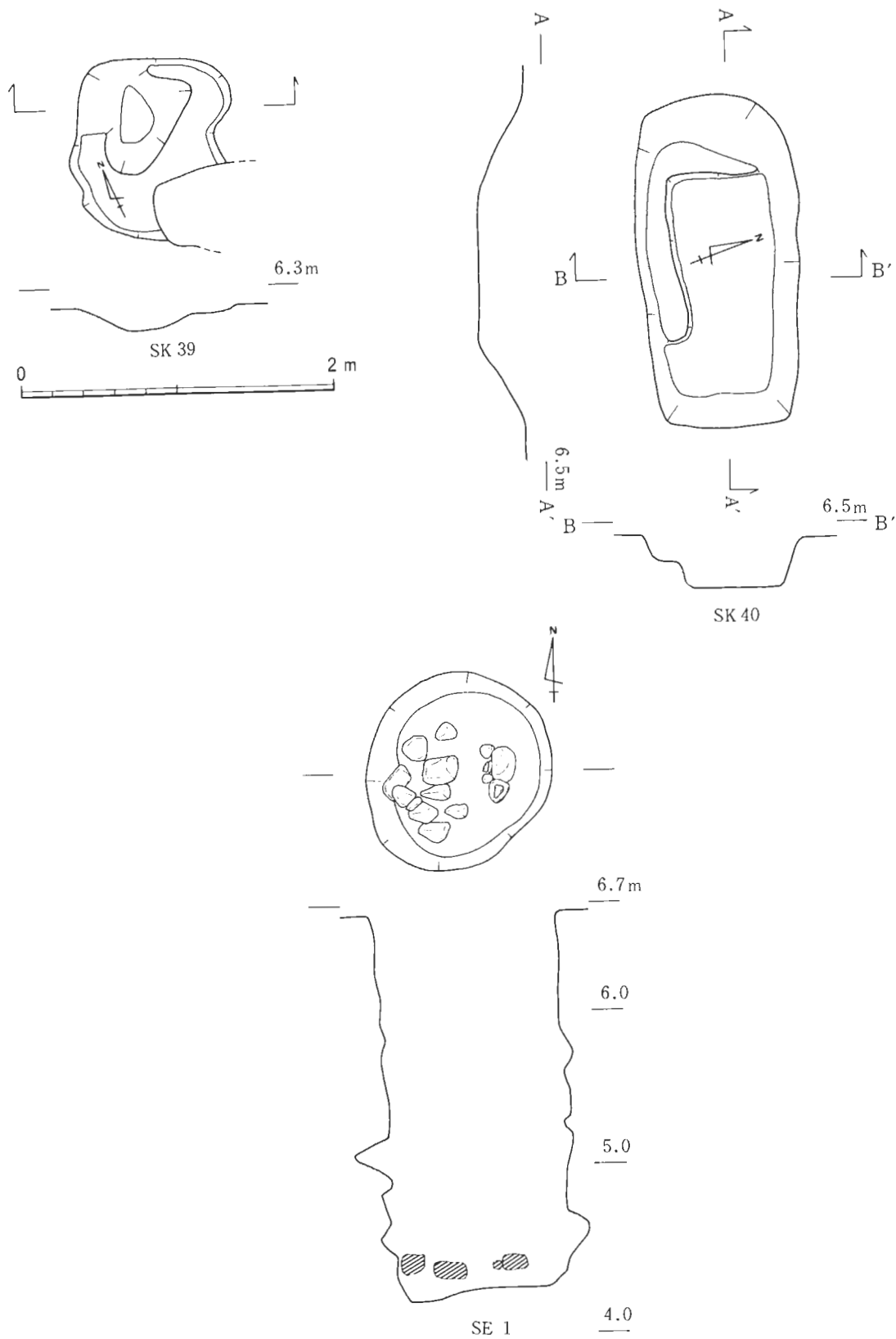


Fig. 35 SK 39・40, SE 1 実測図

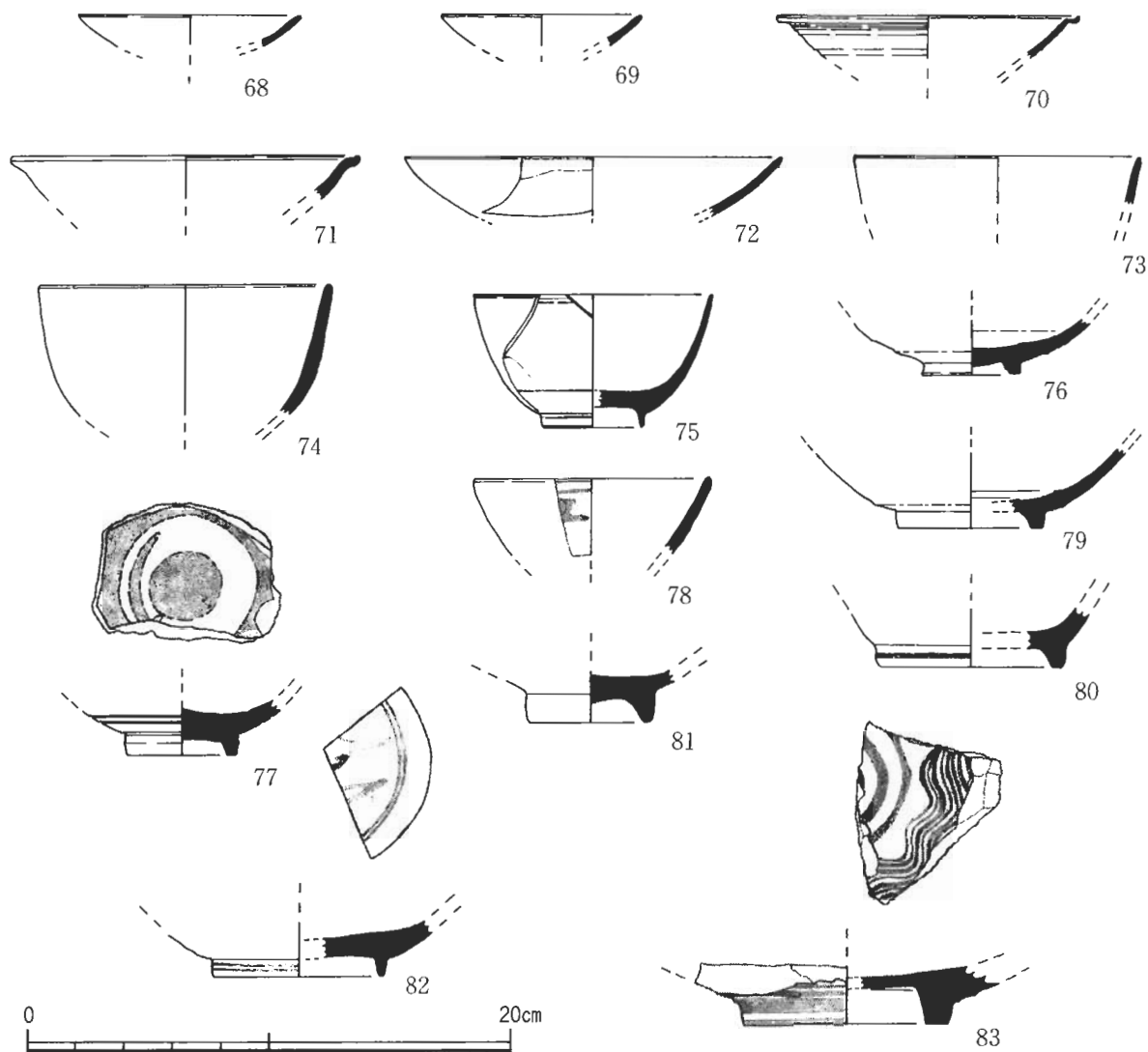


Fig. 36 SK 21 (82・83), 22 (72・73), 23 (70・74), 26 (75), 27 (69), 33 (71),
34 (76・79), 39 (68), SE 1 (77・78・80・81) 出土遺物実測図

SK 39 (Fig. 35・36)

西南にあり、長軸1.16m、短軸0.9mの不整形プランを呈する。床面は2段になっており、上段の深さは2.5cm前後で下段は17.5cmの舟底形である。埋土中から、土師小皿(68)と弥生土器片が10点出土している。

SK 40 (Fig. 35)

調査区中央よりやや西で北寄りにある。長軸2.18m、短軸1.04mの楕円形プランを呈し、深さ30cmを測る。床面は2段になっており、断面は逆台形を呈する。この土坑はSD 44を切っている。埋土中より弥生時代後期の土器細片29点と瓦器細片1点、釘1点出土しているが図示できるものはない。

② 井戸

SE 1 (Fig. 35・36)

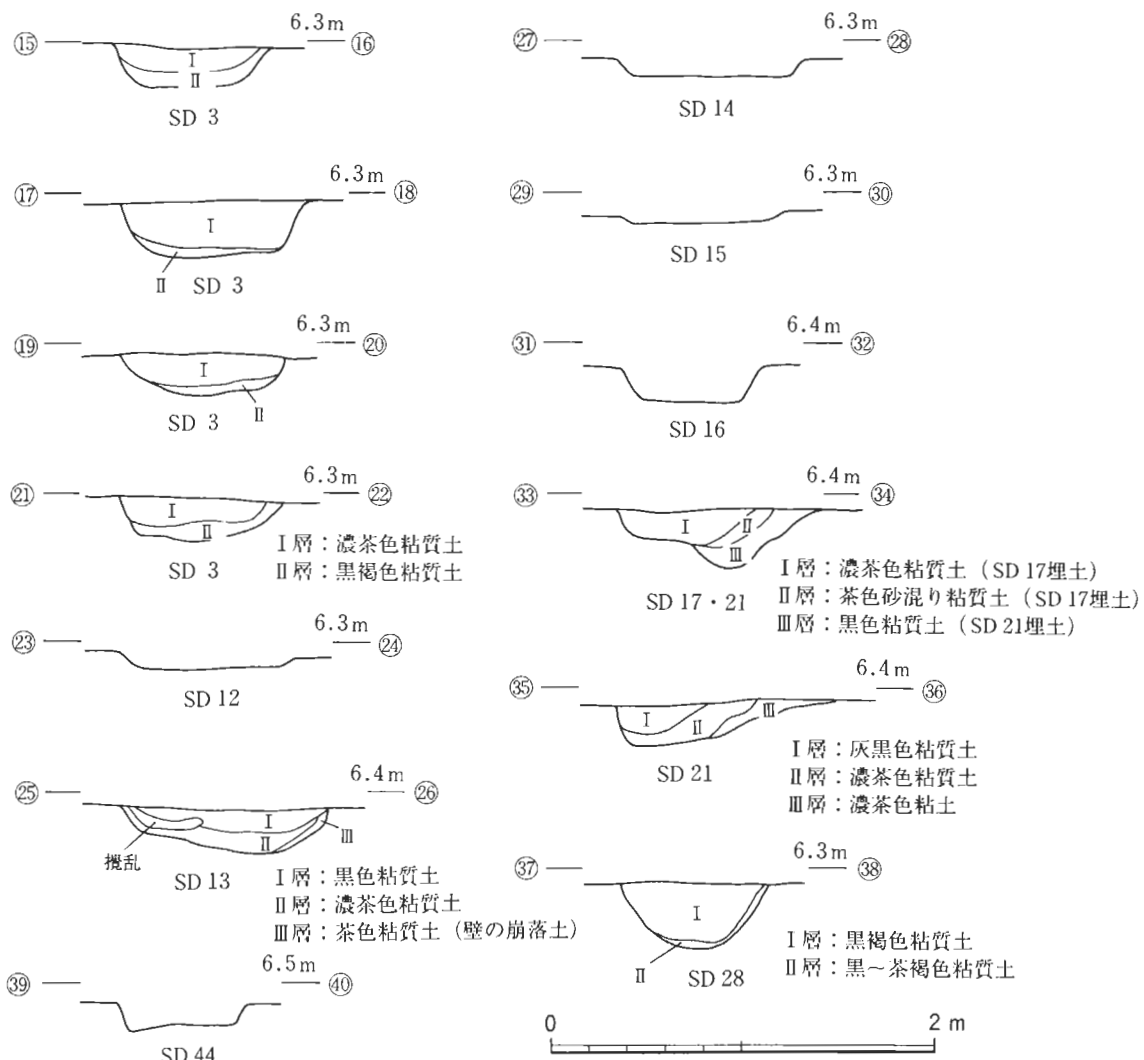


Fig. 37 SD 3・12~17, 21・28・44セクション及びエレベーション図

SK 37の1.5m東にある。径約1.2m、深さ2.5m前後を測る素掘の井戸である。壁面は垂直に立ち上がるが、ところどころに崩壊とは考えられない段状の凹みがある。床面近くには人頭大の河原石が数個置かれており、井筒は存在しない。河原のレベルあたりからかなりの湧水が見られた。埋土下層より伊万里碗(78・80)や近世陶器碗(77・81)が出土した。18世紀代の井戸である。

③ 溝

中世以降の溝は、大小40条以上検出した。これらのほとんどが調査区の西半分にある。東側の削平深度が深かったことも考えられなくはないが、土地利用を考える上で注意しなければならない。溝の方向は、概ね東西方向と南北方向とに分けることができる。切り合い関係から見ると総じて前者が古く後者が新しい。今回溝としたものには、長さ数mに満たないものもあり、その性格も不明なものが多い。ここでは主要な溝について説明し他のものは一覧表に譲りたい。

SD 3 (Fig. 37・38)

調査区の西半分を逆L字状に走る。総延長80.8mで南北28.8m、東西52.0mを測る。幅は60~80cm、

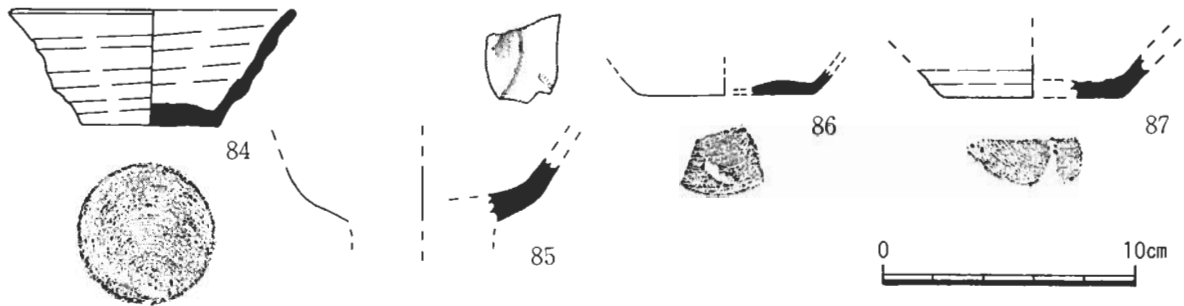


Fig. 38 SD 3 (85・86), SD 13 (84), SD 28 (87) 出土遺物実測図

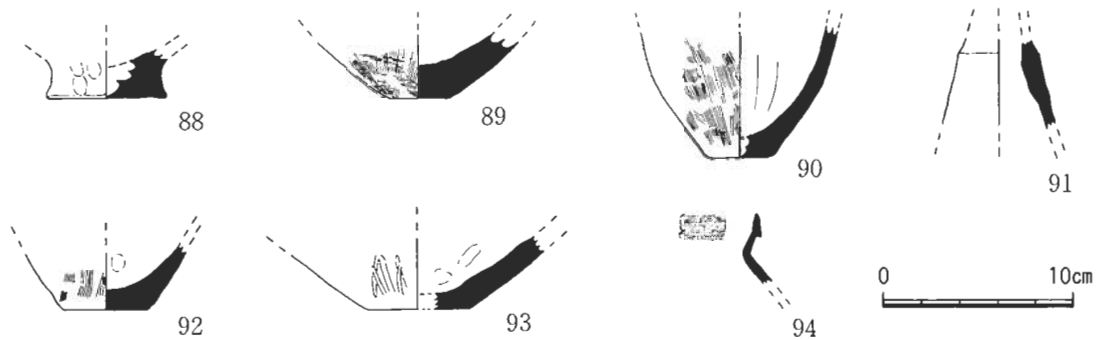


Fig. 39 SD 12 (89), SD 17 (88), SD 28 (91), SD 38 (90・92~94) 出土遺物実測図

深さは20~30cmを測り、断面形は舟底ないし逆台形を呈す。埋土は地点によって層厚が異なるが、I層：濃茶色粘質土、II層：黒褐色粘質土である。埋土中より弥生後期末の土器及び中世土器が多く出土しているが、図示できたものは青磁碗（85）と土師器坏底部（86）のみである。15世紀代に比定することができる。性格については、屋敷地を圍繞する溝の可能性もあるが、内側に建物痕跡が認められない。

SD 12 (Fig. 37・39)

調査区の南を東西に走る。延長25.6m、幅0.7~1m、深さ5~8cmを測る。埋土は黒褐色粘質土で、断面形は舟底形を呈す。埋土中より多量の弥生後期末土器片と須恵器が1点出土しているが図示できるものは弥生後期末の甕底部（89）のみである。SD 9~11・18を切っており、SD 6に切られている。中世以前に属する可能性がある。

SD 13 (Fig. 37・38)

調査区を南北に貫く溝である。延長32.3m、幅0.9~1.0m、深さ12~25cmを測る。断面形は舟底形を呈す。埋土はI層：黒色粘質土、II層：濃茶色粘質土、III層：茶色粘質土である。SD 3を切っており、SD 6に切られている。埋土中より多くの弥生後期末土器片と完形の土師器坏（84）を含む少量の中世遺物が出土している。SD 3との時間差はほとんどないと考えられる。15世紀に比定できる。

SD 14 (Fig. 37)

調査区南寄りで検出した。延長9.6m、幅0.8~1.6m、深さ2~7.8cmを測る。断面形は逆台形を

呈す。埋土は濃茶～黒褐色粘質土で、埋土中より弥生後期末の土器片が少量出土している。SD 13と一部切り合うが先後関係は不明。SD 15と3 mの間隔を保って平行に走っている。中世に属する。

SD 16 (Fig. 37)

調査区を南北に貫く。延長31.2m, 幅50～60cm, 深さ4～17.8cmを測る。埋土は黒～濃茶色粘質土で、断面形は逆台形を呈す。埋土中より多量の弥生後期末の土器と近世磁器が出土しているが図示できるものはない。SD 17と平行して走っている。近世に属する。

SD 17 (Fig. 37・39)

調査区を南北方向に貫く溝であるが、北部においてSD 21をクランク状に切っている。延長27.8m, 幅0.6～0.9m, 深さ14.7～20.6cmを測る。埋土はI層：濃茶色粘質土, II層：茶色砂混じり粘質土で、断面形は舟底形を呈する。SD 17は、SD 21が埋没した後、SD 21の北部を利用して掘削したものと考えられる。SD 17からも甕底部(88)をはじめ多量の弥生後期土器が出土しているが、近世に属する。

SD 21 (Fig. 37)

調査区を南北に貫く溝でSD 16・17などと平行して走る。SD 3を切っておりSD 17に切られている。延長31.4m, 幅80cm, 深さ9.8～22.7cmを測る。埋土はI層：灰黒色粘質土, II層：濃茶色粘質土, III層：濃茶色粘質土である。断面形は舟底形を呈す。SD 21も弥生後期の土器片が多量に出土しているが、近世に属する。

SD 28 (Fig. 37・38・39)

SD 28もSD 16・17・21などと共に調査区を南北に貫く溝である。延長28m, 幅50～80cm, 深さ18.7～32.6cmを測り、SD 3を切っている。埋土はI層：黒褐色粘質土, II層：黒～茶褐色粘質土である。断面形はU字形を呈す。埋土中より多量の弥生後期土器片(91)と中世土師器坏(87)などが出土している。SD 28も近世に属する。

SD 38 (Fig. 39)

調査区西端にある南北方向に走る短い溝である。延長6.8m, 幅1.0m, 深さ2～5.5cmを測る。埋土は黒褐色粘質土で、断面形は逆台形を呈す。埋土中より多くの弥生中・後期土器と共に少量の近世磁器が出土している。90・92は弥生後期の甕底部, 93は壺底部, 94は凹線文を施した中期末の甕の口縁部である。SD 39～41も同規模, 同じ方向に走っており、共に近世の遺構であろう。

④ ピット (Fig. 40)

調査区の東北部と中央部南寄りの部分から集中して多量のピットが検出された。後者は遺物が全く認められず、その規模も前者に比して小さい。前者は掘立柱建物の柱穴に該当するものも数多く

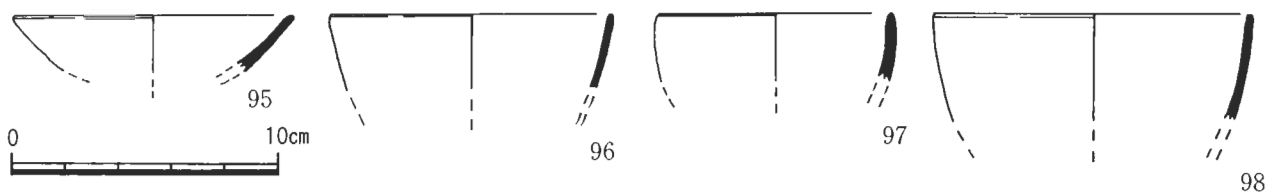


Fig. 40 P14 (98), P17 (96), P19 (95), P20 (97) 出土遺物実測図

存在するものと思われるが、残念ながら建物跡を想定するには至らなかった。また出土遺物も僅少である。P19から出土した(95)が近世磁器皿である他は、すべて京焼風陶器碗(96~98)である。

(3) その他の遺構

SX 1 (Fig. 41)

調査区の東南隅にある。長軸2.8m、短軸2.4m、深さ84cmを測る不整形の土坑で、断面形は舟底形を呈する。出土遺物は全く見られず時期・性格共に不明であるが、図示したように埋土の堆積に特徴がある。自然の状態での堆積ではなく、意図的な秩序立った一種の版築を思わせる埋土の状況を示している。Ⅱ~Ⅵ層はほぼ等間隔を保って左下がりに堆積している。Ⅵ→Ⅱの順で置かれたものであろう。更にⅠ層が黒褐色シルト質の層準であるのに対して、Ⅱ層からⅥ層に移行するに従って、黒色から茶、淡黄色へと色調が変化し、それと共に砂礫の混入が多くなっている。SX 1の西にあるSX 2も同様の堆積を示しており、Ⅰ層→Ⅴ層への変化は全く同じである。

SX 3 (Fig. 41)

調査区西部にある。長軸4.46m、短軸3.5mの楕円形プランを有し深さは0.9~1.0mを測る。SX 1・2に比してかなり大きい。しかし埋土の状況は同様の特徴を示しており、Ⅱ層→Ⅵ層への色調の変化、土質の変化もSX 1・2と同じである。

この種の土坑は、調査区内に3~4基存在するが埋土の状況は基本的にSX 1~3と同じである。遺物が全く見られないので時期比定は難しいが、弥生後期の溝に切られている例も見られるところから、弥生後期を遡ることは間違いない。今後資料の増加をまって検討したい。

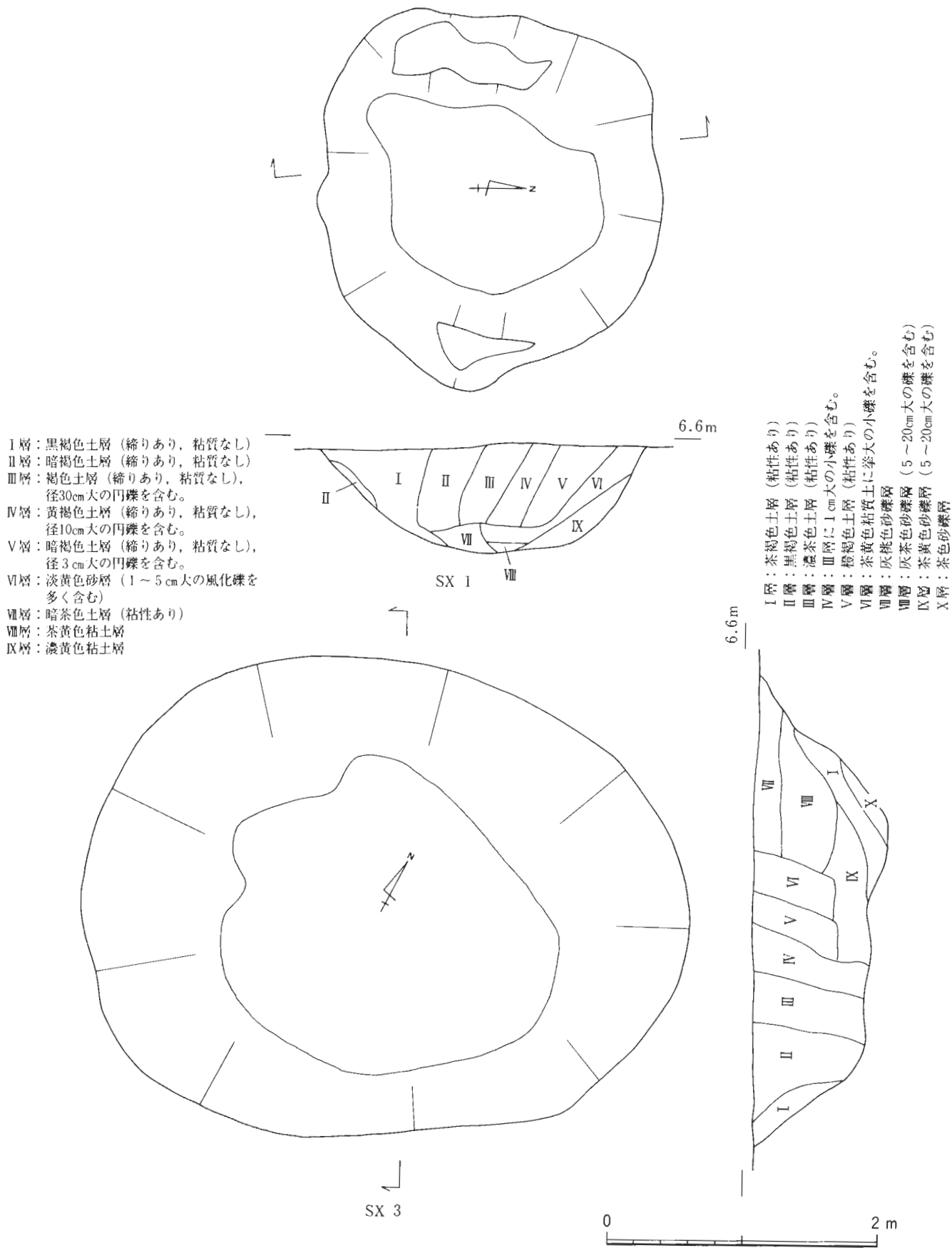


Fig. 41 SX 1, SX 3 実測図

第Ⅳ章 考 察

1. 小籠遺跡出土の六道銭について

高知県における古銭の出土例は、田村遺跡群、岡豊城、芳原城、五藤家屋敷跡などが主であり、報告書には渡来銭と寛永通寶の銭種や計測が記載してある。寛永通寶は江戸時代から明治時代にかけて長い間鑄造してきた古銭であるから、今回はもう少し分類して記載することとした。

I区では3基の近世墓（SK 17・33・34）から、六道銭が検出された。六道銭は死人を葬る時、棺に入れる六文の銭といわれ、六枚セットが多いが五枚以下や七枚以上のものもある。I区では五枚以下のみである。銭種は2種で永楽通寶1枚、寛永通寶8枚、不明2枚の合計11枚出土している。寛永通寶は大きく3種類（古寛永・文銭・新寛永）に分類している。書体の特徴から分類し、古寛永（1636年初鑄）は寛永通寶の「通」の字の「マ」の所がすべて「コ」状となり、「寶」の字の「貝」の所がすべて「ス」状になる。背上に「文」の字があるのはすべて文銭（1668年初鑄）である。古寛永通寶以外は新寛永通寶になるのだが、新寛永は文銭とそれ以外とに分けている。新寛永の字体の特徴は「寶」の字がすべて「ハ」状になり、「通」の字は「マ」と「コ」の2種類になる。

SK 17は棺板の上から寛永通寶のみ5枚出土している。(a)と(b)は背上に「文」の文字がある文銭（1668～1683年鑄造）であり、(c)は新寛永で、書体の特徴から京都の不旧手銭（1726年初鑄）と考えられる。残りの2枚は錆化のため採拓不能だが、字体を見ると新寛永（1697年初鑄）である。この墓の副葬品は六道銭のみの出土であることから銭貨の組み合わせでみると、文銭鑄造後新寛永が流通してきた18世紀中期頃（1726年以降）に埋納されたといえる。

SK 33からは骨の細片と共に、銅銭2枚が付着した形で出土している。この銅銭は特に錆化が激しく原形を留めていないため判読不可であるが、文銭鑄造後銅の質が脆くなった新寛永ではないかと思われる。

SK 34の六道銭は永楽通寶1枚と寛永通寶3枚の4枚セットで出土している。永楽通寶には私鑄銭もあるが、背後の状態から見て、(e)は明王朝の渡来銭（1408年初鑄）と思われる。寛永銭の(g)は古寛永（1636～1656年鑄造）で、寛永銭では一番古いものである。(f)は文銭、(d)は新寛永であり、書体の特徴から猿江銭ではないかと思われる。この墓は渡来銭や古寛永が新寛永に混ざって出土していることから1697年以降18世紀の初期に埋納されたものであると考えられる。

文末になりましたが、古銭の判読に協力、助言していただいた『東京外郭環状道路練馬地区遺跡調査会』の惟村忠志氏に対して、記して感謝いたします。

参考文献

- (1) 惟村忠志「近世の六道銭（東日本）」『六道銭について』出土銭研究会第1回研究会資料 1994年
- (2) 惟村忠志・増尾富房「再検討を必要とする江戸時代銭貨の研究 ―御殿場市長坂遺跡出土銭貨の分析を通じて―」『牟邪志』第5号. 武蔵考古学研究会 1992年
- (3) 扇浦正義「第2節 北山伏町遺跡の遺構・遺物分析」『北山伏町遺跡』新宿区教育委員会 1989年

(4) 桜木晋一「前畑遺跡の出土銭貨と鹿児島県下の出土六道銭」『前畑遺跡』(第6分冊)鹿児島県教育委員会 1990年

出土古銭計測表

挿図番号	銭種	分類	初鑄年	銭径 (cm)			重さ (g)	出土地点	伴出遺物	備考
				外径	(表)内径(裏)					
a	寛永通宝	文銭	1668	2.54	2.02	1.79	2.3	SK 17	なし	背文
b	〃	〃	〃	2.53	1.99	1.79	2.25	〃		〃
c	〃	新寛永 (不旧手銭)	1726	(2.36)	2.01	1.90	1.20	〃		江戸深川十万坪 ではなく京都七 条の不旧手銭
d	〃	新寛永 (猿江銭)	1697	2.49	1.99	1.79	2.83	SK 34	骨の細片 釘 木棺片 近世陶器片 弥生土器片	
e	永楽通宝	(明銭)	1408	2.50	2.00	2.03	3.05	〃		渡来銭
f	寛永通宝	文銭	1668	2.51	1.78	1.79	2.90	〃		背文
g	〃	古寛永	1636	2.46	1.92	1.80	2.90	〃		
採掘不能	〃	新寛永	1697	(2.40)	1.91	1.87	0.80	SK 17	なし	
〃	〃	〃	〃	(1.90)	計測不能		0.30	〃		
〃	不明	不明	不明	(2.14)	〃		2枚で	SK 33	骨の細片, 近世陶 器片, 近世磁器片, 弥生土器片	2枚付着の銅銭
〃	〃	〃	〃	〃	〃		1.75	〃		

() の数字は錆化し、欠損後の残存数字

2. 近世墓について

I 区の調査では、22基の近世墓を検出した。すべて調査区の東北隅に集中して営まれており、ピット集中部と一部重複している。これらの配置を見ると全く無秩序に造営されたのではなくおおよそ北西方向から南東方向に列状の配列をとっている。すでに触れたように造営後かなりの削平を受けており一部を除くと遺存状況はあまり良好とは言えず、墓壙の立ち上がりが数cmを留めるのみという例もある。従って墓標など標式となるものは全く認められなかった。完全に切り合っているものもあれば、位置関係から見て併存し難い例もあり、墓地として一定期間存在していたことが考えられる。これらの近世墓はすべて土葬によるものであり火葬墓は全く認められない。ここでは土壙墓の平面形と内部構の差異から以下のように分類を行い、本県近世における墓制について若干の考察を行うものである。I類：平面形が長方形を呈し断面が箱形となるもの。(SK 8・20・26～32・34) II類：平面形が隅丸方形～隅丸長方形を呈し断面が逆台形状をなすもの。本類は、内部施設を全く有しないII-a類(SK 10・12・15・22・23)と、床に礫と粘土を敷き詰めた礫床構造を有するII-b類(SK 18・24)とに分けることができる。III類：平面形が円形を呈し断面は逆台形状に立ち上がる。本類も床面が平坦面をなすIII-a類(SK 1)と床面縁部が溝状に凹むIII-b類(SK 13・33)とに分けることができる。IV類：平面形が略方形～不整形を呈するもの。(SK 17・19)

I類はその形態から見て箱形の木棺墓と考えられる。総じて内部の残存状況は悪いがSK 34からは、板状木片と共に釘が出土していることから裏付けられよう。ただし削平を考慮に入れても極

端に浅い諸例（SK 8 など）については直葬の可能性も考えられよう。これらの主軸方向はおおむね南北方向を有するものと東西方向を有するものがある。前者が5基（SK 8・27・28・32・34）、後者が5基（SK 20・26・29・30・31）であるが、主軸方向の違いによる埋葬時の先後関係は明らかにできない。本墓群の西端ではSK 26～32の7基が最高5基と切り合っており、後述するように100年余りの間にこれほどまでの重複埋葬が可能であったかどうか問題は残る。Ⅱ類はその形態から座棺もしくは木棺が考えられるが、礫床構造を有するⅡ－b類は一種の厚葬として位置付けることができよう。Ⅲ類は座棺と考えられる。床周縁の溝状の凹みは棺桶座の痕跡であろうか、今後資料の増加をまって検討したい。

次に時期について見なければならない。22基の中で時期比定の可能なものは、六道銭が出土したSK 17とSK 33・34、18世紀に属する完形に近い肥前系の皿（66）が出土したSK 13のみである。他の墓からも近世陶磁器片は出土しているが、すべて細片であり時期決定の資料とはなり難い。前項で泉が述べた六道銭をもとに造営年代を求めるとSK 17が1726年以降、SK 34が1697年以降ということになる。幕府公鑄貨である六道銭の交替・浸透については、桜木晋一氏がセリエーションで明らかにしたように、漸移していることから両者の先後関係を決定付ける資料として使うことは危険である。しかしながらSK 34からは、17世紀後半以降ほとんど見られなくなる渡来銭が出土していることからSK 34を古くSK 17を新しく位置付けたい。他の墓については積極的な時期比定を可能とする遺物が認められないが、埋土から見ると近似した状況を示しており、概ね17世紀末～18世紀代にかけて営まれた墓群であるとする事ができる。そして重複関係など問題点はあるものの一定の秩序だった配列を有することから100年余りに渡って営まれた一族の墓として位置付けることが可能であろう。

さて以上のような土壙墓を本県の墓制の中でどのように位置付けることができるであろうか。本県の近世墓の研究は、近年岡本桂典氏によって意欲的に進められているが、その対象は主として墓標などの上部構に属するものであって、下部構造を対象とした例はほとんど見られないのが現状である。すでに周知のように近世初期、幕府はキリスト教禁令を強化し寺請制度などによりほとんどが仏教徒となり火葬が大勢を占めるようになったと言われる。しかしながら幕藩体制の精神的支柱である儒教の奨励は、葬祭にも大きな影響を与えるようになり、火葬が忌避され儒葬による厚葬、土葬が浸透して行ったことが知られている。近世前期の土佐においては、奉行職野中兼山によって徹底した儒教倫理に基く施策がなされ、墓制においても仏教思想による火葬を「・・・実虎狼之不如也」と痛烈に忌避し儒葬を實踐している。また最近発掘調査の行われた奥谷南遺跡においても儒葬墓が確認されるなど近世前期における儒葬の浸透の一端がうかがわれる。また野中兼山は父母の死去には3年の服喪を命じ、葬儀に際しては、その悲しみを十分にあらわし、手厚い野辺の送りをすべきことを賞を与えて勧めるなど儒教倫理に基づく教化的法制を實施したと言われる。今次調査で確認した近世墓はすべて土葬墓であり、その背景には、かかる教化政策の浸透が考えられる。⁽⁵⁾ また厚葬の可能性を指摘したⅡ－b類のSK 18・24については、儒葬へのより忠実な接近を示唆している可能性も考えられよう。

土佐においても全国的な趨勢に照応して平安時代以降中世を通して火葬墓の盛行が指摘されてお

り、事実これまでの発掘調査、その他で明らかとなっている中世墓はほとんどが火葬によるものである。⁽⁶⁾ところが近世になると今次調査の22基をはじめ、他遺跡の例も一転して土葬となっている。まさに劇的な変化と言うべき現象である。しかしながらこの変化を上述のような教化政策の忠実な履行の結果として歴史的に一般化してよいのであろうか。一つは被葬者の階級性の問題がある。22基のうち六道銭を有するものが3基（SK 17・33・34）と副葬品と考えられる皿を有するものが1基（SK 13）認められたが、それ以外は何の副葬品も持っていない。従ってこれらの被葬者は、武士など支配階級に列するものではなく農民など被支配階級に帰属するものと考えられる。中世火葬墓の多くは岡本健児氏も指摘しているように「武士層」や僧侶など支配階級に属するものであり被支配者層に属する例は知られていない。おそらくこのことは階級社会成立以降中世に至っても、被支配階級においては、大地に明瞭な痕跡を留める程の墓制の営みは経済的にも思想的にも果し得なかったと解すべきであろう。近世における土葬墓の飛躍的な増加は、儒教倫理に基づく教化政策と全く無関係ではないにしても、その底流には近世村落の定着とそれによる近世家族制度の成立、貨幣経済の浸透などによる構造的な変化が横たわっているとしなければならない。すなわち近世に至って、それ以前と比較し、より多くの人々が大地に明瞭な痕跡を留める墓制を採用し得るに至ったことを評価すべきである。おそらくこのことと坪井良年が日本文化史上の重要な課題として指摘するところの、墓標が近世に至って「非宗教的な型式を持つ方柱型類が擡頭してくる」こととは無関係ではあるまい。中世墓と近世墓について単に個々の事例を比較して、その差異を強調する⁽⁸⁾だけでは、それぞれの時代の墓制の持つ歴史的性質を見失ってしまうであろう。

本県における近世墓の研究、わけでも下部構造についての研究はほとんどなされていない。近年の発掘調査の増加によってその類例は増加の一途をたどっているが、本格的な取り組みがなされていないのは誠に遺憾である。近世墓が文化史、社会構成史上の重要な要素であることは論を待たない。今後墳墓構造の実態とその類型化への積極的な取り組みのなされることを期待する。最後に本小論作成について、岡本健児、岡本桂典氏から貴重な教示を頂いた。記して感謝の意を表したい。

註

- (1) 桜木晋一「前畑遺跡の出土銭貨と鹿児島県下の出土六道銭」『前畑遺跡』（第6分冊）鹿児島県教育委員会 1990年
- (2) 岡本桂典「土佐十和村の墓標について」『立正史学』第59号 1986年
岡本桂典「笠塔婆論一特に題目塔に関連して」『考古学ジャーナル』288号 ニューサイエンス社 1988年 など
- (3) 久保常晴「火葬墓の類型と展開」『新版仏教考古学講座 第7巻』雄山閣 1984年
- (4) 山崎闇斎「婦全山記」『土佐国群書類從拾遺』卷五十二 所収 内閣文庫所蔵
- (5) 吉永豊実『土佐藩法制史』いずみ出版 1974年
「泣きみそ三匁、よう泣いて五匁」という諺は、葬儀に際して泣き悲しむ程度によって賞を与えたところから来ているとの指摘が、多くの文献史家からなされている。
- (6) 岡本健児「土佐における古代・中世の火葬墓資料」『土佐史談』108号 土佐史談会 1964年
- (7) (6)に同じ
- (8) 坪井良平「山城木津惣墓標の研究」『考古学』第十卷第六号 東京考古学会 1939年

遺物観察表 (土器)

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	特 徴	備 考
Fig. 9-1	ST1 I層	甕	— — —	11.1 — — —	チャートの粗粒砂と砂岩の粗粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。 外面叩きの下地の後、ナデ仕上げ。口縁部は叩き出し。 内面は左上がりのハケ。くの字に曲がる頸部。	
〳 -2	ST1	壺	— — —	— — —	チャートの粗粒砂、小礫を含む。明茶色。 外面縦ハケ。くの字に曲がる頸部。 内面へら磨き。	
〳 -3	〳	甕	— — —	23.0 — —	チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。黄茶色。 胴部外面は縦ハケで、内面は削りの後、木理の粗い原体による右下がりの ハケ調整。口縁部内面はナデ。胴部に指頭圧痕。	外面全面煤 ける。
〳 -4	〳	〳	— — —	— — —	チャートの細～粗粒砂を少量含む。淡黄茶色。 外面は右上がりの叩き成形。丸底。 内面は横方向のハケ。	
〳 -5	〳	〳	— — —	— — —	チャート小礫、粗粒砂を含む。淡明茶色。 外面は叩き成形。ほとんど丸底。 内面ナデ調整。	
〳 -6	〳	〳	— — —	— — —	チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。浅黄橙色。 外面木理の細い縦ハケ。 内面木理の幅広い左上がりのハケ。	外面一部煤 け。被熱赤 変。
〳 -7	〳	土師杯	— — —	16.2 — —	チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。橙茶色。 内・外面の調整不明だが、叩き成形だろう。	
〳 -8	〳	鉢	— — —	9.8 5.5 — —	チャートの小礫、粗粒砂を含む。 外面叩き成形で体部の大半は叩きをナデ消す。 内面は横ハケ。	
〳 -9	〳	〳	— — —	11.8 5.4 — 3.5	チャートの小礫、粗粒砂を含む。淡茶色。 外面下半に右上がりの叩き痕があり、亀裂が走る。 内面全面に左上がりのハケ。	
〳 -10	〳	〳	— — —	17.8 7.9 — 2.4	チャートの粗粒砂と円礫を少量含む。外面は橙色、内面にぶい橙色。 外面は右上がりの叩きを全面に残し、部分的に磨きがある。内面は左上が りのハケ調整が胴部から上部にかけて全面に見られ、何度もハケ調整して いる。口縁部横ナデで外唇も横ナデで面取る。	
Fig. 11-12	ST3	壺	— — —	22.0 — — —	チャートの小礫、粗粒砂を少量含む。茶色。 口唇は強い横ナデにより、僅かに上下に拡張。 外面縦ハケ調整後、部分的にへら磨き。 内面は横ハケ。	
〳 -13	〳 (サブ)	〳	— — —	12.3 — —	チャートの粗粒砂を少量含む。赤茶色。 外面口縁部に強い横ナデを施し、黒色顔料塗布が全面に見られる。 内面には指頭圧痕あり。	
〳 -14	〳	〳	— — —	16.8 28.6 21.6 5.8	チャートの小礫、粗粒砂を少量含む。外面浅黄橙色、内面明黄褐色。 外面縦ハケが全面にある。口唇は強い横ナデ。 内面は指ナデの後、削りがある。削りは底部から左上方に強くなされる。 頸部僅かにハケが残る。	
〳 -15	〳 I層	甕	— — —	— — 4.8	チャートの小礫、粗粒砂を含む。赤茶色。 外面は縦方向のへら磨きがあったと思われる。 内面は削り。	搬入の可能 性あり。
〳 -16	〳	〳	— — —	12.5 20.1 14.9 4.5	チャートの小礫、粗粒砂を少量含む。茶色。 口唇に弱い凹線が2条。 外面木理の粗い縦ハケ。 内面中位以下は下から上へのへら削り、上半は指ナデ。	外面激しく 煤ける。
〳 -17	〳 I層他	〳	— — —	— — —	石英、長石の砂粒を多く含む。にぶい褐色。 外面目の細い叩きを施した後、全面にハケ調整。 内面に黒斑、指頭圧痕が見られ、ナデ調整。	外面煤ける。
Fig. 13-18	〳	壺	— — —	— — 6.6	チャートの小礫、粗粒砂を少量含む。外面は淡黄色、内面は黒色。 外面は縦ハケ。内面は指ナデ。	

遺物観察表（土器）

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	特 徴	備 考
Fig. 13-19	ST3 I層他	鉢	16.0 — 5.2 — 4.2	— — — —	チャートの砂粒を少量含む。茶色。 外面左上がりのハケの後、左上がりのヘラ磨き。 内面木理の粗い原体による縦ハケの後、部分的にヘラ磨き。外面とは原体が異なる。口縁部は内・外面とも横ナデ。	外面煤ける。
〃 -20	〃	〃	13.6 — 9.3 — 3.4	— — — —	チャートの小礫、粗粒砂を少量含む。茶色。 口縁部が不規則に波打つ。外面叩きの後、ナデ消している。 内面左上がりを基調とするハケ。	
〃 -21	ST4 I層	〃	11.1 — — —	— — — —	チャートの粗粒砂を含む。外面にぶい黄橙色、内面浅黄橙色。 外面の口縁部は横ナデ、胴部もナデ。 内面も横ナデ。	
〃 -22	〃 I層	〃	29.5 — — —	— — — —	チャートの粗粒砂を含む。茶色。 口唇を幅広く面取る。外面ヘラ磨き。 内面横方向のハケの後、縦方向のヘラ磨き。	
Fig. 16-23	SD1	壺	— — — —	— — — —	石英、長石の粗粒砂を多く含む。黄白色。 外面頸部にヘラ描沈線を4条まで認める。内外面ともにナデ調整。	
〃 -24	〃	甕	— — — —	— — — —	チャートその他の粗粒砂を多く含む。外面は淡茶色、断・内面は黒灰色。 口縁外面に微隆起帯を貼付しており、2条認める。	
〃 -25	〃	〃	— — — —	— — — —	チャートその他の粗粒砂を多く含む。外面は淡茶色、断・内面は黒灰色。 上胴部に微隆起帯、3条認める。内、外面ともナデ。	外面煤ける。
〃 -26	〃	〃	15.6 — — —	— — — —	風化砂岩、石英粒を多く含む。外面は淡茶色、内面は黒灰色。 口縁外面に微隆起帯貼付。外面は横ナデ、内面も口縁付近に少し横ナデが見られる。	
〃 -27	SD1	壺	14.0 — — —	— — — —	チャート、砂岩、長石の粗粒砂を多く含む。暗灰色。 口縁外面貼付。	
〃 -28	〃 I層	甕	13.6 — — —	— — — —	チャートの粗粒砂を多く含む。淡茶色。 口縁端部をつまみ上げて、横方向に強いナデ調整。	
〃 -29	〃 I層	壺	15.4 — — —	— — — —	チャートの粗粒砂を多く含む。外面は橙色、内面はにぶい赤褐色。 外面の口縁部は大きく外反し、頸部下はハケ調整。 内面の頸部には、接続の跡がある。内・外面とも口縁部は横ナデ。	
〃 -30	〃 I層	甕	14.0 — — —	— — — —	チャートの粗粒砂を含む。茶色。 口唇は丁寧に面取り、僅かに下方に拡張。横ナデ調整。 外面の口縁部は横ナデ、胴部は縦方向のハケ調整。 内面の口縁部は右下がりのハケ、胴部は右から左へのヘラ削り。	
〃 -31	〃 埋土	〃	15.2 — — —	— — — —	チャート粗粒砂を含む。明茶色。 内・外面ともにナデ調整と思われる。口縁部は大きく外反する。	
〃 -32	〃	鉢	16.0 — — —	— — — —	チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。黄白色。 口縁は軽く面取る。外面は叩き成形で、内面は横ナデ調整。	
〃 -33	〃 I層	高坏脚	— — — — 17.0	— — — — —	チャートの粗粒砂を含む。茶色。 外面縦ヘラ磨き。円孔は径7mm。内面はハケ、裾部横ナデ。	裾部内・外面煤ける。
〃 -34	〃	甕	— — — — 6.0	— — — — —	チャートの粗粒砂を多く含む。外面は灰黄色、内面は灰白色。 外面底部付近に叩き、その上を縦方向のハケ。内面も僅かにハケが認められる。	
〃 -35	〃	〃	— — — — 3.5	— — — — —	チャート、砂岩の粗粒砂を多く含む。外面淡茶色、内面暗灰色。 調整不明。	内・外面煤ける。

遺物観察表（土器）

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	特 徴	備 考
Fig. 16-36	SD1 I層	壺	— — 5.6	— — — —	チャートの粗粒砂を多く含む。黄茶色。 外面縦方向のナデ。胴部下半から底部にかけて大きな黒斑あり。	外面煤ける。
〳 -37	〳	〳	— — 7.8	— — — —	石英、チャート、長石の粗粒砂を含む。茶黄色。 外面ヘラ磨き。	
〳 -38	〳 IV層	〳	— — 9.0	— — — —	チャートの粗粒砂、小礫を含む。にぶい橙色。 外面底部付近はハケの上をヘラ磨きで消し、胴部はハケ調整のみ。 内面指頭圧痕顕著、ヘラ磨きも見られる。	
〳 -39	〳	〳	— — — —	— — — —	石英、長石の粗粒砂を多く含む。シャーモットも見られる。黄茶色。 胴部最大径付近4条のヘラ沈線、外面横ヘラ磨き。 内面部分的に横ヘラ磨き。	
〳 -40	〳 II層	〳	— — — —	— — — —	石英、長石の粗粒砂を多く含む。外面浅黄橙色、内面にぶい黄橙色。 外面直立気味の頸部には、ヘラ沈線が5条ある。内・外面とも横方向のヘラ磨き。	
〳 -41	〳 I層	〳	— — 5.0	— — — —	長石、チャートの粗粒砂を含む。外面明赤褐色、内面暗灰黄色。 外面、調整不明。内面の底部付近にハケが少し見られる。	
〳 -42	〳	甕	— — 4.5	— — — —	チャートの粗粒砂を含む。茶黄色。 外面の調整観察不能。内面下から上への削り。	
Fig. 18-43	SD9	甕	— — 2.8 孔径 1.0	— — — —	チャートの粗粒砂を多く含む。外面はにぶい黄橙色、内面はにぶい橙色。 底部に焼成前の内から外へ向けての穿孔がある。 外面は左上がりの螺旋状の叩きがある。内面は縦方向のハケ調整が見られる。	
〳 -44	SD11 I層	甕	— — 4.6	— — — —	チャートの粗粒砂、小礫を含む。外面はにぶい橙色、内面はにぶい黄橙色。 外面底部にハケ調整。内面はくもの巣状のハケ調整と叩き成形。	
〳 -45	SD9	高坏	— — — — 裾径 8.2	— — — — — —	チャートの小礫を含む。黄白色。 柱状部の外面は縦ハケ調整である。裾部外面はハケ調整の後ナデが施され、 内面は横方向のハケ調整。器台の可能性あり。	
〳 -46	SD11 I層	壺	— — — —	— — — —	チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。黄茶色。平底。 外面は亀裂が多く入っている。内面はナデ、底部付近は指頭圧痕。	
〳 -47	〳 〳	甕	— — 5.0	— — — —	チャートの粗粒砂を多く含む。外面赤茶色、内面灰褐色。 外面叩き成形と思うがナデ消されている。	
〳 -48	〳 〳	支脚	— — 7.5	— — — —	チャート砂岩の小礫、粗粒砂を多く含む。黄茶色。 受け部がソ字状。体部下半中空でしほり目顕著。外面叩き成形。	
Fig. 20-49	P3	甕	14.2 26.1 — —	— — — —	チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。 外面は頸部から胴部にかけて叩き成形をし、胴部から底部にかけては左上 がりのハケ調整。内面は底部から胴部にかけて縦方向のハケ調整で、頸部 は左上がりのハケ調整。丸底。	
〳 -50	〳	鉢	10.2 6.2 — —	— — — —	チャートの小礫、粗粒砂を含む。外面にぶい黄橙色、内面灰黄色。 外面は叩きをナデ消しており、胴部外面に大きな黒斑がある。丸底。内面 左上がりのハケを全面に施している。底部付近に指頭圧痕がある。	内面煤ける。
〳 -51	P12	甕	13.8 — — —	— — — —	石英、チャートの粗粒砂を含む。浅黄橙色。 口縁部内・外面と口唇は横ナデ。外面の胴部は縦方向のハケと縦磨き。内 面は左上がりの削りとナデ。	
〳 -52	〳	〳	— — 4.6	— — — —	チャートの小礫を多く含む。外面橙色、内面黒褐色。 外面の全面に左上がりの粗いハケが何度も繰り返し強く施され、砂粒が下 から上に動いている。内面も左上がりのハケ調整とナデ。	内面煤ける。

遺物観察表（土器）

挿図番号	出土地点	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	特 徴	備 考
Fig. 20-53	P5	高坏	— — — —	チャートの小礫を含む。橙色。 外面は横ナデで、内面は縦方向の指ナデ。高坏の脚部。	
〃 -54	包含層	甕	— — — 5.4	石灰、石英、チャートなどの小礫を多く含む。外面淡黄色、内面灰黄色。 外面縦方向や少し左上がりのハケ調整を全面的に施している。内面底部付近に指頭圧痕。平底で底部から胴部にかけて黒斑がある。	
Fig. 22-55	SK5	皿	— — — 高台径9.0	白色堅緻の胎土。白濁色の釉を畳付以外は全面に施釉。内面は薄藍色の呉須による文様。高台内側は垂直に深く削られている。	染付
〃 -56	〃	碗	10.2 — — —	白色堅緻の胎土。白濁色の釉を施釉。外面は明藍色の呉須による大小連結円文を描く。貫入あり。	
Fig. 24-57	SK11	皿	15.4 — — —	淡灰褐色粗緻な胎土。灰オリブ釉を施釉。貫入あり。 外面にロクロ目が見られる。	唐津 皿
〃 -58	SK13	〃	13.0 — — —	灰白色のやや粗い胎土。やや濁味を帯びた釉がうすくかかる。口縁端部つまみ上げ。外面ロクロ目顕著。	溝縁皿
〃 -59	SK14	〃	— — — 4.6	精選された胎土で僅かに長石粒を含む。淡茶色。 外面底部は糸切り。内面はロクロ目顕著。	土師小皿
〃 -60	SK12	碗	12.4 — — —	白灰色で精緻な胎土。やや白濁気味の釉がうすくかかる。	
〃 -61	SK14	〃	8.4 — — —	白色堅緻な胎土。白濁色の釉を施釉。 外面2条の圏線と下に文様の一部あり。内面1条の圏線あり。共に呉須はあせた藍色。	伊万里
〃 -62	SK15	碗	11.6 — — —	うすい黄白色のやや粗い胎土。内・外面共透明度の高い釉を施釉。うす手のつくり。	京焼風陶器
〃 -63	SK11	碗	— — — 高台径5.3	淡灰色堅緻な胎土。外面黄白色、内面灰白色の釉を畳付以外、全面に施釉。 内・外面共に貫入あり。外面にくすんだ藍色の呉須による文様の一部が見られる。	染付碗（伊万里）
〃 -64	〃	碗	— — — 高台径5.6	淡褐色でやや粗い胎土。透明度のある銜色の釉。細い貫入あり。畳付のみ露胎。貼付高台でやや八の字状に張り出す。畳付は丸味を帯びる。	京焼風陶器
〃 -65	SK14	皿	10.4 — — —	砂粒をほとんど含まない。淡茶色。 内外面共に横ナデ顕著。	土師小皿
〃 -66	SK13	〃	13.5 — — — 高台径4.7	黄白色でやや粗い胎土。外面緑灰色透明釉を胴部から上施釉。 内面は蛇ノ目状釉ハギ、胎土目。緑灰色透明釉に貫入あり。削り出し高台で逆台形状を呈す。	唐津系皿
〃 -67	SK14	〃	— — — 高台径6.3	黄白色でやや粗い胎土。外面白色透明の釉が一部高台外面までかかる。高台は太く断面は逆台形。内面は白色の化粧がけの上に青緑色の釉をやや厚くかける。見込は蛇ノ目状釉ハギで胴部の四方に沈線状文様が見られる。	〃
Fig. 36-68	SK39	〃	9.2 — — —	砂粒をほとんど含まない。淡黄白色。 内・外面共に横ナデ顕著。	土師小皿

遺物観察表（土器）

挿図番号	出土地点	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	特 徴	備 考
Fig. 36-69	SK27	皿	8.2 — — —	砂粒をほとんど含まない。黄茶色。 内・外面共に横ナデ顕著。	土師小皿
〃 -70	SK23	〃	12.4 — — —	灰白色のやや粗い胎土。白濁色の釉を施釉。 口縁部つまみ上げ。外面ロクロ目顕著。	唐津溝縁皿
〃 -71	SK33	〃	14.2 — — —	淡灰白色堅緻な胎土。黄緑色の釉をかけてあり、内・外面貫入あり。 口縁端部内面を削り、溝縁状を呈す。	青磁
〃 -72	SK22	〃	7.8 — — —	乳白色のやや粗い胎土。内・外面緑灰色透明釉を施釉の後、内・外面の口 縁部は緑灰色の釉を施釉。	陶器
〃 -73	〃	椀	11.8 — — —	乳白色のやや粗い胎土。鉛色の釉を施釉。貫入あり。	京焼風陶器
〃 -74	SK23	〃	12.0 — — —	乳白色のやや粗い胎土。鉛色の釉を施釉。貫入あり。	〃
〃 -75	SK26	碗	9.9 5.6 — — 高台径5.1	灰白色堅緻な胎土。白濁色の釉を施釉。 外面の口縁部に2条、下胴部に1条、高台脇に2条の圏線があり、呉須は あせた藍色。高台は細く直立。見込みは水平で広い。口縁部は僅かに直立 する。	染付碗
〃 -76	SK34	椀	— — — — 高台径4.0	乳白色のやや粗い胎土。外面は緑灰色の釉が部分的に濃く見える。畳付と 外底は露胎。削り出し高台の削りは不十分。高台は僅かに八の字状に開く。 内面深緑の釉を施釉し、見込みは蛇ノ目状釉ハギ。	唐津系椀
〃 -77	SE1	〃	— — — — 高台径4.4	乳白色のやや粗い胎土。白濁色の釉が体部内・外面と高台外面の一部にか かる。貫入あり。見込みは蛇ノ目状釉ハギで、祟が付着。削り出し高台。	
〃 -78	SE1	碗	9.6 — — —	灰白色堅緻な胎土。透明の釉を施釉。 呉須はうすい青灰色で一部の文様が見える。	染付碗 (伊万里)
〃 -79	SK34	椀	— — — — 高台径5.9	薄灰褐色やや粗い胎土。外面灰褐色、内面黄緑色の釉を施釉。貫入あり。 外面の底部と端付部分は露胎。高台脇が削りにより稜をなす。内面の見込 みは蛇ノ目状釉ハギで、削りが強いため体部にくい込み凹状をなす。	肥前陶器
〃 -80	SE1	壺	— — — — 高台径7.5	灰白色堅緻な胎土。内面と畳付以外は全面透明の釉を施釉。 高台外面は薄い藍色の呉須による圏線あり。内面露胎部は褐色に発色。	伊万里
〃 -81	〃	椀	— — — — 高台径5.1	淡茶色のやや粗い胎土。畳付部分は分からないが、他は全面鉛色の釉を施 釉。内・外面共に貫入あり。高台内を深く削っている兜巾高台。	京焼風陶器
〃 -82	SK21	皿	— — — — 高台径7.0	灰白色堅緻な胎土。畳付以外は全面白濁色の釉を施釉。 一部に胎土目痕あり。高台外面は薄藍色、見込みの外縁はくすんだ藍色の 2条の圏線あり。見込みには他にも文様あり。	染付皿?
〃 -83	〃	鉢	— — — — 高台径8.4	暗灰褐色堅緻な胎土。外面と高台のみ暗褐色の釉を施釉。 削り出し高台で太くしっかりしており、畳付は幅広い面をなす。内面は中 心部に同心円文、その外側に波状文を描く。	三島手唐津 鉢

遺物観察表（土器）

挿図番号	出土地点	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	特 徴	備 考
Fig. 38-84	SD13	坏	— — — 5.5	チャートの砂粒を少量含む。浅黄橙色。 内・外面共にロクロ痕が顕著。外底は糸切り。	
〃 -85	SD3	碗	— — —	灰色堅緻な胎土。透明度の高い釉を施釉。 見込み及び内面には丸ノミによる文様の一部が見られる。見込み外縁に片切り彫りによる圏線。	青磁碗
〃 -86	〃	坏	— — — 7.0	チャートの砂粒を少量含む。外面灰黄色、内面浅黄橙色。 内・外面共にロクロ痕が顕著。外底は糸切り。	
〃 -87	SD28	〃	— — — 7.0	チャートの砂粒を含む。外面にふい橙色、内面にふい黄橙色。 内・外面共にロクロ痕が顕著。外底は糸切り。	
Fig. 39-88	SD17	鉢	— — — 6.2	チャートの粗粒砂を含む。黄茶色。 外面底部脇に指頭圧痕顕著。	
〃 -89	SD12	甕	— — — 3.0	チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。淡茶色。底部付近黒斑。 外面叩き成形の後、縦方向のハケ調整。	
〃 -90	SD38	〃	— — — 3.2	チャート、長石などの粗粒砂を含む。外面灰黄褐色、内面褐灰色。 外面の底部から胴部にかけてハケ調整。内面は縦方向のナデと底部には指頭圧痕顕著。	
〃 -91	SD28	高坏	— — —	チャート、その他の砂粒を含む。浅黄橙色。 坏部は接合部で剥離。内面にしぼり目あり。	
〃 -92	SD38	甕	— — — 4.4	チャート、その他の砂粒を含む。外面黄灰色、内面灰黄色。 外面底部から胴部にかけてハケ調整。内面下から上のヘラ削り、指頭圧痕。	内・外面煤ける。
〃 -93	〃	壺	— — — 5.4	チャートの粗粒砂を含む。外面黄茶色、内面暗灰色。 外面縦ヘラ磨き、稜圧痕あり。内面ナデ、指頭圧痕あり。	
〃 -94	〃	甕	— — —	チャート、砂岩の粗粒砂を含む。茶色。 口径部内外面共に強い横ナデ。外面口縁部擬凹線3条あり、その下は強い横ナデ、頸部は左上がりのハケ調整でその下は縦ヘラ磨き。	外面煤ける。
Fig. 40-95	P-19	皿	10.6 — —	乳白色のやや粗い胎土。外面白色、内面緑色を基調とする釉を施釉。	
〃 -96	P-17	椀	10.5 — —	乳白色精緻な胎土。透明度のある銜色の釉を施釉。	京焼風陶器
〃 -97	P-20	〃	8.8 — —	乳白色のやや粗い胎土。銜色の釉を施釉。貫入あり。	〃
〃 -98	P-14	〃	12.0 — —	乳白色のやや粗い胎土。銜色の釉を施釉。貫入あり。	〃

溝観察表

No.	確認延長(m)	幅(cm)	深さ(cm)	断面形	遺物・その他 所見	時期
SD 1	30.0	1.8~2.4 (北端) (南端)	120.0	逆台形	I層より多量の弥生土器(後期末)、II・III層より弥生土器(前期末)出土。北部は近世墓に切られる。	弥生時代前期末
ク 2	5.6	40.0	4.8~10.8	舟底形	南端は調査区外。遺物なし。	不明
ク 3	80.8 N-S28.8 W-E52.0	60~80	5~27.2	ク	調査区の西半分を逆し字状に囲む。弥生土器(後期)細片多量、土師小皿片2点、青磁碗片1点、近世陶器片2点出土。SD 5やいくつかの溝を切っているが、SD 13、16、17、21、28には切られる。	中世15世紀
ク 4	12.0	20~60	7~15	U字形	南端はSD 3と重なる。切り合い関係は明らかではない。弥生土器(後期)細片出土。	不明
ク 5	12.6	50	7.1~12	ク	SD 3に切られる。外縁直径4.4mで円を描く。弥生土器(後期)細片、瓦器細片出土。	ク
ク 6	34.0	50~60	9.5~14.6	逆台形	区画溝。遺物なし。	近代
ク 7	3.3	36	2.9~11.7	舟底形	西南端に位置する。弥生土器(後期)細片出土。	
ク 8	4.8	16~40	2.2~5.5	ク	浅い溝。遺物なし。	
ク 9	11.4	30~56	6~13	逆台形	西より8~12mの間に弥生後期土器が集中して出土。甕の底部や器台か高坏の脚部など出土。	弥生時代後期
ク 10	14.4	30~100	2~6	ク	弥生土器(後期)細片出土。	ク
ク 11	32.4	60~70	10.6~21.7	ク	中央部はSD 3に切られ、東側はSD 16、17、21に切られる。弥生土器(後期)片出土。	ク
ク 12	25.6	70~100	5~8	舟底形	SD 9、10、18を切る。SD 11に切られる。弥生土器(後期)細片多量、須恵器細片出土。	中世以前
ク 13	32.3	90~100	12~25	ク	SD 3、6、11、18、42、43を切る。南端は調査区外。弥生土器(後期)細片多量、土師器片、須恵器片、天目茶碗片出土。完形土師小皿出土。	15世紀
ク 14	9.6	80~160	2~7.8	逆台形	SD 11、18、20を切る。南端は調査区外。弥生土器(後期)細片出土。	中世
ク 15	7.6	80~120	5.7~7.9	ク	SD 11、18、20を切る。南端は調査区外。15世紀の土師皿片、弥生土器片出土。	ク
ク 16	31.2	50~60	4~17.8	ク	SD 3、11、20、42を切る。SD 6に切られる。南端は調査区外。弥生土器(後期)細片多量、近世陶器片、吉備系土器片出土。	近世
ク 17	27.8	60~90	14.7~20.6	舟底形	SD 6、12、13、14、15に切られる。弥生土器(後期)細片多量出土。	ク
ク 18	20.1	24~50	5~10.2	U字形	SD 6、12、13、14、15、19に切られる。弥生土器(後期)細片出土。	弥生時代
ク 19	2.7	20~50	4.5~7.9	ク	南端は調査区外。弥生土器(後期)細片少量出土。	ク
ク 20	16	40~60	3.2~13.6	ク	SD 13、14、15、16、17、21に切られる。弥生土器(後期)細片出土。	不明
ク 21	31.4	80	9.8~22.7	舟底形	SD 3を切っている。弥生土器(後期末)細片出土。	近世
ク 22	2.4	40	2.9~7.4	ク	両端をSD 16とSD 17に切られる。弥生土器(後期末)細片少量出土。	不明
ク 23	3.2	30~60	2.6~6.8	逆台形	弥生土器(後期末)細片出土。	ク
ク 24	4	40~70	2.4~10	ク	ク	ク
ク 25	1.6	30	2.5~4.9	U字形	ク	ク
ク 26	3.1	20~40	1~15.4	舟底形	ク	ク
ク 27	3.8	30~40	1.5~4.0	ク	ク	ク
ク 28	29.4	50~80	18.7~32.6	U字形	弥生土器(後期末)細片多量、土師片出土。	近世
ク 29	7.8	50~70	14.5~16.2	逆台形	なし	不明
ク 30	8.3	30~60	1.3~9.6	ク	弥生土器(後期)細片出土。	ク
ク 31	5.6	30~60	3~4.9	舟底形	ク	ク
ク 32	5.36	50	4.5~6.0	ク	ク	ク
ク 33	8.96	30~60	3~8	ク	ク	ク
ク 34	6.4	40~80	16.5~18.5	U字形	SD 42と切り合う。弥生土器(後期末)細片多量に出土。	ク
ク 35	4	30~40	2~4	逆台形	なし	ク
ク 36	3.2	40~70	4~9.3	ク	ク	ク
ク 37	2.8	20~40	2~8.4	舟底形	弥生土器(後期)細片出土。	ク

溝観察表

No.	確認延長(m)	幅 (cm)	深さ (cm)	断面形	遺物・その他 所見	時期
SD 38	6.8	100	2～5.5	逆台形	弥生土器（中期）少量，（後期）多量，近世陶器少量出土。	近世
♪ 39	7.6	80～136	1.5～5	♪	♪（後期）細片出土	不明
♪ 40	5.6	100～150	2.4～8	♪	弥生土器（後期）細片出土。	♪
♪ 41	5.6	100～150	4.5～10.5	舟底形	♪	♪
♪ 42	40	40～45	4～16	♪	SD 34と切り合う。 弥生土器（後期）細片多量に出土。	弥生（後期）
♪ 43	9.3	20～30	2.7～5	♪	SD 13に切られる。	不明
♪ 44	11.2	80～100	3.8～17	逆台形	SD 21に切られる。 弥生土器（後期）細片出土。	中世
♪ 45	7	40～60	6.3～8.6	♪	弥生土器（後期）細片多量に出土。	不明
♪ 46	5.6	30～60	4.5～11.5	♪	弥生土器（後期）細片出土。	♪
♪ 47	5.6	30～40	6.7～11.5	♪	弥生土器（後期）細片多量に出土。	♪
♪ 48	9.9	40～70	6.4～8.7	♪	弥生土器（後期）細片出土。	♪
♪ 49	4.3	30～40	2.5～9.5	♪	♪	♪
♪ 50	12.1	30～50	4～10.4	♪	♪	♪
♪ 51	6.0	40	1.5～7	♪	♪	♪
♪ 52	6.0	20～30	4.2～7.3	U字形	♪	♪
♪ 53	5.0	30～50	19.5	♪	弥生土器（後期）細片少量出土。	♪
♪ 54	7.2	40	1～4.5	♪	弥生土器（後期末）細片少量出土。	♪

写 真 图 版



I区調査前全景（東から）



同上（西から）

PL 2



I区南北セクション西壁



同上



I区調査区北壁セクション



ST 1 検出状況

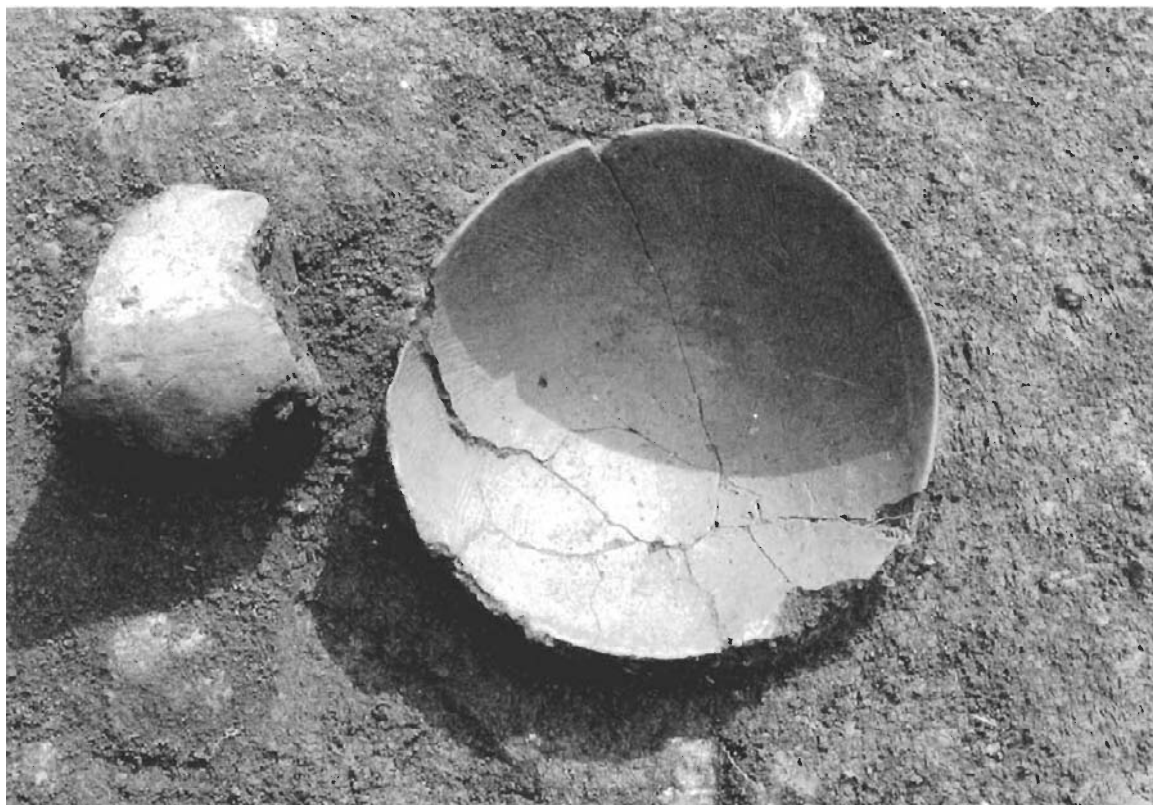
PL 4



ST 1 遺物出土状況



同上

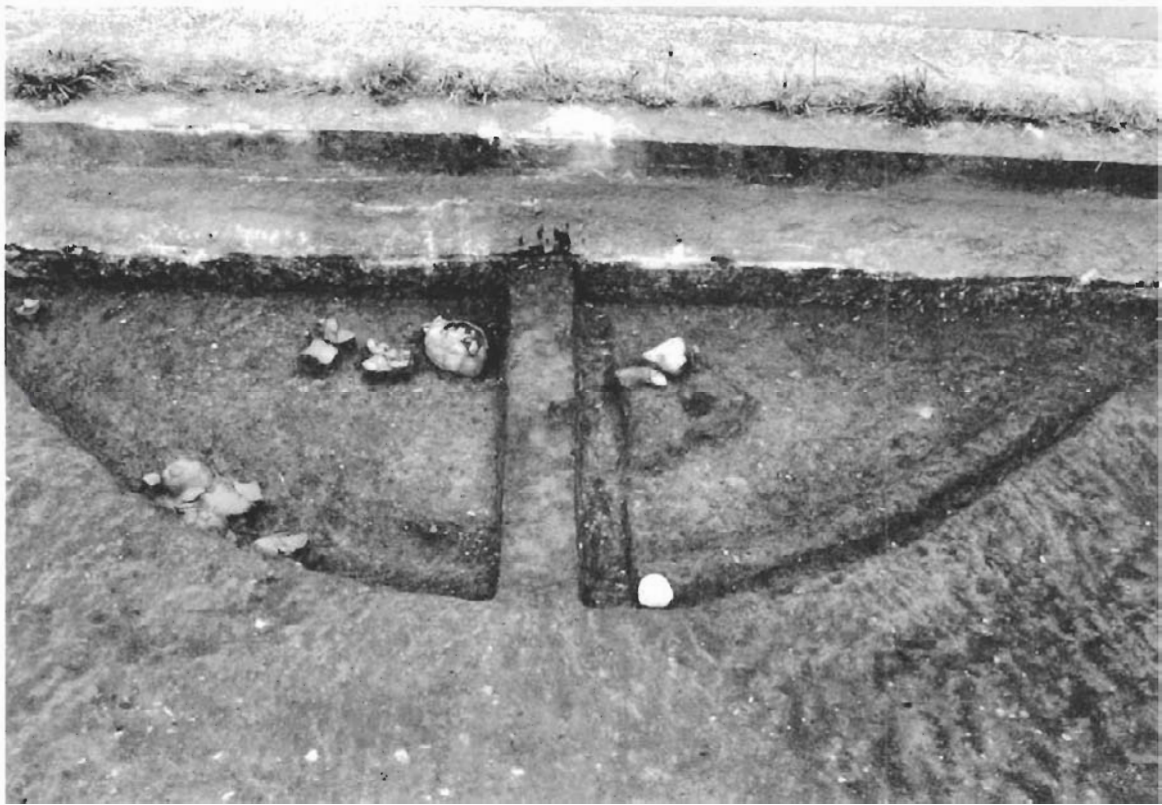


ST 1 遺物出土状況 (10)



ST 3 完掘状況

PL 6



ST 3 遺物出土状況



同上 (12, 14)



ST 3 遺物出土状況（壁際の土器）

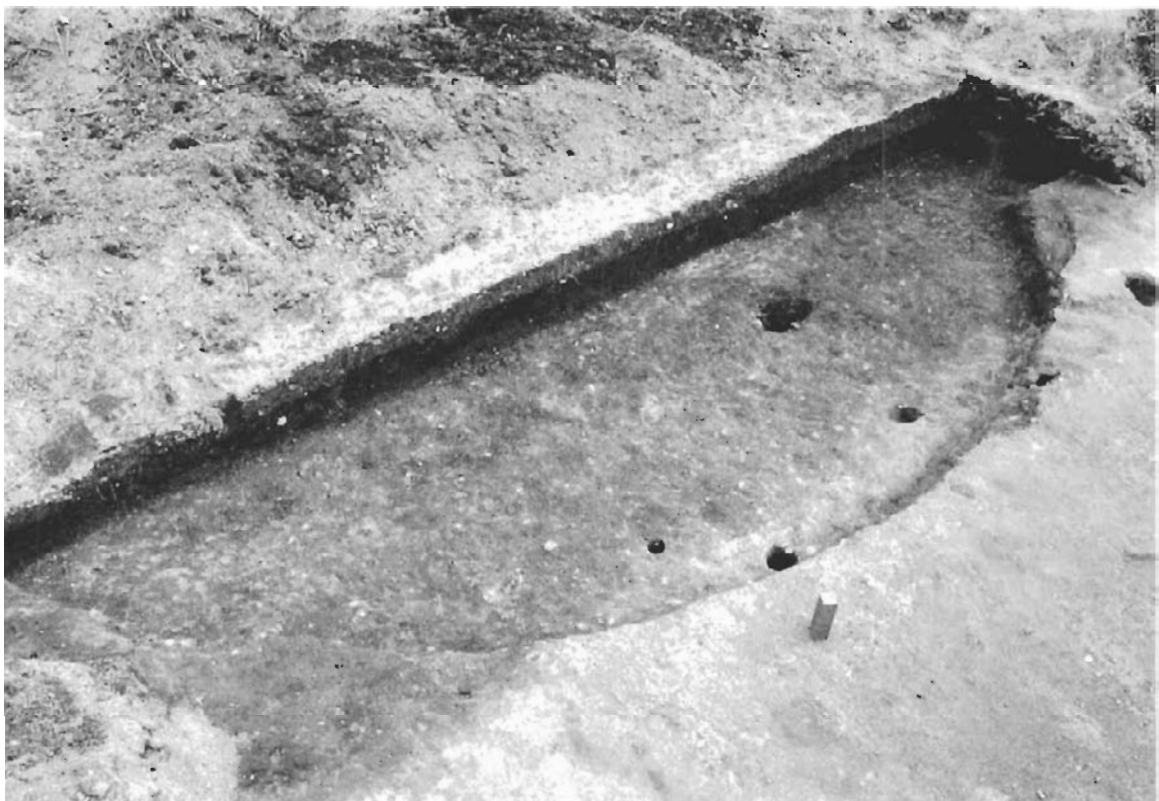


同上セクション

PL 8



ST 3 壁溝セクション



ST 4 完掘状況

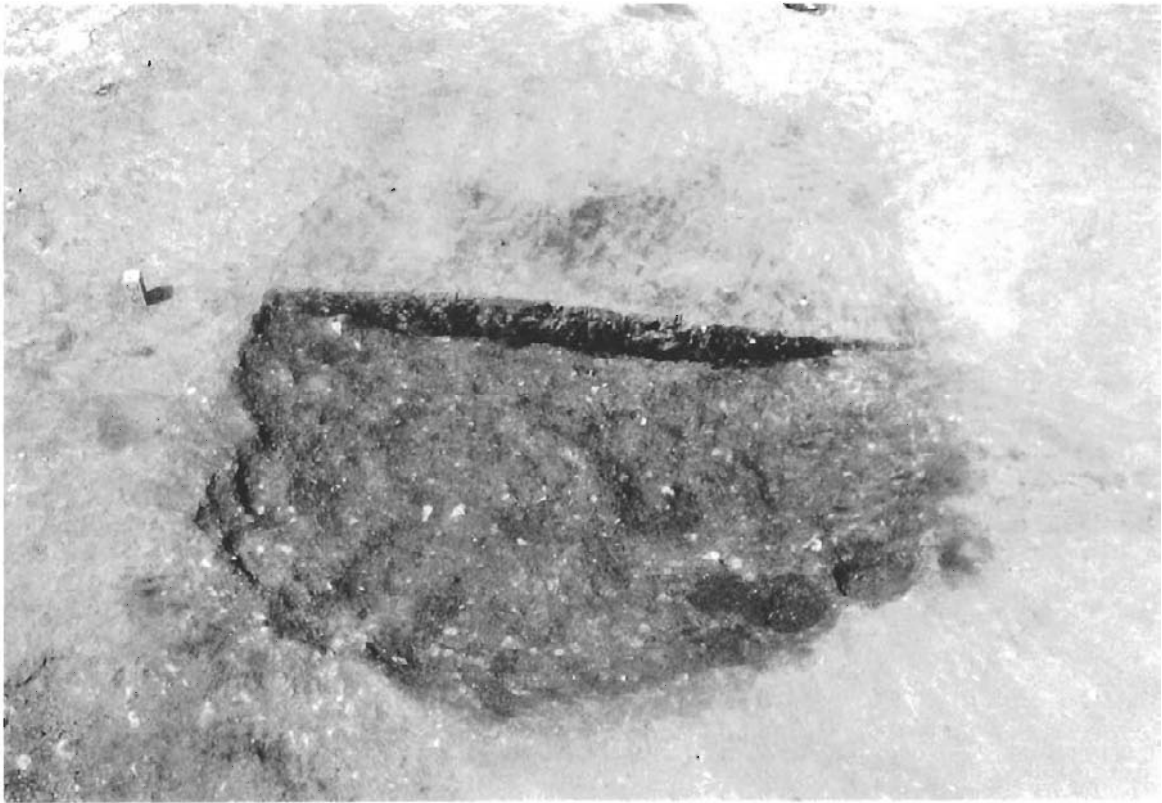


SK 4 完掘状況



SK 6 半截状況

PL 10



SK 7 半截狀況



SK 8

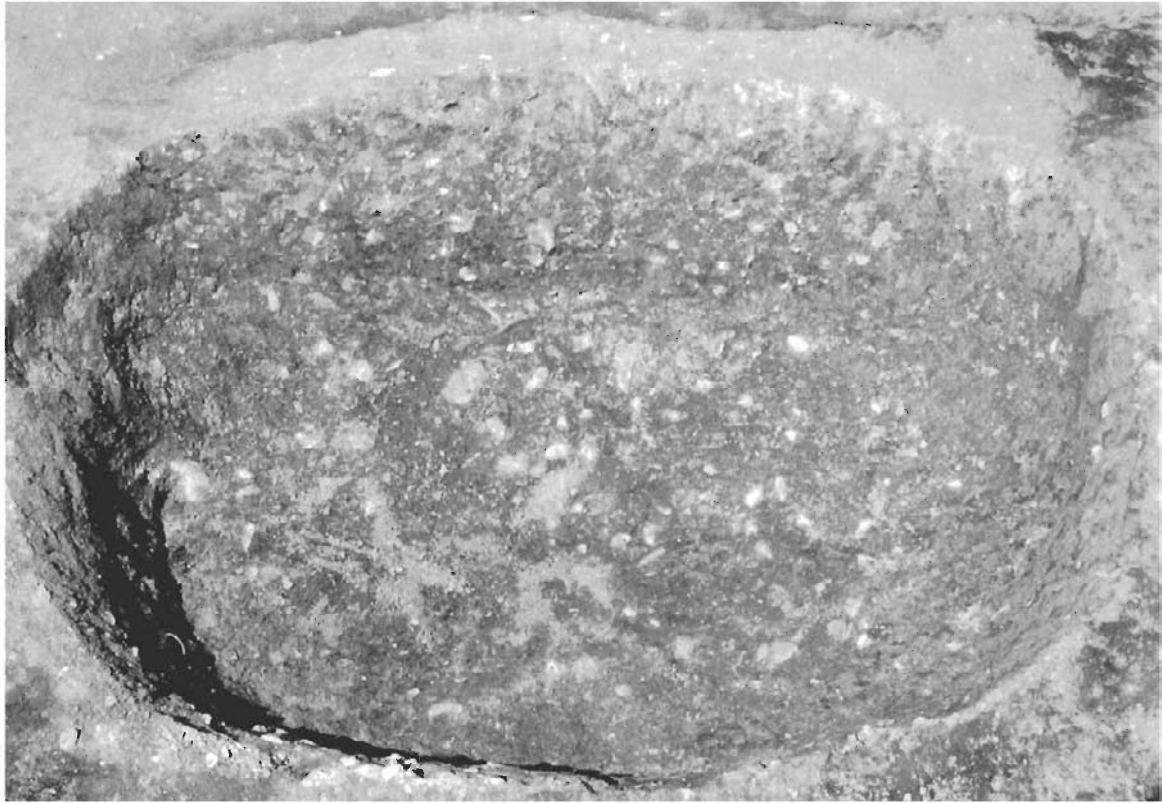


SK 9 完掘状況

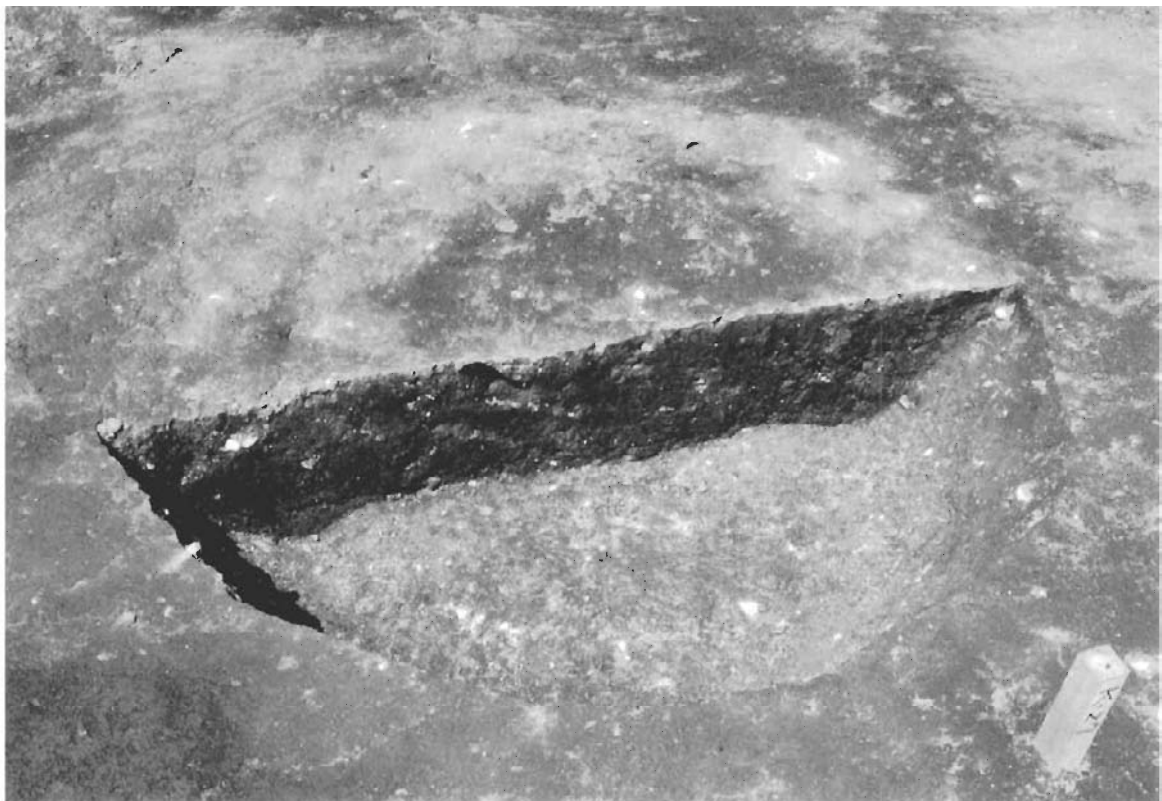


SK 10半截状況

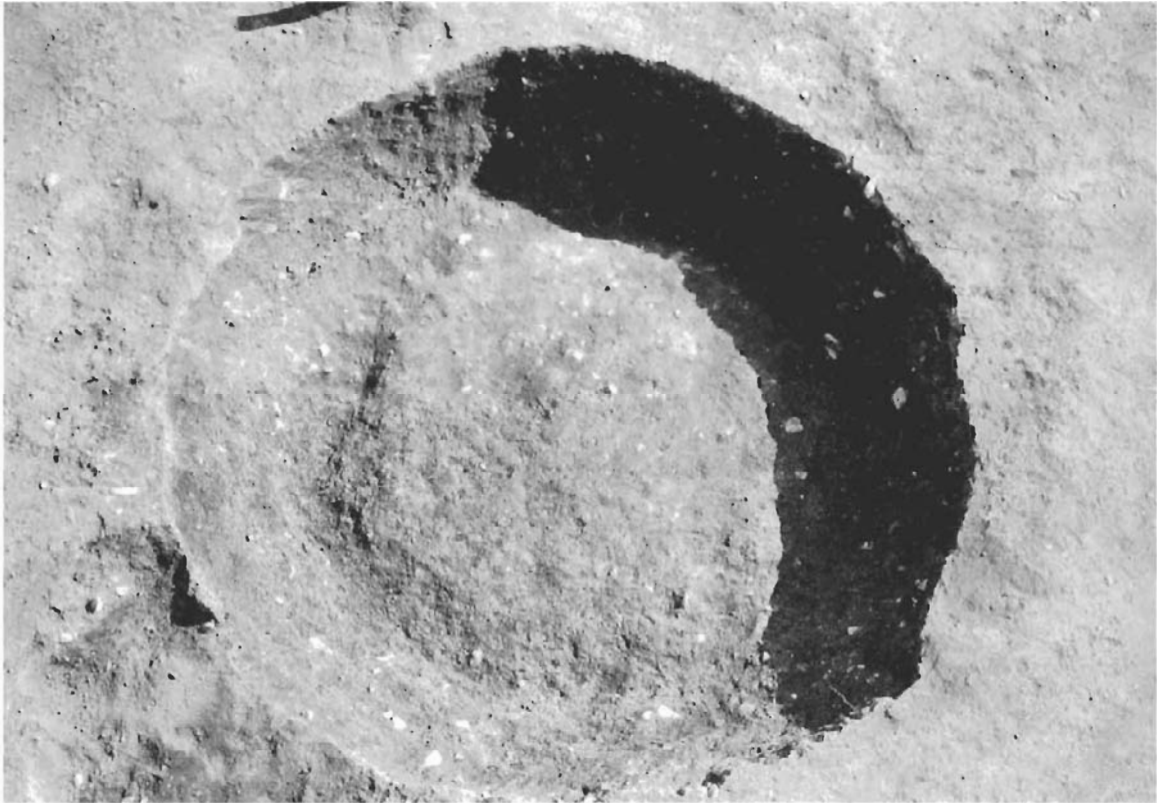
PL 12



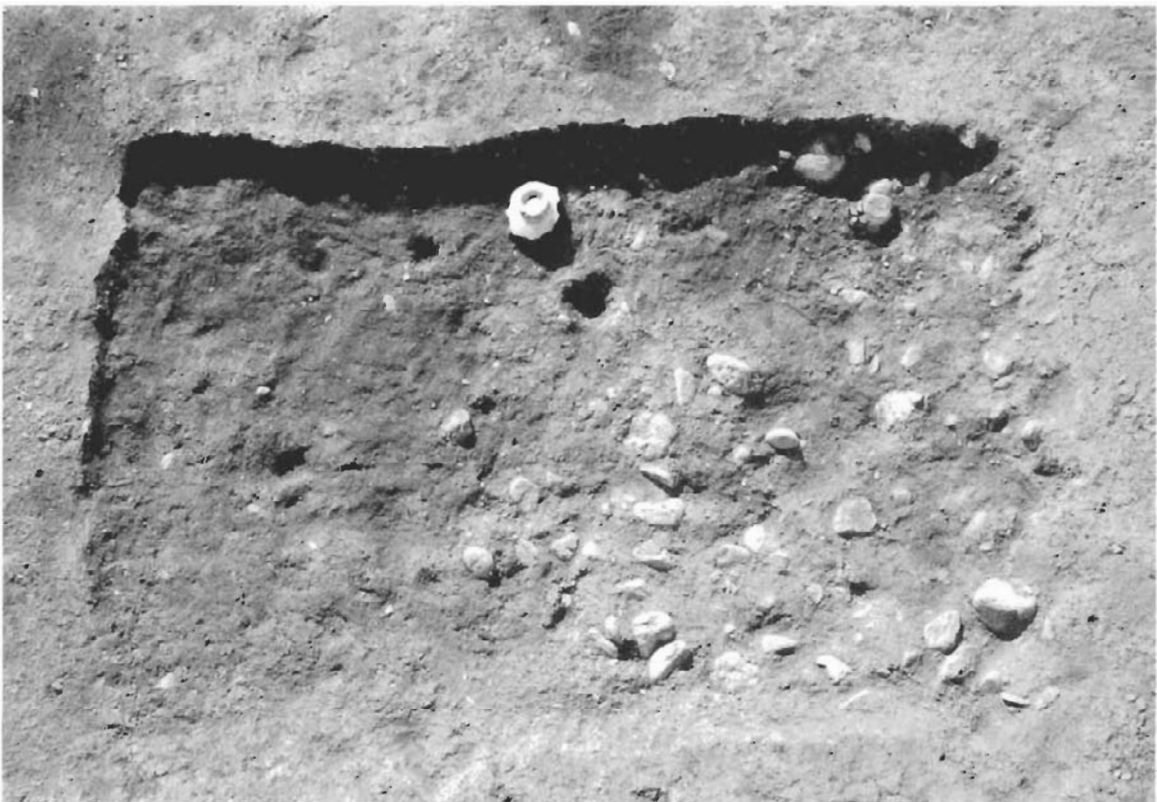
SK 10完掘状況



SK 13半截状況

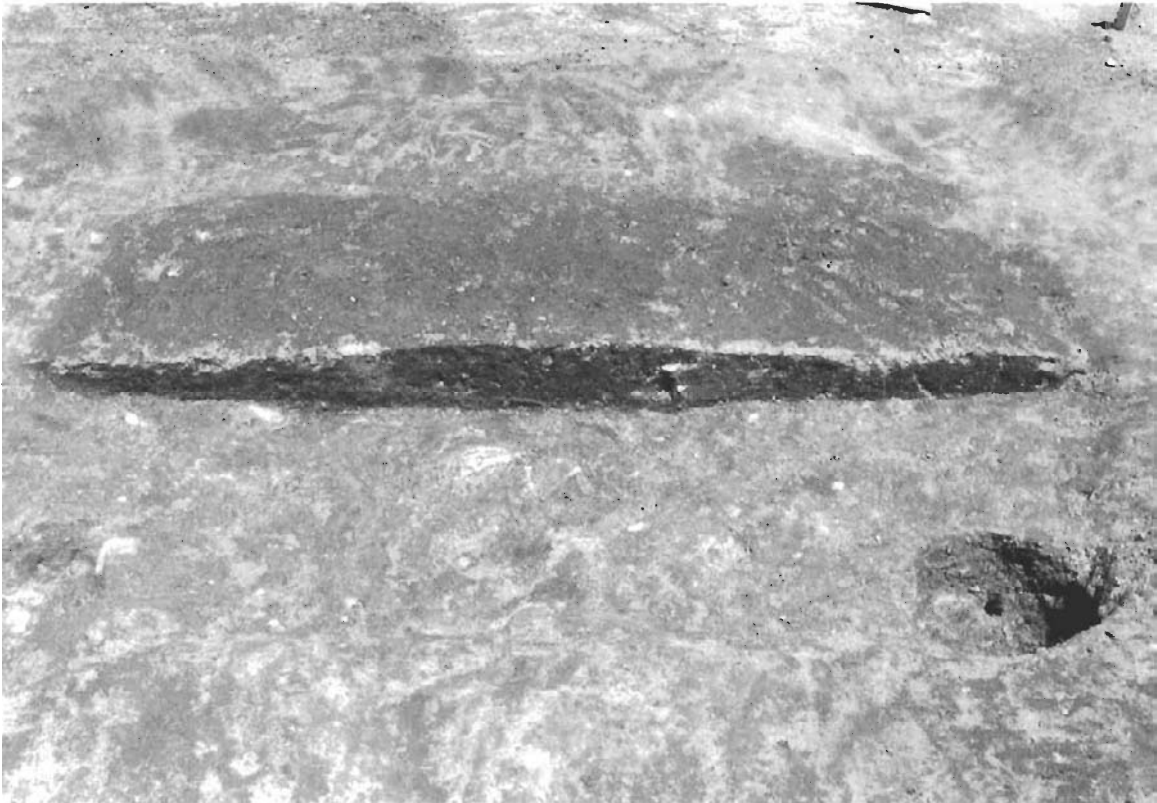


SK 13完掘状況



SK 14遺物出土状況

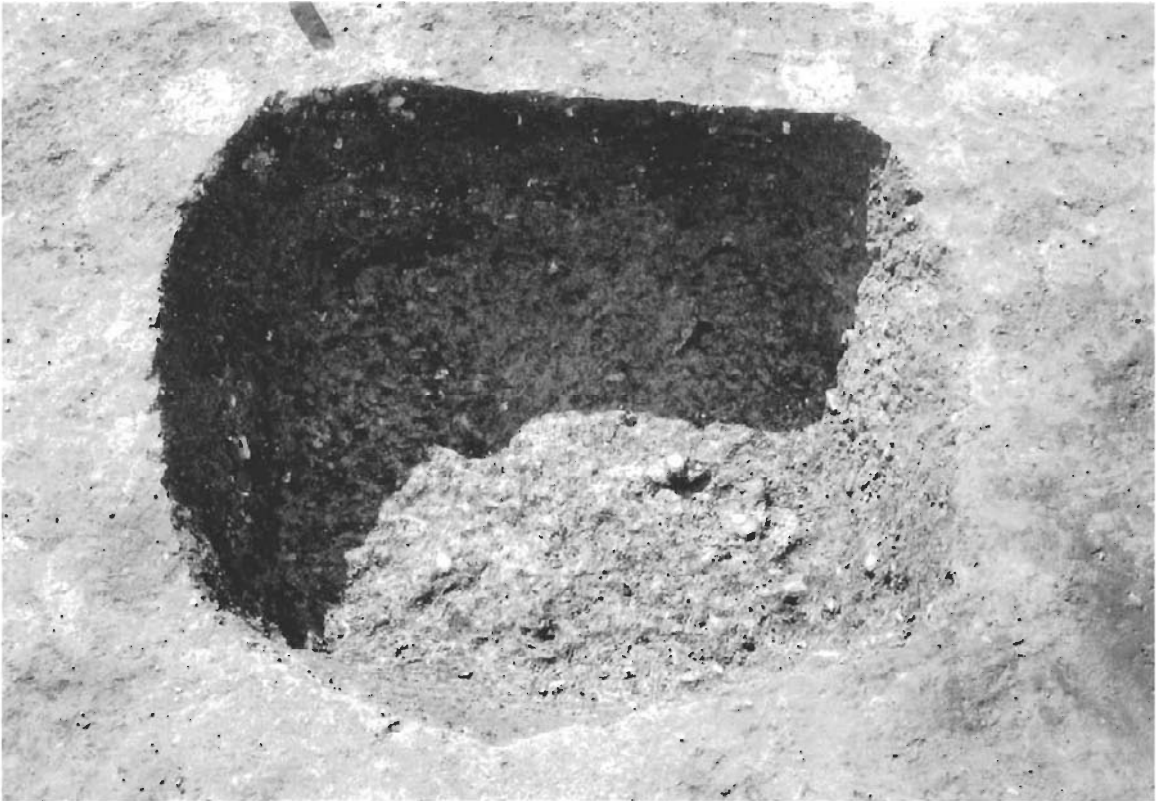
PL 14



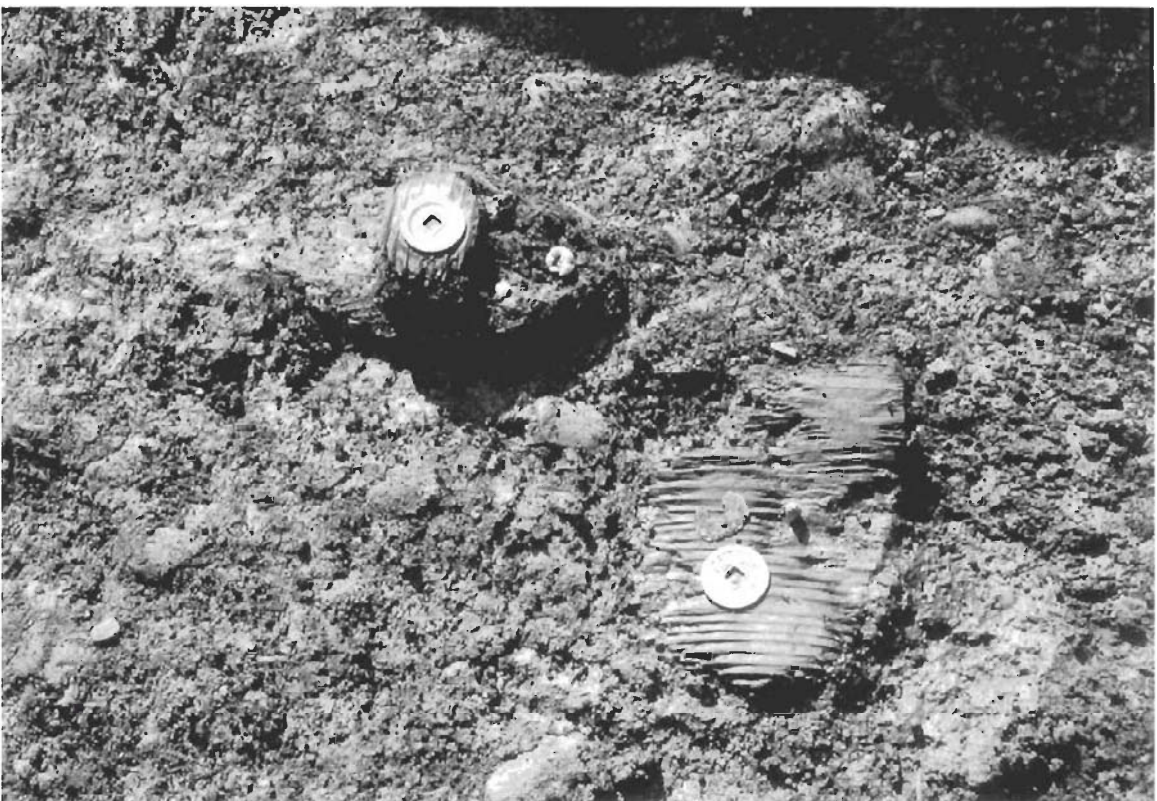
SK 15半截狀況



SK 16完掘狀況



SK 17遺物出土状況

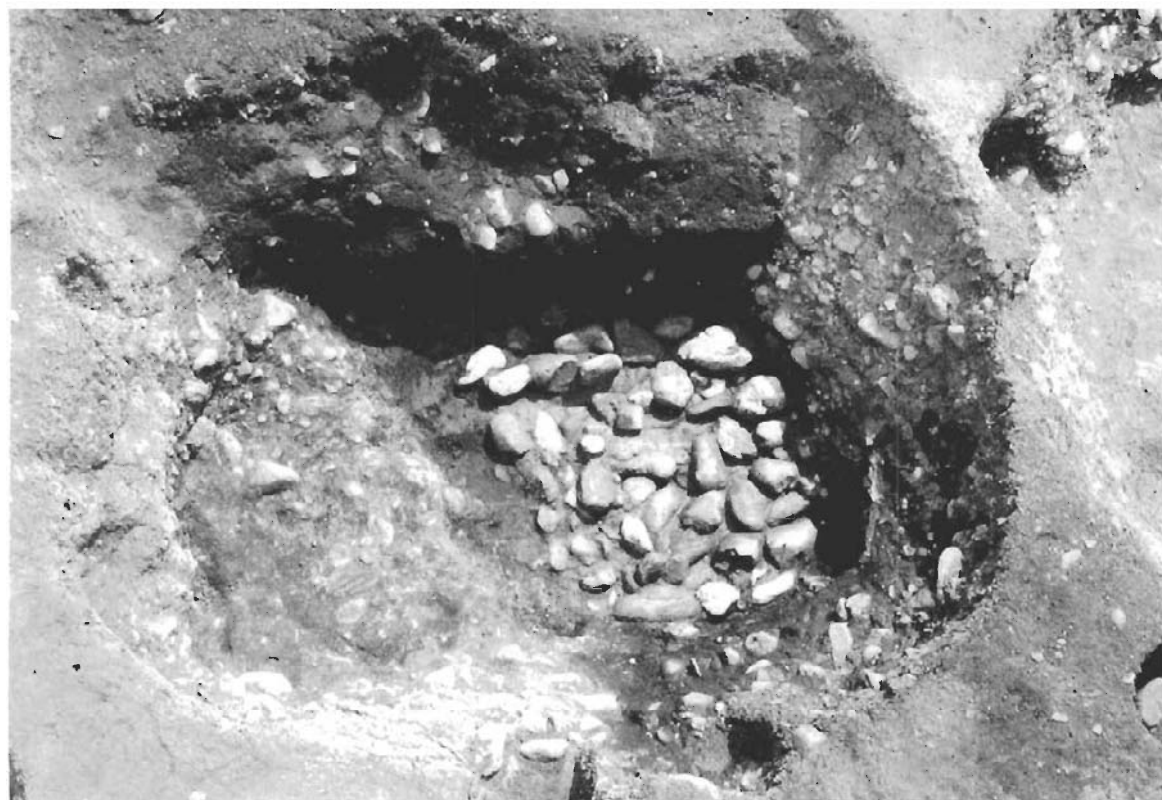


同上（古銭，臼齒出土状況）

PL 16



SK 18集石出土状況



SK 24集石出土状況

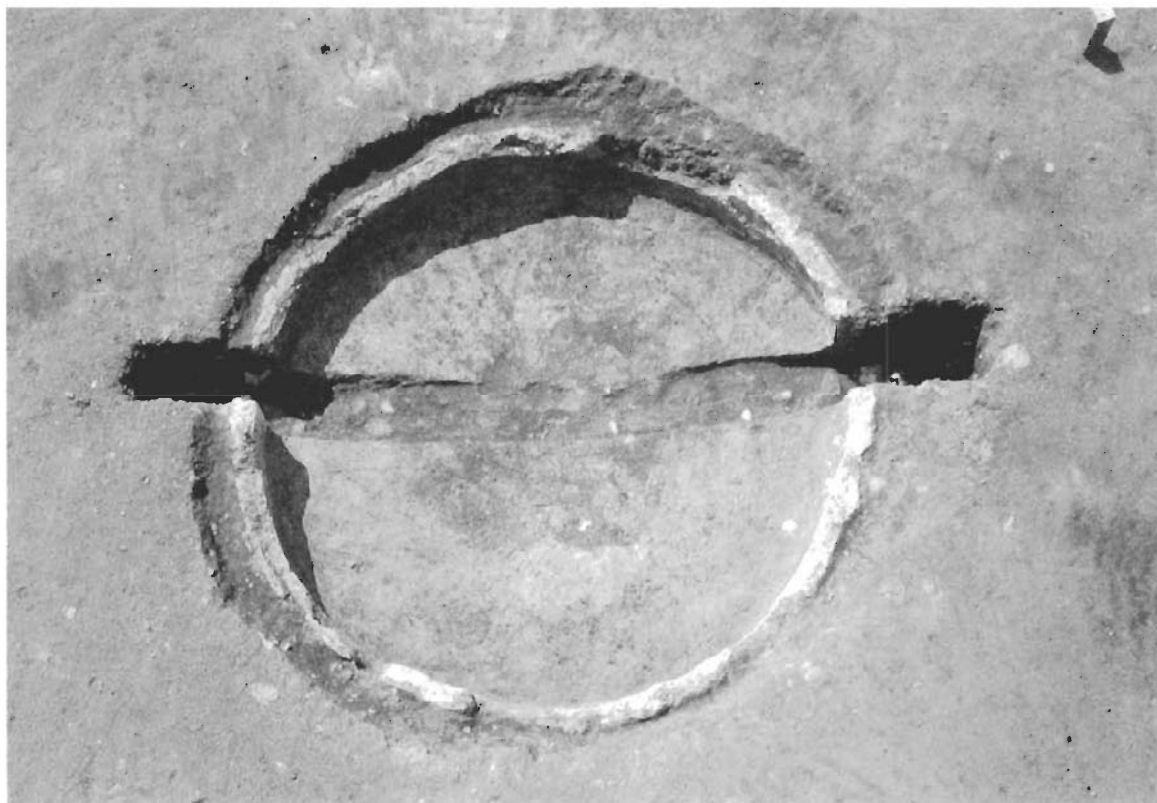


SK 24粘土張床断面



SK 24完掘状況

PL 18



SK 35完掘状況



SK 37完掘状況



SE 1 底の礫出土状況



SE 1 完掘状況



P 3 遺物出土状況 (49, 50)



同上拡大

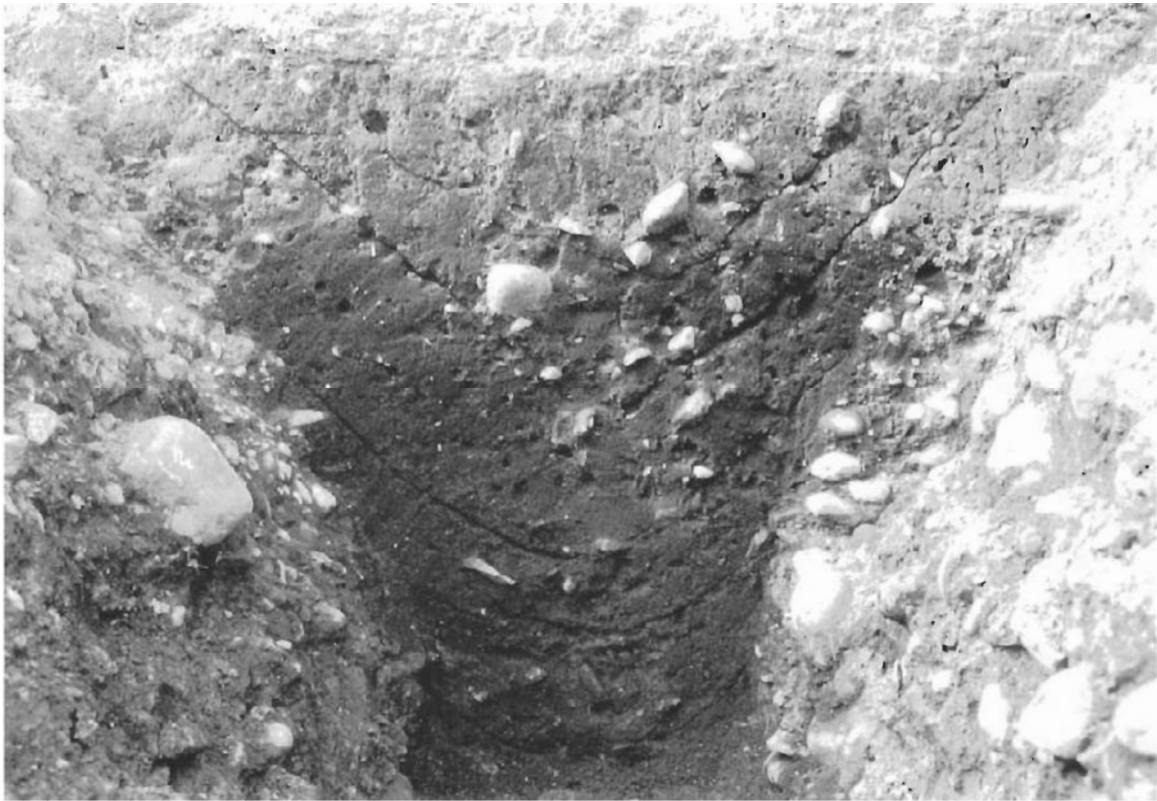


SD 1 南半分完掘状況



SD 1 中央バンク北壁

PL 22



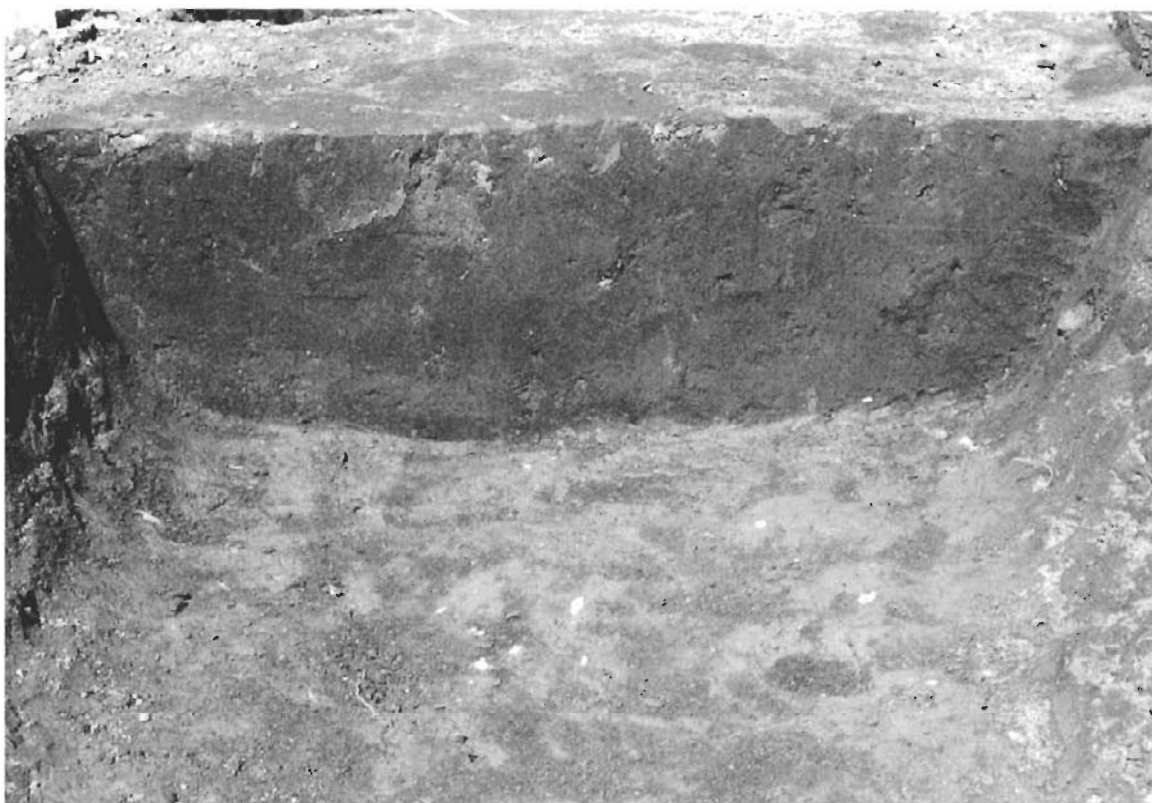
SD 1 北壁セクション



SD 1 稜線部分



SD 1 西壁立ち上がり



SD 3 セクション

PL 24



SD 3 セクション



SD 3・5 完掘状況



SD 11遺物出土状況



SD 13セクション

PL 26



SD 13遺物出土状況 (84)



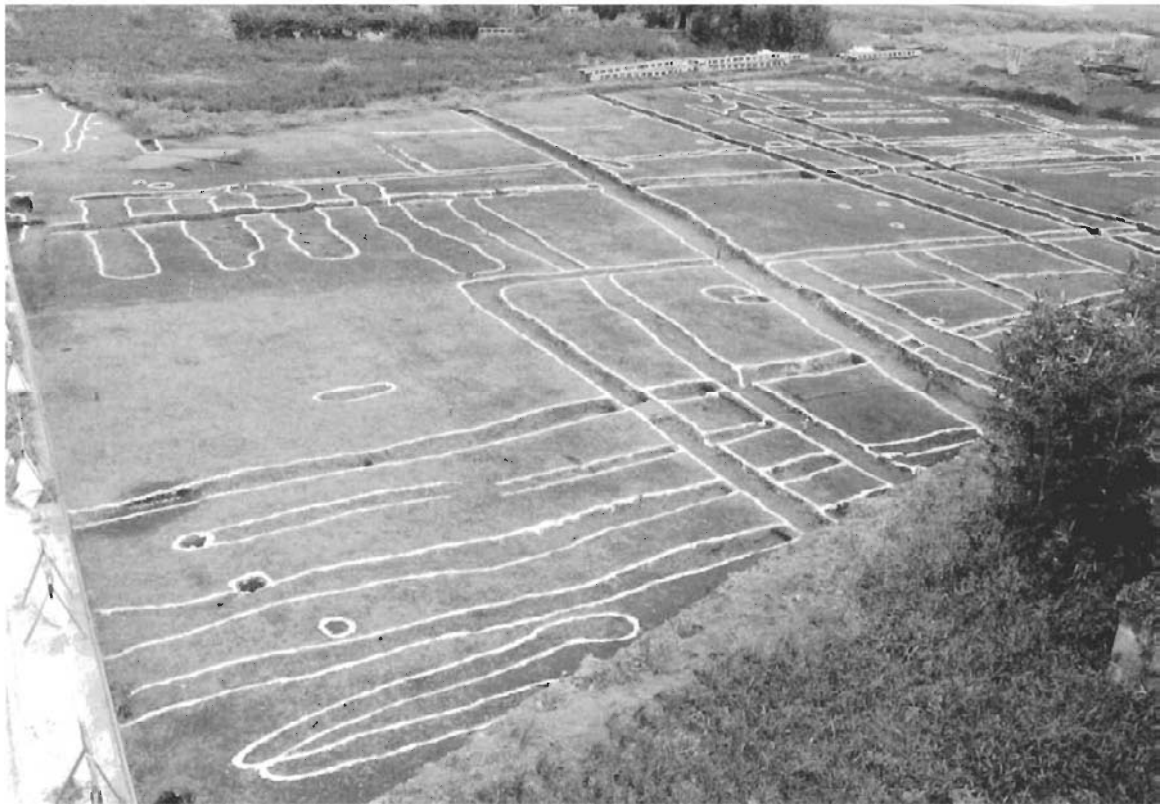
SD 16セクション



SD 17セクション



SD 28セクション



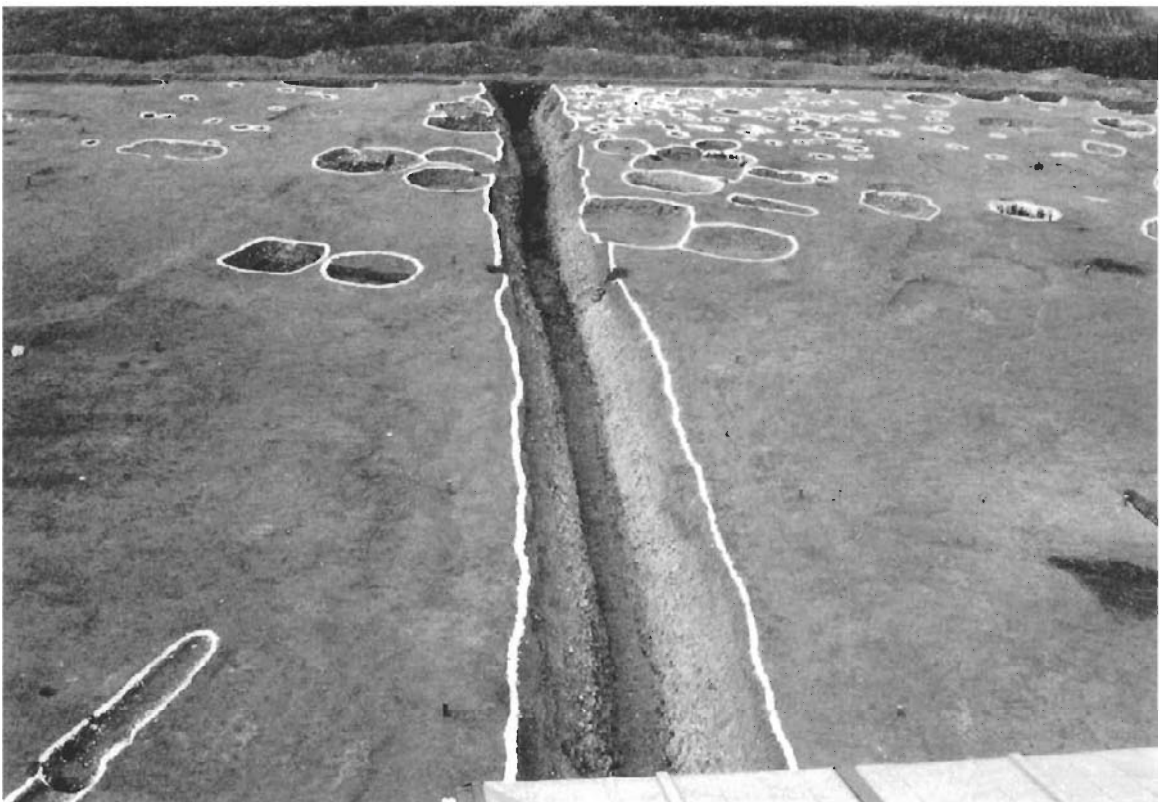
I区西半分完掘状況（西南から）



同上（東から）



I区東半分完掘状況（西から）

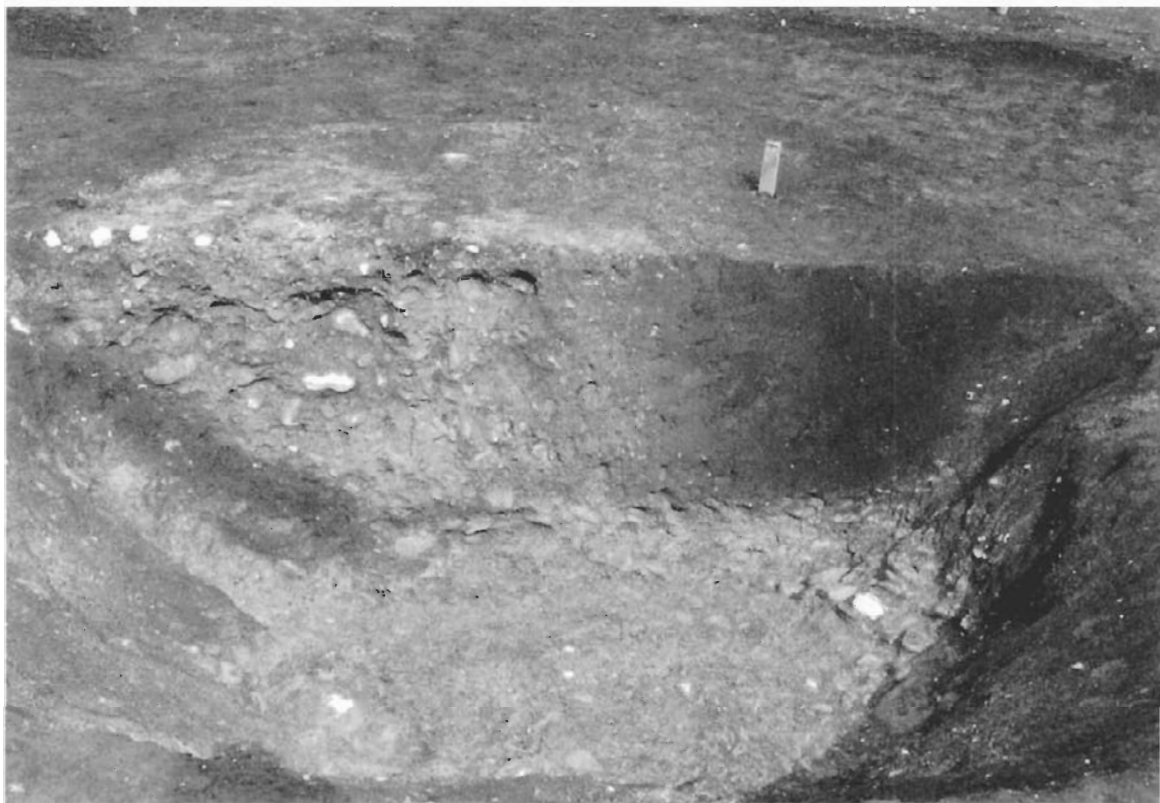


同上（南から）

PL 30



SX 1 半截状況

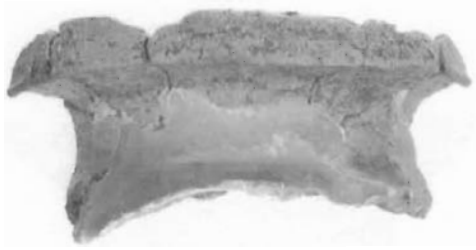


SX 2 半截状況

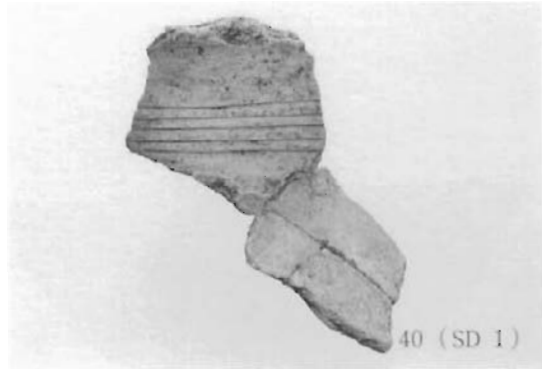


ST 1・3, P 3 出土の土器

PL 32



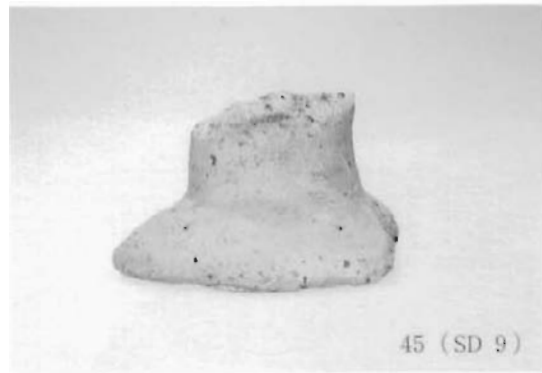
29 (SD 1)



40 (SD 1)



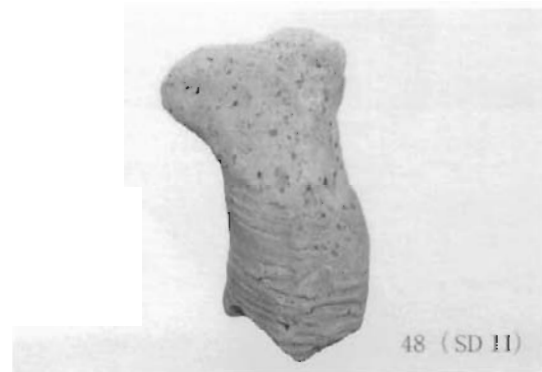
43 (SD 9)



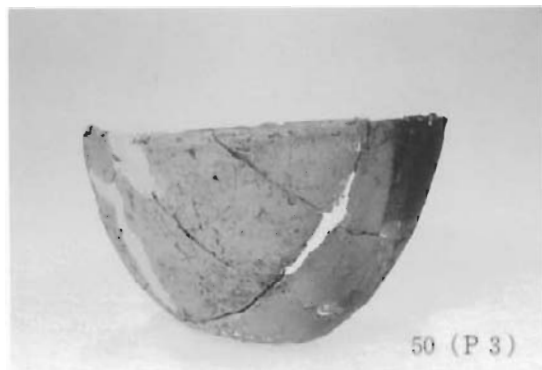
45 (SD 9)



54 (包含層)



48 (SD 11)

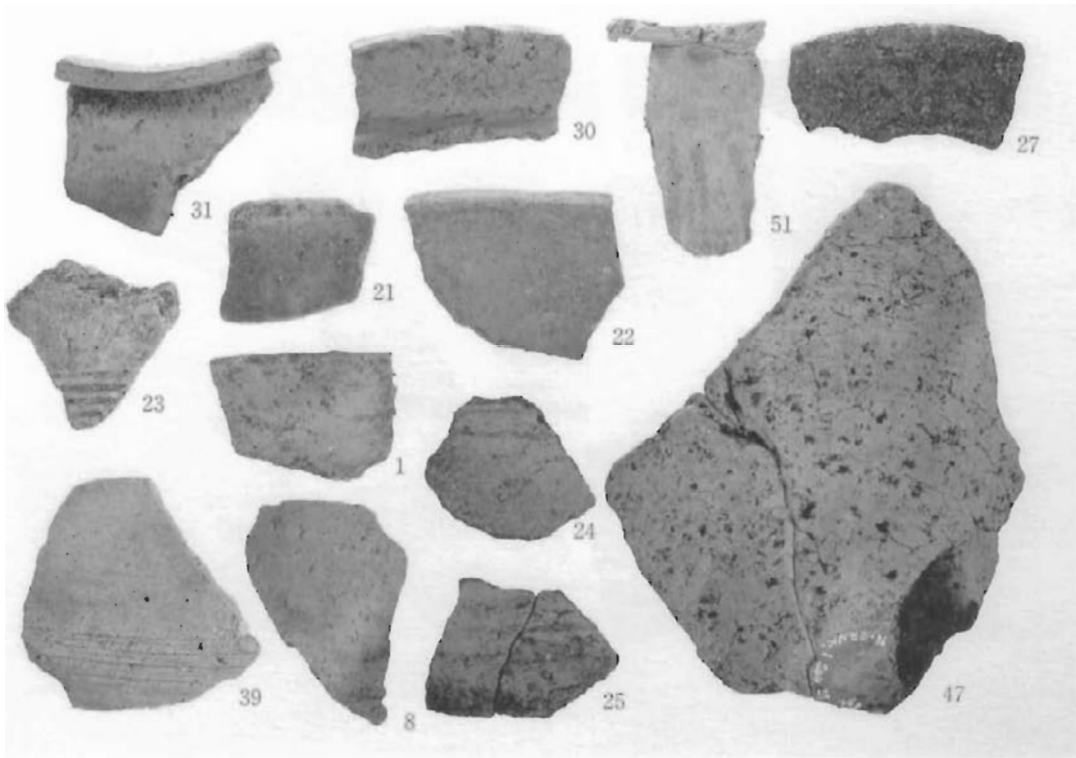


50 (P 3)

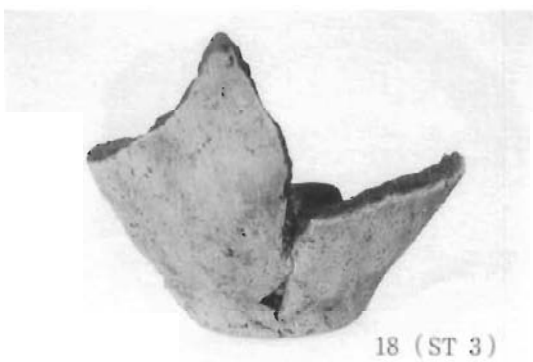


84 (SD 13)

SD 1・9・11・13, P 3, 包含層出土の土器

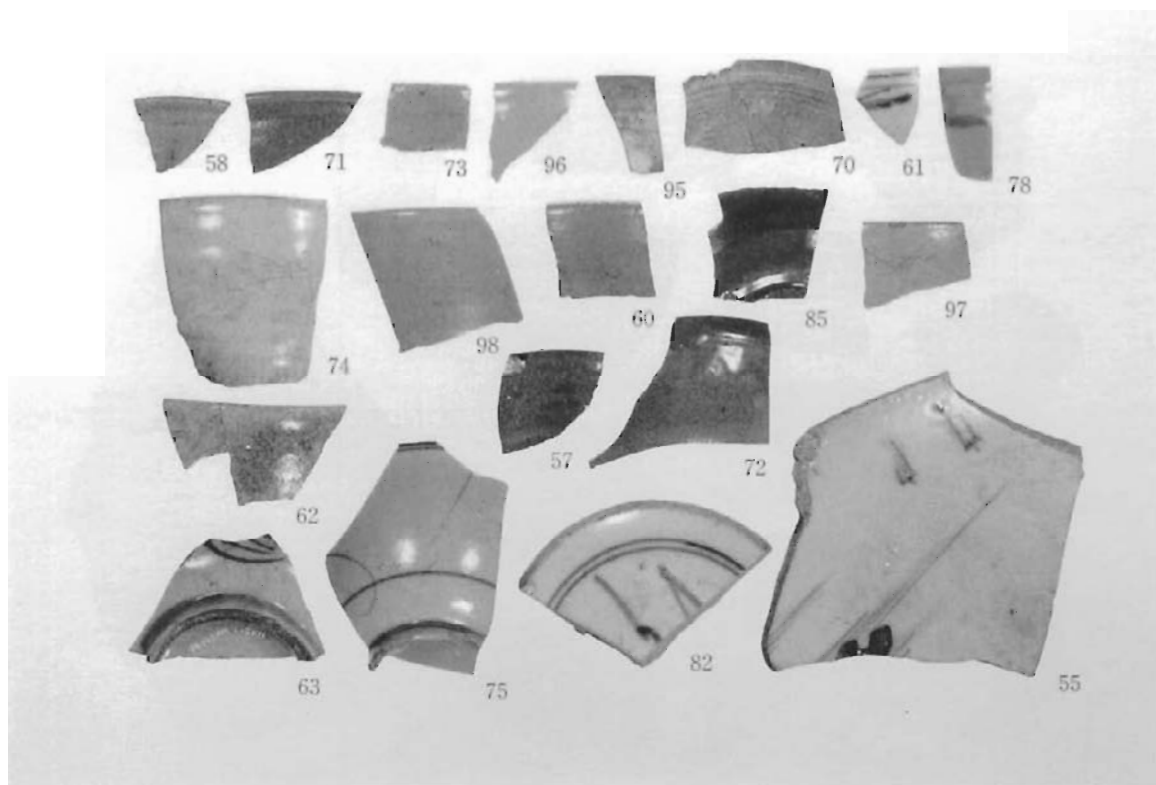


ST 1 (1・8), ST 4 (21・22), SD 1 (23~25・27・30・31・39・47), P12 (51) 出土の土器

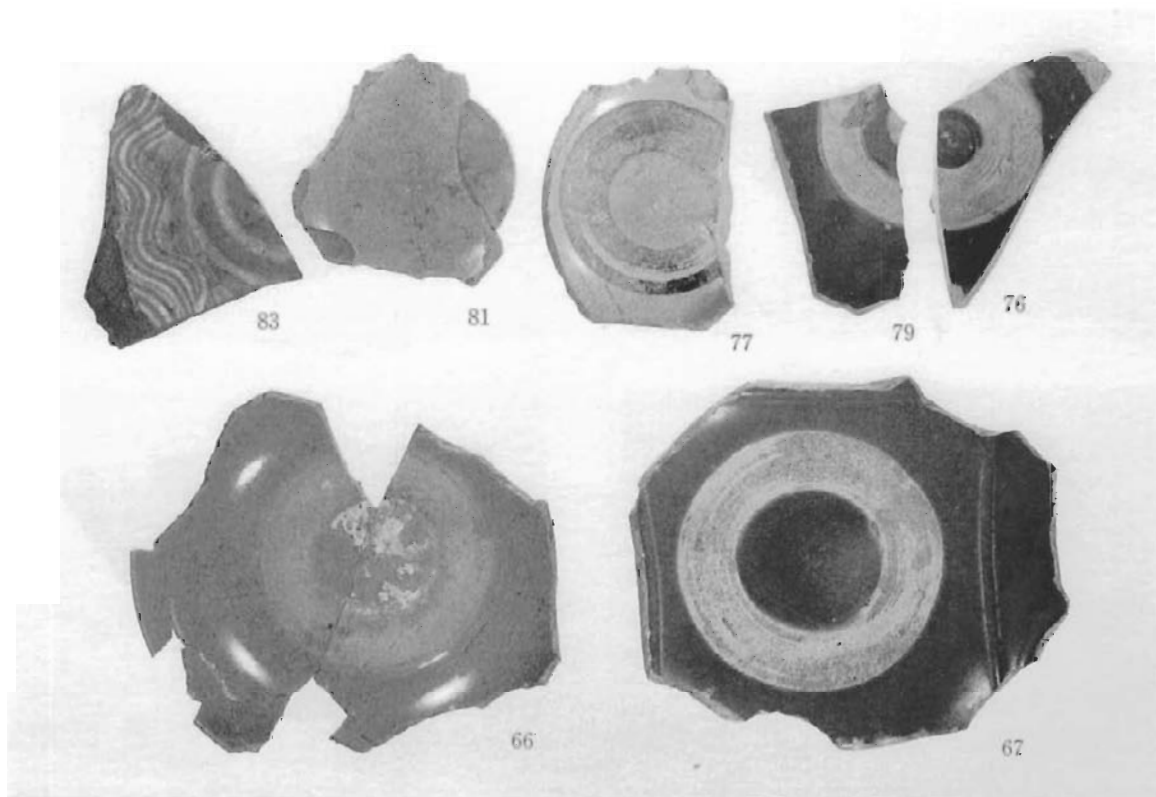


ST 1・ST 3 出土の土器

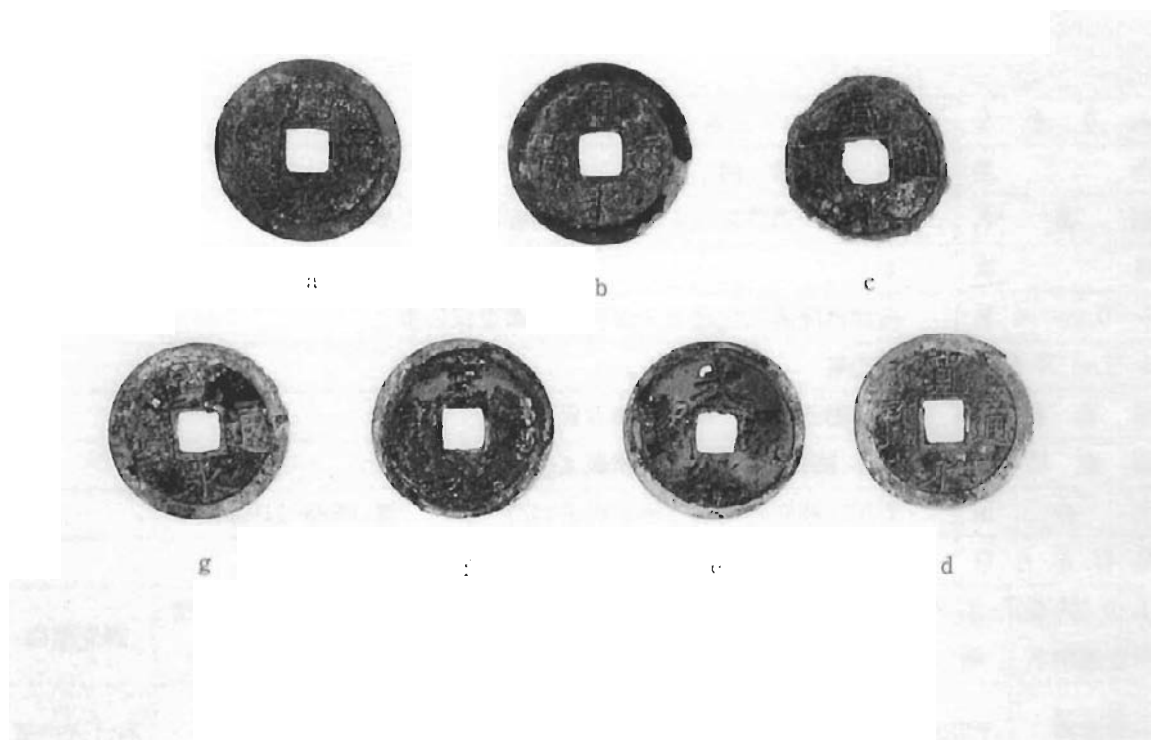
PL 34



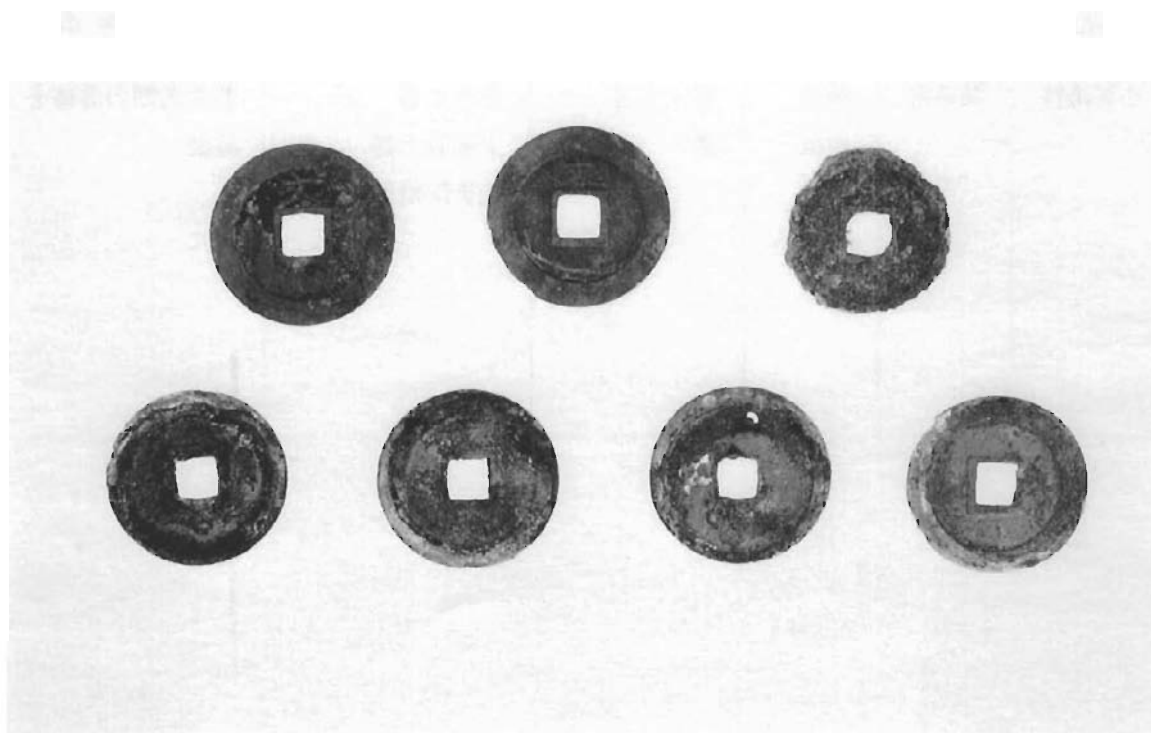
SK 5 (55), SK11 (57・63), SK12 (60), SK13 (58), SK14 (61), SK15 (62), SK21 (82), SK22 (72・73), SK23 (70・74), SK26 (75), SE 1 (77・78), SD 3 (85), P14 (61), P17 (96), P19 (95), P20 (97) 出土の近世陶磁器



SK 13 (66), SK 14 (67), SK 21 (83), SK 34 (76・79), SE 1 (77・81) 出土の近世陶磁器



SK17 (a, b, c), SK34 (d, e, f, g) 出土の古銭



同上 (裏面)

報告書抄録

ふりがな	こごめいせき							
書名	小籠遺跡							
副書名	あけぼの道路建設工事に伴う発掘調査報告書							
巻次	1							
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第20集							
編著者名	出原恵三・泉 幸代・藤方正治							
編集機関	(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター							
所在地	〒783 高知県南国市篠原南泉1437-1 TEL 0888-64-0671							
発行年月日	西暦 1995年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こごめいせき 小籠遺跡	〒783 南国市 岡豊町小籠	39204	040171	33° 34′ 40″	133° 37′ 50″	H 6 7月27日) 12月24日	8,506	あけぼの道路建設工事に伴う調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
小籠遺跡	集落跡	弥生 中世 近世	竪穴住居 溝	弥生土器 土師質土器 近世陶磁器		弥生前期の溝跡を確認		

小 籠 遺 跡 I

(あけほの道路建設工事に伴う発掘調査報告書)

1995年3月

編 集 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
発 行 高知県南国市篠原南泉1437-1
電話 (0888)64-0671
印 刷 西村 勝写堂

